小海町埋蔵文化財調査報告書第６集

穴沢遺跡

県内最古の石棒出現期縄文中期初頭集落址の調査

平成七年三月

長野県南佐久郡小海町教育委員会

序

小海町教育委員会
教育長　花　里　喜　男

穴沢遺跡は、山麓と山麓の間の緩傾斜面のくぼみに立地し斜面下段には穴沢川が流れ、北側に小高い山があるため、風をふせぎ、日当りもよく環境に恵まれた好適地が遺跡として選地されています。

今回、町道の拡幅により遺跡の一部が破壊されるおそれが生じたため、記録保存のため、関係各位のお力添えの下、発掘調査を行いました。

当初、３ｍの拡幅部分の調査をしたところ、８基の土坑が見つかり、そのうちの３基の土坑から土器・石器が埋設され、しかも日本で最古の発見となった石棒が、縄文中期初頭の土器を伴って出土しました。そのため、調査区域を拡大して調査する必要があると判断し、協議の結果、関係各位のあたたかいご理解により、緊急拡大発掘調査を行いました。

その結果、土坑36基、住居跡３軒が発見され、縄文中期初頭（約4,900年前）の集落跡であることがわかりました。

遺跡の特徴は、住居址の竪穴の部分が浅く、地山ローム層の平坦面に生活面の床が築かれていて、地形的な関係から集落は半円形であったとおもわれます。

また、石棒は男性性器をかたどった縄文中期の呪術の代表的な対象物で、子孫繁栄や五穀豊じょうを祈ったとされていて、これまで縄文中期中葉（約4,500年前）のものが日本最古とされてきたが、本遺跡から出土した石棒は縄文中期初頭の九兵衛尾根Ⅰ式土器と伴出しており、集落もこの時期単一であることから、明確に中期初頭と確定できる日本最古の石棒であるといわれています。

今後、小海町の原始時代の歴史解明に大きな成果を得ることができました。

今回の保存調査につきまして、多くの方々の深いご理解とご協力により、このような学術的価値を有する調査ができましたことに心より感謝申し上げます。

また、発掘調査作業、報告書作成作業等に格段のご尽力を賜わりました多々の関係各位に対し、深くお礼申し上げます。

平成七年三月

例　　言

1．本書は、長野県南佐久郡小海町大字豊里字穴沢371番地外に所在する、穴沢遺跡の調査報告書である。

2．本調査は、町道改良工事に先立って小海町教育委員会が、平成3年8月21日～9月18日まで第1次調査を実施し、翌平成4年10月1日～7日にかけて第2次調査を実施した。

3．本調査は、井出正義を団長とし、南佐久郡誌刊行会編纂委員、地元長野県考古学会員有志を調査員に、小海町志調査員、町志を読む会の皆さん、馬流地区、その他地区の方々の協力を得て実施した。

4．報告書作成の整理作業分担は、以下の通りである。

現場遺構実測図作成・遺物洗浄・註記――井出正義・三石延雄・佐々木春蔵・上原鐳三・柳沢恒喜・油井英一郎・有井忠雄・島田恵子

遺構実測図の整理・トレース――島田　恵子

土器の接合――島田　恵子・篠原　雅子

土器実測・トレース――島田　恵子

石器実測・トレース――吉沢　靖

土器拓本――新津　きし

図版作成――島田　恵子・篠原　雅子

5．本書の執筆は、下記により分担した。文責は文末に明記してある。

第1章　第1節・2節　調査事務局小平　文仁、第3節　島田　恵子

第2章　第1節　伴野　拓也、第2節　井出　正義

第3章　島田　恵子

第4章　島田　恵子　石器――吉沢　靖

第5章　島田　恵子

6．本書に掲載した遺構・出土遺物の写真は、島田が撮影したものを使用した。

7．本書の編集は島田が行い、井出正義団長が校閲・監修した。

凡　　例

1．各遺構の略号は、次のとおりである。
縄文時代住居址――J　　土　坑――D

2．住居址の記述は、検出位置とその状況――平面形態――壁――覆土――床面の状態――柱穴――炉――その他全体の観察――出土遺物の順に行った。
土坑の記述は、検出位置とその状況――平面形態――覆土――深さ――壁――底面の状態――その他――出土遺物の順に行った。

3．遺構実測図の縮尺は、次のとおりである。（挿図中にスケールを付し、縮尺を明記した）
住居址――1／60　　土　坑――1／30　（ただし、一ページに入らなかったものは、1／40とした図も若干ある）

4．遺物実測図の縮尺は、次のとおりである。
土器――1／3　　石器類――石鏃4／5・石鍬1／2・石棒1／3

5．図版の遺物縮尺は、土器約1／5、石器、石鏃――4／5、石棒1／4とした。

6．標高は、第1次調査、H＝955m・第2次調査、H＝958mを基準点として設置し、水糸レベルは各遺構毎に各々統一してある。

7　本遺跡から出土した資料は、小海町教育委員会の責任下により保管されている。

発掘調査中は、地主さんはじめ地元の方々にあたたかいご援助とご協力を賜りました。また、井戸尻考古館の武藤雄六・小林公明氏にはご指導いただき、感謝、御礼申し上げます。
報告書作成にあたり、金沢美術工芸大学教授小島俊彰先生、長岡市立科学博物館考古研究室小熊博史学芸員、富山県埋蔵文化財センター調査課主任神保孝造先生方には、数々の御教示をいただきました。さらに、報告書作成作業は臼田町文化センターの一室を借用させていただき、丸山正俊館長、大工原すみ江児童館主任に大変お世話をおかけしました。記して厚くお礼申し上げます。

本　文　目　次

題　字 ……小海町教育委員長　小池甲子次郎
序 ……小海町教育長　花里　喜男
例　言
凡　例
本文目次　付表目次
挿図目次　図版目次
第１章　発掘調査の経緯 …… 1
第１節　調査に至る動機 …… 1
第２節　発掘調査の概要 …… 1
第３節　発掘調査日誌 …… 2
第２章　遺跡の環境 …… 3
第１節　穴沢遺跡周辺の地形及び地質の概要 …… 3
第２節　考古学的・歴史的環境 …… 6
第３章　層　序 ……13
第４章　遺構と遺物 ……14
1　住居址 ……14
1）Ｊ１号住居址 ……14
2）Ｊ２号住居址 ……16
3）Ｊ３号住居址 ……18
2　土　坑 ……20
1）Ｄ１号土坑 ……20
2）Ｄ２号土坑 ……23
3）Ｄ３号土坑 ……27
4）Ｄ４号土坑 ……29
5）Ｄ５号土坑 ……30
6）Ｄ６号土坑 ……31
7）Ｄ７号土坑 ……31
8）Ｄ８号土坑 ……32
9）Ｄ９号土坑 ……33
10）Ｄ10号土坑 ……33
11）Ｄ11号土坑 ……34
12）Ｄ12号土坑 ……35
13）Ｄ13号土坑 ……35
14）Ｄ14号土坑 ……36
15）Ｄ15号土坑 ……37
16）Ｄ16号土坑 ……37
17）Ｄ17号土坑 ……38
18）Ｄ18号土坑 ……39
19）Ｄ19号土坑 ……40
20）Ｄ20号土坑 ……41

21）D21号土坑 ……42
22）D22号土坑 ……42
23）D23号土坑 ……43
24）D24号土坑 ……44
25）D25号土坑 ……46
26）D26号土坑 ……46
27）D27号土坑 ……48
28）D28号土坑 ……48
29）D29号土坑 ……49
30）D30号土坑 ……52
31）D31号土坑 ……53
32）D32号土坑 ……54
33）D33号土坑 ……56
34）D34号土坑 ……57
35）D35号土坑 ……58
36）D36号土坑 ……59
3　グリッド出土遺物 ……59
1）土　　器 ……59
2）石　　器 ……60
4　第2次調査 ……63
(1)　土坑状の遺構 ……64
(2)　ピット群 ……67
第5章　考　　察 ……68
第1節　遺　　構 ……68
1　住居址 ……68
2　土　坑 ……69
第2節　遺　　物 ……72
1　土　器 ……72
(1)　穴沢遺跡出土の土器群 ……72
(2)　川上村三沢遺跡出土の土器群 ……82
(3)　富士見町曽利遺跡出土の土器群 ……83
2　石　棒 ……84
(1)　小海町穴沢遺跡出土の石棒 ……84
(2)　佐久町北沢の大石棒 ……85
(3)　臼田町入沢の精製大石棒 ……86
(4)　石川・富山・岐阜県に分布する彫刻石棒 ……89
あ　と　が　き ……90

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 7
第２図　穴沢遺跡発掘調査区位置図 ……11
第３図　穴沢遺跡検出遺構全体図 ……12
第４図　穴沢遺跡層序模式図 ……13
第５図　Ｊ１号住居址実測図 ……14
第６図　Ｊ１号住居址出土土器拓影図 ……15
第７図　Ｊ２号住居址実測図 ……16
第８図　Ｊ２号住居址出土土器拓影図 ……17
第９図　Ｊ３号住居址実測図 ……18
第10図　Ｊ３号住居址出土土器拓影図 ……19
第11図　Ｄ１号土坑実測図 ……20
第12図　Ｄ１号土坑出土土器実測図 ……21
第13図　Ｄ１号土坑出土磨石状石器実測図 ……21
第14図　Ｄ１号土坑出土石棒実測図 ……22
第15図　Ｄ２号土坑実測図 ……23
第16図　Ｄ２号土坑出土土器実測図No.１ ……24
第17図　Ｄ２号土坑出土土器拓影実測図No.２ ……25
第18図　Ｄ２号土坑出土土器実測図No.３ ……26
第19図　Ｄ３号土坑実測図 ……27
第20図　Ｄ３号土坑出土土器実測図 ……28
第21図　Ｄ４号土坑実測図 ……30
第22図　Ｄ５号土坑実測図 ……31
第23図　Ｄ６号土坑実測図 ……31
第24図　Ｄ７号土坑実測図 ……32
第25図　Ｄ５号・Ｄ７号土坑出土土器拓影図 ……32
第26図　Ｄ８号土坑実測図 ……32
第27図　Ｄ９号土坑実測図 ……33
第28図　Ｄ10号土坑実測図 ……33
第29図　Ｄ11号土坑実測図 ……34
第30図　Ｄ11号土坑出土土器拓影図 ……34

第31図　D12号土坑実測図 ……35
第32図　D13号土坑実測図 ……35
第33図　D14号土坑実測図 ……36
第34図　D15号土坑実測図 ……36
第35図　D16号土坑実測図 ……37
第36図　D17・D18号土坑実測図 ……38
第37図　D14号・D15号・D17号・D18号土坑出土土器拓影図 ……39
第38図　D19号・D20号土坑実測図 ……40
第39図　D19号土坑出土土器拓影図 ……41
第40図　D19号土坑出土石棒実測図 ……41
第41図　D20号土坑出土土器拓影図 ……42
第42図　D21号土坑実測図 ……42
第43図　D22号土坑実測図 ……43
第44図　D21号・D23号土坑出土土器拓影図 ……43
第45図　D23号土坑実測図 ……44
第46図　D24号土坑実測図 ……45
第47図　D24号・D25号土坑出土土器拓影実測図 ……45
第48図　D25号土坑実測図 ……45
第49図　D26号・D27号土坑実測図 ……46
第50図　D27号・D29号土坑出土土器拓影図 ……47
第51図　D28号土坑実測図 ……49
第52図　D28号土坑出土土器拓影図 ……49
第53図　D29号土坑実測図 ……49
第54図　D29号土坑出土土器拓影図 ……50
第55図　D27号D29号土坑接合土器実測図 ……51
第56図　D30号土坑実測図 ……52
第57図　D30号土坑出土土器拓影図 ……52
第58図　D30号土坑出土土器実測図 ……53
第59図　D31号土坑実測図 ……54
第60図　D31号土坑出土土器拓影図 ……54
第61図　D32号土坑実測図 ……54
第62図　D32号土坑出土土器拓影図 ……55
第63図　D33号D36号土坑実測図 ……55

第64図　D34号土坑実測図 ……56
第65図　D34号土坑出土土器拓影図 ……57
第66図　D35号土坑実測図 ……58
第67図　D35号土坑出土土器拓影図 ……59
第68図　表面採集土器拓影図 ……59
第69図　穴沢遺跡出土石器実測図　石鏃No.1・石錐No.2・石鍬No.3 ……60・61
第70図　第二次調査穴沢遺跡検出遺構全体図 ……62
第71図　D1号土坑実測図 ……63
第72図　D2号土坑実測図 ……64
第73図　D3号土坑実測図 ……65
第74図　ピット群実測図 ……66
第75図　穴沢遺跡出土の土器群No.1 ……73
第76図　穴沢遺跡出土の土器群No.2 ……75
第77図　穴沢遺跡出土の土器群No.3 ……76
第78図　穴沢遺跡出土の土器群No.4 ……77
第79図　小海町小原遺跡・原村大石遺跡出土の土器群 ……78
第80図　川上村三沢遺跡出土の土器群No.1 ……80
第81図　川上村三沢遺跡出土の土器群No.2 ……81
第82図　富士見町曽利遺跡出土の土器群 ……82
第83図　佐久町北沢の大石棒実測図 ……86
第84図　臼田町入沢の精製大石棒実測図 ……87
第85図　石川・富山・岐阜県出土の彫刻石棒実測図 ……88

付　表　目　次

第1表　周辺遺跡一覧表 ……8
第2表　穴沢遺跡検出住居址一覧表 ……69
第3表　穴沢遺跡検出土坑一覧表 ……72
第4表　石川・富山・岐阜県出土の彫刻石棒一覧表 ……89

図　版　目　次

巻頭図版一　1．穴沢遺跡調査区全景（南方より）　2．日本最古の石棒が出土したＤ１号土坑全景

巻頭図版二　3．５個体分の土器が出土したＤ２号土坑全景　4．Ｄ３号土坑内中央に据えられていた深鉢

図版１　1．穴沢遺跡調査区全景（南方より）　2．Ｄ１号土坑

図版２　1．Ｊ１号住居址全景（南方より）　2．Ｊ１号住居址埋甕炉

図版３　1．Ｊ２号住居址全景　2．Ｊ３号住居址全景

図版４　1．Ｄ２号土坑　2．Ｄ３号土坑

図版５　1．Ｄ４号・Ｄ５号土坑　2．Ｄ６号土坑　3．Ｄ７号土坑　4．Ｄ８号土坑　5．Ｄ11号土坑

図版６　1．Ｄ12号土坑　2．Ｄ13号土坑　3．Ｄ15号土坑　4．Ｄ16号土坑　5．Ｄ17号・Ｄ18号土坑　6．Ｄ22号土坑

図版７　1．Ｄ19号・Ｄ20号土坑　2．Ｄ19号土坑の石棒根元破片出土状態

図版８　1．Ｄ26号・Ｄ27号土坑　2．Ｄ33号・Ｄ36号土坑

図版９　1．Ｄ23号土坑　2．Ｄ24号土坑　3．Ｄ28号土坑　4．Ｄ29号土坑　5．Ｄ32号土坑　6．Ｄ34号土坑

図版10　1．Ｄ29号土坑　2．Ｄ30号土坑

図版11　1．第２次調査区全景（北西方より）　2．第２次調査区全景（南東方より）

図版12　1．Ｊ１号～Ｊ３号住居址、Ｄ１号土坑出土土器・石器

図版13　1．Ｄ２号土坑出土土器

図版14　1．Ｄ１号・Ｄ３号・Ｄ５号土坑出土土器

図版15　1．Ｄ11・14・15・17・18・19・20・24・25号土坑出土土器

図版16　1．Ｄ29号土坑出土土器　2．Ｄ31号土坑出土土器

図版17　1．Ｄ27号・Ｄ29号土坑出土土器接合　2．Ｄ30号土坑出土土器

図版18　1．Ｄ30号・Ｄ32号・Ｄ34号土坑、表面採集土器

図版19　1．石　棒　2．石棒の根元　3．石鏃　4．穴沢遺跡出土の石鏃・石錐

図版20　1．発掘調査スナップ

第１章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る動機

穴沢遺跡は、西馬流部落の西側の台地で、地蔵平の段丘の末端、千曲川の谷にのぞむ段丘崖の崖端に位置し、穴沢の沢がここから北方に向かって傾斜している。

本遺跡は、依然から豊富な遺物が出土することで知られていた。

平成３年、ここに７ｍ巾の町道改良がおこなわれることになり、旧道ぞいの畑の約３ｍ巾だけ試掘すると８基の土坑が発見され、うち３基から縄文中期初頭の土器が出土し、そのうちの１基から亀頭をもつ石棒が発見された。

町教育委員会では、石棒の出土等によって畑地内まで拡大して調査する必要があると判断し地主の篠原良文氏、町議会文教委員をはじめ多くの方々の理解を得、急拠拡大発掘調査を行った。

調査団構成については、小海町教育委員会より井出正義先生を団長とする調査団を組織し実施した。　（事務局）

第２節　発掘調査の概要

○遺跡名　穴沢遺跡

○所在地　長野県南佐久郡小海町大字豊里字穴沢３７１番地外

○発掘期間　第１次調査　平成３年８月21日～９月18日

　　第２次調査　平成４年10月１日～７日

○調査実施者　小海町教育委員会

○調査に関する事務局

〈第１次平成３年度〉

篠原伸男	小海町教育長
井出泰輔	社会教育係長
井出　敦	社会教育係
井出直人	社会教育係

〈第２次平成４年度〉

篠原伸男	小海町教育長
井出泰輔	社会教育係長
井出　敦	社会教育係
小平文仁	社会教育係

〈第３次調査報告書作成・平成６年度〉

花里喜男	小海町教育長
篠原　淳	社会教育係長

小平文仁　　社会教育係

平林　博　　社会教育係

○発掘調査団組織

団　長　　井出　正義（長野県考古学会員・小海町志編集委員長）

担当者　　島田　恵子（長野県考古学会員・南佐久郡誌刊行会常任編纂委員）

調査員　　三石　延雄（長野県考古学会員）・佐々木春蔵（佐久考古学会員）

　　吉沢　　靖（長野県考古学会員）

地形・地質・石質指導　　伴野　拓也（中込小学校教諭）

現場指導　　武藤　雄六・小林　公明（井戸尻考古館）

協力者　　畠山　秀則（小海町志編集委員）

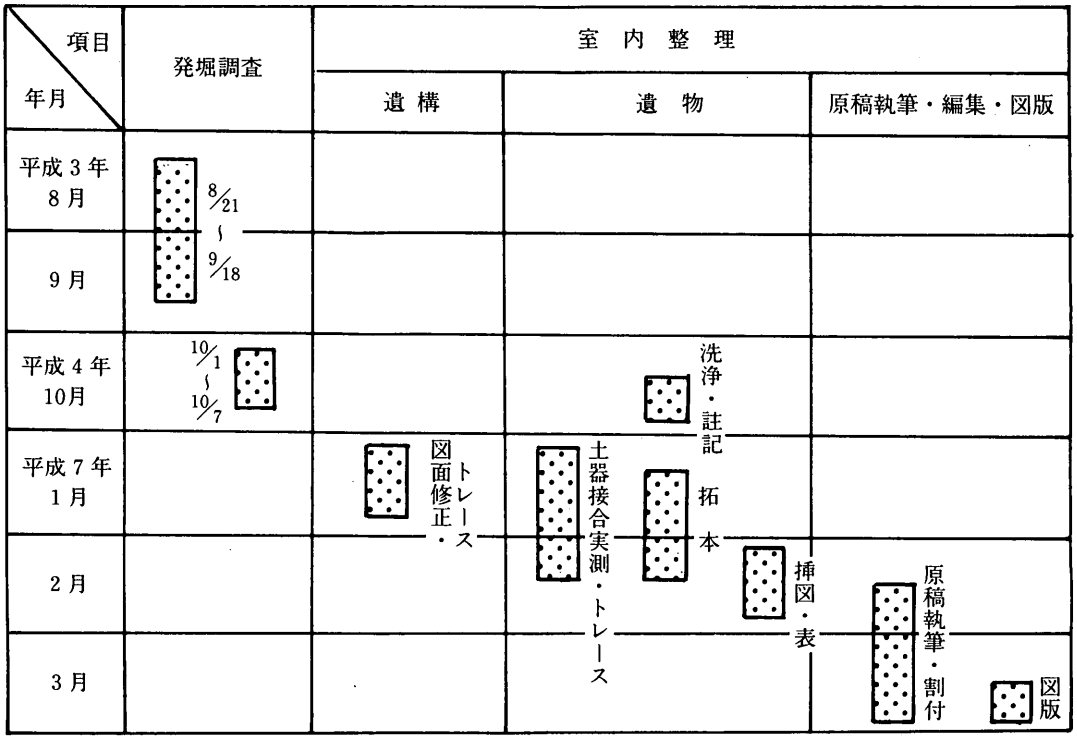
　　有井　忠雄・油井英一郎（以上小海町志調査員）

　　上原　鐳三・柳沢　常喜（佐久史学会員）

　　新津　きし・篠原　雅子（臼田町、報告書作成協力者）

第3節　発掘調査日誌

発掘調査および報告書作成は、三次三年度にわたったため、わかりやすくするため表に示した。



第２章　遺跡の環境

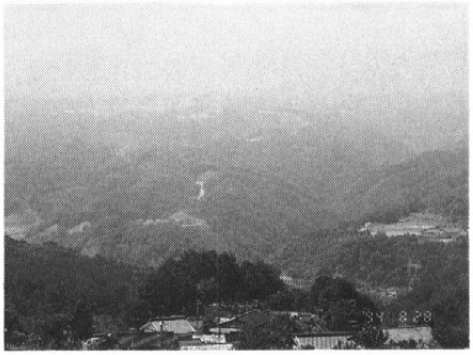
第１節　穴沢遺跡周辺の地形及び地質の概要

１　地質構造

地質構造の要素が居住箇所として人々の知恵によって決定していたことを印象づけたのが、この穴沢遺跡である。それは、とりもなおさず水の問題である。穴沢遺跡は水の恐怖はなく水を十分活用できる地質構造の要素を満たしている場所である。

南佐久地方の地形を概略的に眺めたとき、地形を特徴づけるものとして火山地形と水成岩からなる地形によって構成されている。両者の地形は南佐久を南北に縦断するかのように北流している千曲川を境界として異にしている。千曲川の西側には20kmにわたる火山列をなしている八ヶ岳火山群による堆積物、東側は秩父系の水成岩を主体とした地質構造をもっている。東西の地形は千曲川による侵食地形を示しているが、堆積物の組成や堆積物が生成された時代の相違から西側は侵食が進行し始めた幼年期地形、東側は壮年期地形となっている。この中で千曲川は両岸に見事な河成段丘を形成している。段丘は洪積世に形成された高層位段丘、氾濫原に形成された沖積世の低層位段丘が見られる。

穴沢遺跡は千曲川の河床から50ｍを越える高層位段丘の侵食が始まったＶ字谷の先端に位置している。段丘の構成物は千曲川の両岸を構成している火山堆積物や秩父系堆積物を含んだ湖成堆積物を主体としている。このため堆積物の淘汰はよく、堆積物の粒子が層別にそろっており、地下水の透水層と不透水層が互層となり地下水が湧水となりやすい堆積構造となっている。この湖成堆積物は南佐久層群といわれ洪積世中期から後期に形成されたものである。



高層位段丘面上の平坦面が広がる
筆岩地籍より穴沢遺跡方面を臨む

このように穴沢遺跡の地質的立地条件は火山堆積物、秩父系堆積物、湖成堆積物が直接、間接的に影響した地質事象から成り立っている。

２　各塁層の状況

(1)　秩父系堆積物

一般に秩父古生層といわれ、秩父地方を標準露頭とし、関東山地を広く構成している岩層で

ある。この秩父系は南佐久地方においては千曲川の西側では多くは観察されていない。日本列島を横断するフォッサマグナによって切断されたというのが一般的な見方である。つまり、南佐久地方の堆積物は秩父系の西端部と考えられる。このように、千曲川をフォッサマグナの構造谷と考えたとき、千曲川の西側には秩父系は存在しないというより八ケ岳火山噴出堆積物の基盤が秩父系と考えられている。

秩父系の標準露頭では構造性変成岩が多く観察されているが、南佐久地方ではフォルンヘルスといった熱変成を受けた砂岩や泥岩が多い。特に、花崗岩が餅盤状の山体となっている佐久町の茂来山、川上村の金峰山周辺のフォルンヘルスの分布も規模は大きい。また、岩脈の発達も著しく、大小あわせると相当な分布となっている。岩脈の岩相は流紋岩ないしは閃緑岩といった酸性岩の岩脈である。

秩父系を特徴づける岩相として、結晶化した石灰岩がレンズ状に現われたり、チャートが各所に分布している。

南佐久地方の秩父系のフォルンヘルス、餅盤、岩脈、チャートといった硬度の高い岩石の分布は、おのずと地形にも表れ、高い峰や険しい地形を形成している。千曲川の西側に見られる八ケ岳火山の山麓地形や南佐久層群からなる平坦部の目立つ段丘地形とは対照的である。

(2) 八ケ岳火山噴出物

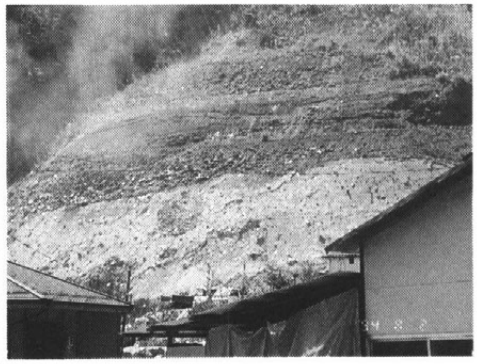
八ケ岳はフォッサマグナのほぼ中央部に噴出した火山群である。主峰を赤岳としている。火山の分布は南限を編笠岳、北限を蓼科山とする21kmにわたる火山列となっている。火山噴出物の分布はさらに広がり、南北55km、東西30kmとなっている。穴沢遺跡の地点は火山噴出物分布の東端に位置している。正確には、さらに東側の相木川に沿って分布しているが一般的には千曲川が分布の境界線となっている。

八ケ岳火山の噴出物は概略的に見ると溶岩流、岩砕流、泥流、ローム等に分類されている。これらの噴出物の分布は噴出源の近くは溶岩流、遠方にはロームというのが一般的であるが、噴出源から遠い千曲川地点でも噴出規模、地形などの影響で岩砕流の堆積が観察できる。八ケ岳の東山麓に見られる堆積物は火山発達史からながめると初期の活動による堆積物である。このため、以後の侵食も進み、堆積当時の地形は保たれていないが、現在の地形を切峰面図等で復元していくと、いくつかの平坦面が不連続に続く階段状の地形が現われてくる。以上のことから穴沢遺跡の下部を構成している火山噴出物は八ケ岳火山の初期活動によるものである。

八ケ岳東麓に堆積する噴出物の岩石的特徴は全般的に輝石の結晶の含有率が高いことである。特に、初期の噴出物の輝石の結晶は肉眼でも、その形態が判別できる巨晶も観察できる。穴沢遺跡において遺物として発掘された岩石や遺跡を乗せている台地を構成している岩石にも明瞭な輝石が観察できる。これらの岩石は、いわゆる円形の河床礫の形態をもっており、初期の噴出堆積物が泥流あるいは崩壊等の二次的堆積によるものと思われる。

(3)　湖成堆積物

千曲川の東側の秩父系と西側の八ケ岳堆積物の間にできた千曲川による侵食谷を埋めるように湖成堆積物が見られる。堆積規模はかなり大きく、北は小県郡から南佐久全域に分布している。堆積の下限は丸子町周辺で標高600ｍ台、上限は小海町周辺で1200ｍ台とかなり厚い。堆積物は一連のものではなく、２つの不整合面で区切られ、３つの塁層として扱われている。



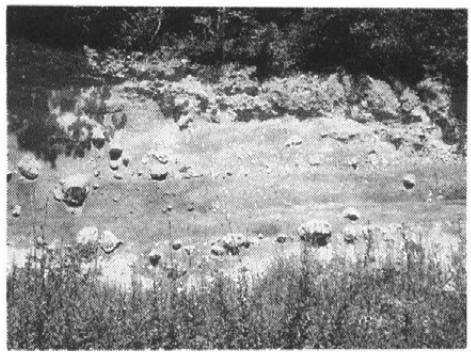
上は砂礫層、下は礫混じりの砂層の
南佐久層群露頭　北牧小学校西側

南佐久一体、特に穴沢遺跡を乗せる段丘は、湖成堆積物の最上部にあたり、南佐久層群といわれている。南佐久層群は下部の八千穂層群を不整合に覆い、佐久市以南の山間地一帯に分布しており、岩相は砂礫層を主体としている。穴沢遺跡の南500ｍの段丘崖には水平層が観察できる。礫種はその多くが輝石の結晶が明瞭な輝石安山岩、まれにチャート、花崗岩を見ることができる。

湖成堆積物の形成史は南佐久層群の場合、堆積層にはさまれている火山性降下物（ローム）の層序を解明することによって八ケ岳火山形成史と関連づけ、南佐久層群の堆積年代を推定するにいたっている。それによると小海町周辺の南佐久層群の上部は第四紀洪積世末期といわれている。

(4)　ローム層

南佐久層群を不整合に覆っているもので東信全域にわたり堆積している。赤褐色に見えることから“赤土”ともいわれている。場所によっては10ｍを超える厚さのこともある。穴沢遺跡の場合２～３ｍである。また、この周辺のローム層は上面に一般に“くされ礫”という指でもつぶれるほどやわらかい礫を含んだローム層が分布している。このローム層は地下水を大量に含んでいるといわれ、段丘の上面でも地下水の湧水が見られる。堆積年代は洪積世末期から沖積世前期と考えられている。この時期は湖成堆積物が堆積から侵食期に入り、河段丘の形成期にあたるため。ローム層の層序関係の追究によって段丘形成史を解明することができるようになった。この結果、穴沢遺跡のある段丘面は、さらに千曲川下流の佐久町海瀬の花岡地区のある段丘、上流にある小



指でも壊れるくされ礫を含むローム
水分を含みやすい　小海高校裏手

海町の小海原の段丘の三者を年代順に比較すると、最も古い段丘が花岡面、小海原面は最も新しいとされている。以上のことから、千曲川による湖成堆積物の侵食と河成段丘の形成は千曲川下流部から上流部へと進んだことになる。穴沢遺跡の河成段丘面の形成は沖積世に入ってからと考えることができる。（伴野　拓也）

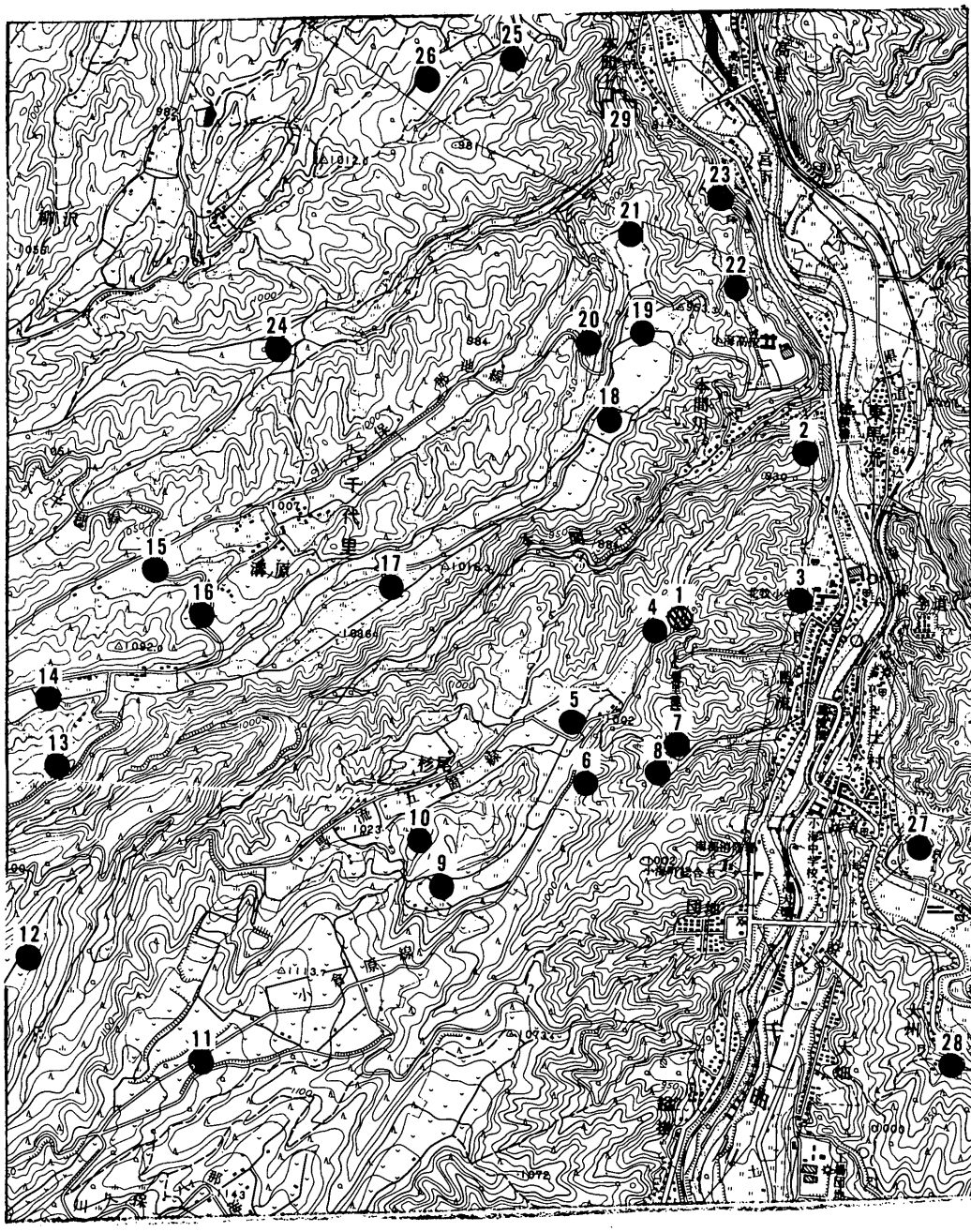
第２節　考古学的・歴史的環境

八ケ岳山麓の標高1200mから900mにわたり、北東に緩傾斜して千曲川の谷に落ちこむ、広大な高原性台地の末端に穴沢遺跡がある。この遺跡は、西南方八ケ岳の白駒池付近に源を発する本間川（上流は荒倉川）の右岸下流にあり、本間川との間に丘陵性の低い尾根が連なり、その南斜面にそって北東方向へ浅い谷が形成されて、その末端は馬流地区の北方で急崖をなして、千曲川の渓谷に落ちこんでいる。この北東方向の浅い谷が穴沢である。その谷底を穴沢川の細流が流れ、わずかの棚田や畑地が開かれている。

穴沢遺跡はこの穴沢の谷頭にあたる畑地に所在していて、今回の発掘調査で、縄文中期初頭九兵衛尾根式土器を出土する単一集落であることが確認された。またこの期の土器を大量に伴なった土坑から出土した大形有頭石棒は、日本最古の石棒と判定された。穴沢北方の尾根の先端、千曲川左岸の断崖上には小原遺跡があり、平成３年７・８月の発掘調査で、縄文前期初頭の花積下層式併行期住居址３棟と縄文中期前半の九兵衛尾根Ⅱ式～狢沢式併行期住居址３棟が検出され、穴沢遺跡との文化的関連や連続性を考える資料を提供している。穴沢遺跡の東の尾根を越えた千曲川側斜面山麓の北牧小学校遺跡は、小海町域の千曲川畔唯一つの縄文時代遺跡である。穴沢遺跡から穴沢川にそって下れば１㎞足らずで容易に千曲川に達することができる。千曲川畔の穴沢、小原・北牧小学校裏等遺跡の縄文人たちは、千曲川で魚をとり、夏は魚とりをかねて水浴もたのしんでいたこであろう。

穴沢遺跡から西方の広大な台地上には、たくさんの遺跡が分布しているが、本間川右岸では13遺跡（うち五箇・梨木沢の２遺跡は周辺遺跡分布図に入らない）のうち、蛇石遺跡を除く12遺跡はすべて縄文時代遺跡で、しかもそのうち８遺跡は平安時代遺跡と複合している。このことは、狩猟・採取を生活の主たる手段としていたといわれる縄文人にとって、ここがいかに恵まれた生活の場であったかを示している。広大な森や原野には、栗、クルミ、ドングリ、山ブドウ、タラノメ、ウド、ワラビ、ゼンマイ、ヤマイモ、クズの根、ヤブタケ、クリタケ、鹿、猪、兎、その他、木の実、山野菜、などの自然の採取のほか、それらを保護し、育て、雑穀類の焼畑農耕までもしていた可能性さえ考えられる。さらに水量豊富な本間川にはヤマメ、イワナがいて、マスも遡上してきたであろう。

弥生時代になって、稲作りが行われるようになると、人々は山地や高原の生活をすてて、気



第１図　周辺遺跡分布図（１：25,000）

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
1	穴沢	小海町大字豊里馬流	台地	○					平成3年9月発掘調査
2	小原	小海町大字豊里小原	〃	○					同7月～9月　〃
3	北牧小学校	小海町大字豊里馬流	山麓	○					
4	蛇石	〃	台地		○				
5	地蔵前	〃	〃	○					
6	地蔵平	〃	〃	○					
7	ヤソウダ	〃	山腹	○			○		
8	木の木沢	〃	〃	○					
9	芦の平	〃	〃	○			○		
10	五輪窪	小海町大字豊里杉尾	〃	○			○		
11	小倉原	小海町大字豊里鎰掛	台地	○					
12	梨の木原	小海町大字豊里梨ノ木沢	〃	○			○		
13	サラアカドウ	小海町大字千代里入相沢	〃	○					
14	入相沢	〃	〃	○			○		
15	上溝の原	小海町大字千代里溝ノ原	〃	○					
16	枝溝の原	〃	〃				○		
17	藤巻	小海町大字千代里本間川	〃	○					
18	中原	〃	〃	○					昭和62～平成5年発掘調査
19	下原	〃	〃	○			○		平成6年発掘調査
20	下相沢	小海町大字千代里宮下	山麓	○			○		
21	蛇岩	〃	台地				○		
22	宮上	〃	〃	○			○		
23	高根	〃	山腹				○		
24	大谷地	小海町大字千代里大谷地	山麓	○					
25	膳棚	小海町大字千代里本間	〃	○					
26	ヨシノクボ	小海町大字小海土村	〃	○			○		
27	向畑	小海町大字小海大州	〃	○			○		
28	大州	小海町大字千代里本間	山頂					○	
29	本間城跡	〃	〃					○	

候温暖、水利に恵まれた平地にくだってしまったといわれる。この八ヶ岳山麓の高原にも遺跡はほとんど見ることができない。そのなかで、穴沢、蛇石、五箇の三ヶ所だけが、弥生時代遺跡として記録されているのが貴重である。蛇石遺跡は穴沢遺跡のすぐ南に接する段丘上と考えられる。昭和31年発行『信濃史料』第一巻上考古資料編「北牧村」の項に「馬流穴沢（弥）箱清水、同蛇石（弥）箱清水式（蔵）北牧小学校」とある。北牧村の穴沢と蛇石の二つの遺跡から弥生時代の箱清水式土器が出土し、北牧小学校に所蔵されている。というきわめて重要な記録である。箱清水式土器は弥生時代後期に千曲川水系の地域一帯に広く製作使用された、櫛描波状文様をもち、塗朱された、いわゆる「赤い土器」と愛称される土器で、この土器が出土することは、そこに弥生時代後期の人々が生活していたことを実証できる重要な意味をもつ資料であるが、いまはすでに失われてしまっていて、それを知っている人もいない。しかし信濃史料の編纂にあたっては、専門職員が現地をまわり、一資料ごとに調査し、カードを作成し、厳密な審査を経て正確を期しているから、穴沢・蛇石両遺跡の箱清水式土器の記載についても十分に信頼できるものと考えられる。また同書の五箇遺跡の条には「（弥）磨石鏃、環状石斧（蔵）古田馨」とある。現在磨石鏃は失われてしまったが、環状石斧は有井忠雄氏が継承して、完形を保ちりっぱに保存されている。磨製石鏃は弥生時代中期後半以降に多く用いられた石鏃で、粘板岩を用いて、表面を美しく磨き、基部に小孔があけられている。狩や武器にも使われたと思われるが、より宗教的・儀礼的な意味をもち、祭りや儀式に宝器として用いられたといわれる。環状石斧は閃緑岩を磨いて、直径約10㎝の円形とし、中央に直径約４㎝の孔をあけてドーナッツ状になっている。中央部が厚く、周辺部へいくに従って薄くし、外縁は鋭い刃となっている。中央の孔に棒をとおして柄をつくり、武器や狩の利器として用いたものと思われるが、ニューギニアなどでは現在も儀式や祭の際に用いられているから、五箇の環状石斧も弥生人が、神に捧げるいけにえの動物の肉を裂くのに用いたものと考えられる。五箇は標高1130ｍ、八ヶ岳の山ふところにある山間の高冷地であるが、本間川の上流荒倉川の右岸にあり、豊富な湧水に恵まれて、はやくから開けた土地である。動物やイワナ、ヤマメなどの魚の豊富なこの地に、弥生人が狩猟の基地を置いて生活したものと考えられる。穴沢・蛇石・五箇の弥生時代後期遺跡は、当時この山間地に住んだ弥生人の生活・文化を考える上の重要な資料である。

古墳、奈良時代の遺跡はまだこの高原・台地には発見されていない。しかし平安時代になると、この段丘上がにわかに活気を呈してくる。本間川右岸の縄文時代遺跡は五箇、梨木沢を加えて14遺跡であったが、そのうち８遺跡は平安時代遺跡と複合している。つまり縄文時代の遺跡の約60％は平安時代遺跡として再びよみがえったことになる。この現象は小海町全体の遺跡について言える傾向であるが、それらの遺跡のうち、小海原雨堤、親沢弥左衛門屋敷の２遺跡については、小海町教育委員会によって発掘調査が行われ、灰釉陶器や鉄器を使用し、甲斐型坏・や墨書土器を用いるなど、甲州や東海地方とも交流をもち、文字も使用していた当時の

人々の生活の実態が明になっていて、これらの平安時代遺跡の居住者たちが、現代の小海町在住者の生活につながる可能性があるものと考えられる。

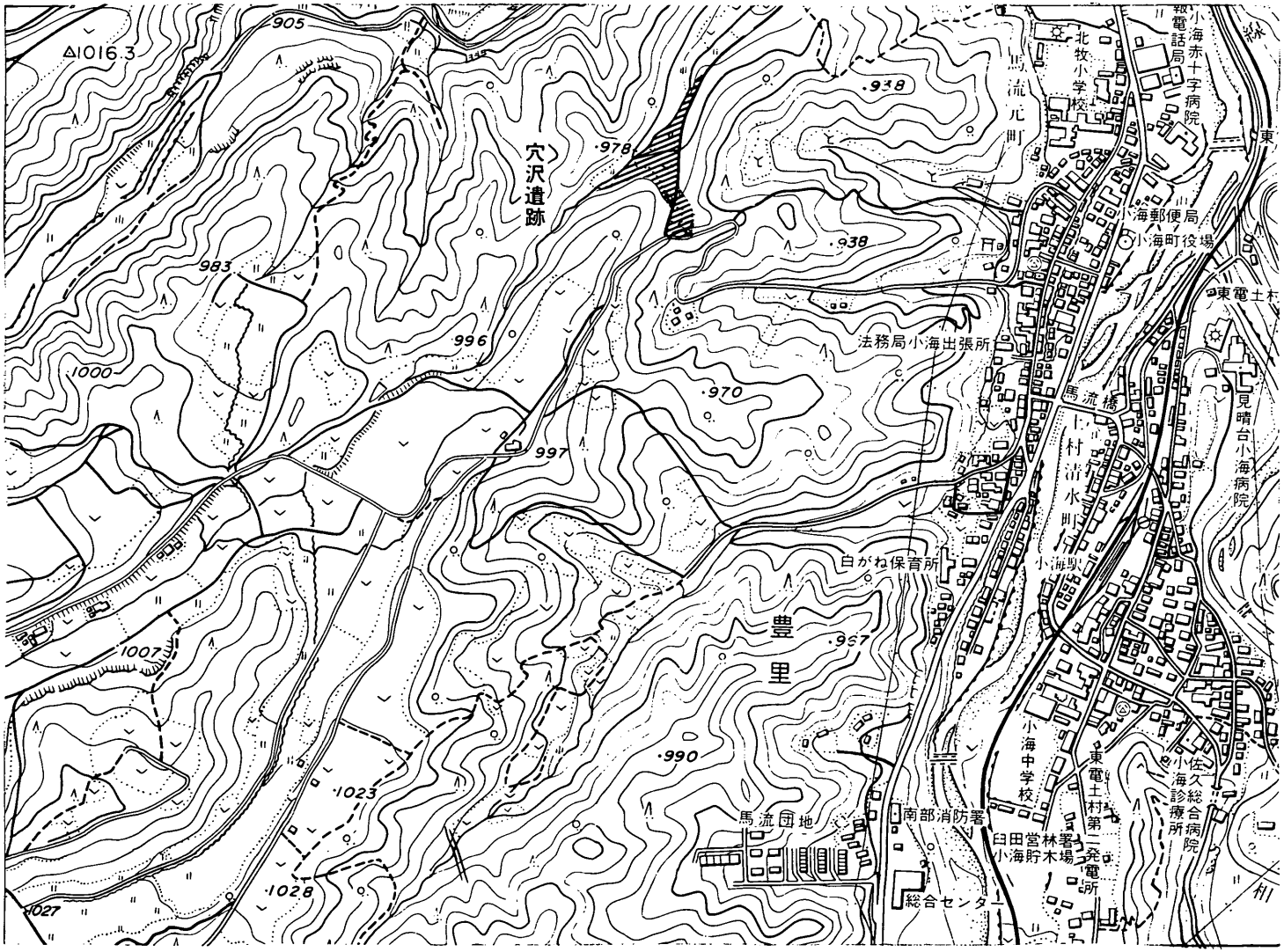
中世鎌倉時代にはこの辺一帯は千曲河畔の底地を含めて、伴野庄保間郷の地であった。建武2年(1335)京都大徳寺文書、佐久郡伴野庄郷村の年貢注進状に「保間　本畠二百五十貫文」とある。「保間」は現在の「本間」と同じで、当時「畑物村」(現在の上畑・中畑・下畑・大久保の総称)の南で、海の口郷(海尻を含む)の北に位置していた。保間の郷は二百五十貫の年貢を納める広大な畑作の村であるから、その畑地面積は100町歩以上と考えられる。伴野庄の年貢は麻糸や麻布が主であったから、畑の生産力の低下を防ぐため連作を避けて輪作を行っていたであろうから、この台地上にも肥えた土地をえらんで麻畑がつくられていたと想像される。しかし農業技術の進歩や生活の変化につれ、人々は千曲川沿岸低地の水利のよい土地を選んで水田(はじめは稗田が主)を開いて集落をつくるようになり、現在見られるような本間・宮下・本間川・馬流・鎰掛・八那池等の村がつくられ、高原・台地は各村入会の採草地や薪・板・材木等の採取地となった。戦国時代に信州に侵攻した甲斐の武田信玄は、この高原台地の末端に軍用道路を開いて、海尻から松原・八那池を経て、小倉原・地蔵前を直進して、穴沢から小原遺跡西側の鞍部を越えて本間川に入り、熊野神社付近の段丘崖を上って、宮上(宮下神社付近)に宿営して、佐久平や上州(余地峠)に向かった。

江戸時代となって平和となり、各村の人口も増えてくると、千曲川畔の谷間の村の人たちは八ヶ岳山麓の広い高原台地に田畑を開いて、新しい村をつくろうとするようになった。そうして最初に開かれた村が五箇である。八那池村の市郎右衛門らが、五ヶ村(鎰掛・馬流・本間川・宮下・本間)入会の清水平を見たてて新田開発願を出し、寛文5年(1665)に幕府の検地をうけて五箇新田村が成立した。豊富な湧水に恵まれた自然条件があったからである。

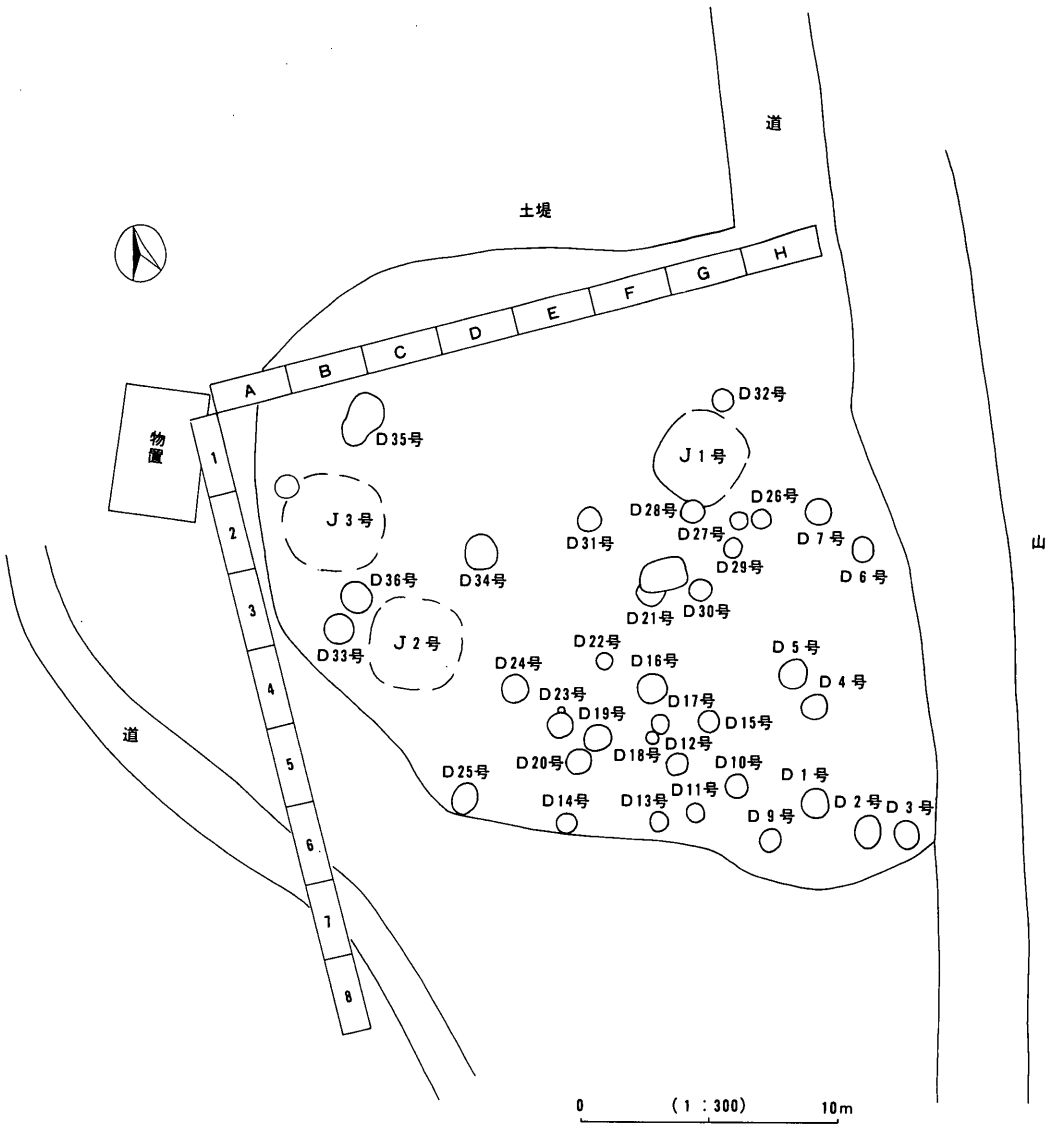
本間川右岸の杉尾・左岸の溝の原にも水田開発が計画された。しかし下流の古田に水利権をもつ本間川村の反対によって、着手できなかったが、幕末から明治初年にかけてようやく実現の気運が動いてきた。溝の原開田は幾度か失敗を重ねた上、宮下村の井出文左衛門ほかの人々によって明治13年(1880)に竣功の見とおしを持つことができた。杉尾の開田は馬流村の篠原権兵衛・同京助父子二代の生命をかけての努力によって、明治12年(1879)ようやく本間川村との調印にこぎつけたが、完成はさらに永い年月を要した。そのようにして近代に至ってようやくこの高原台地に水田開発が進み、杉尾、溝ノ原、相沢等の新しい村がつくられ、小海町の穀倉といわれるようになった。

しかし現在は、はげしい社会・経済の変動によって、適地、適作の農業合理化のもとに、一帯の高原台地は高原野菜の一大産地として変貌している。

(井出　正義)



第2図　穴沢遺跡発掘調査区位置図（1：10,000）

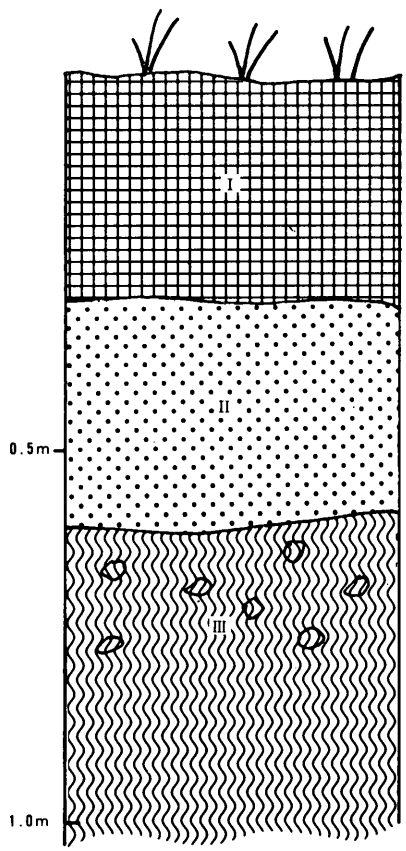


第3図　穴沢遺跡検出遺構全体図

第3章　層　　序

本遺構は、北東側に向かって傾斜する山腹の小さな沢に位置している。このため遺跡全体が凹地にあたるため、北風をさえぎり日当りの良い好適地であるといえる。また、杉尾部落から流下する小さな川が遺跡内を北東に流れやがて千曲川に合流する。日当り、水の便ともに居住地としては恵まれている。この沢の先端山頂に小原遺跡が所在している。

穴沢遺跡周辺の土層は、上面ローム層を基盤とした層に覆われているが、このローム層を60㎝程掘り込むと礫が混入するようになる。この礫は、つぶれるものと堅いものとに分かれ、遺構の底面に顔を出していた礫は堅かった。また、遺跡北方の山には巨石が点々と散見された。遺構内出土の板状の岩石は大粒の輝石が多量混入していた。



第4図　穴沢遺跡層序模式図

Ⅰ層　（褐色土）　耕作土（粒子細く粘性中）　層厚30㎝程で遺構が確認された。

Ⅱ層　（黄褐色土）　黄色の鮮やかなローム層で層厚30㎝を測る。1㎝大のパミスを含む。

Ⅲ層　（黄灰褐色土）　粘性の強いローム層中に灰色の礫（2㎝～5㎝大）が多量混入している。

第４章　遺構と遺物

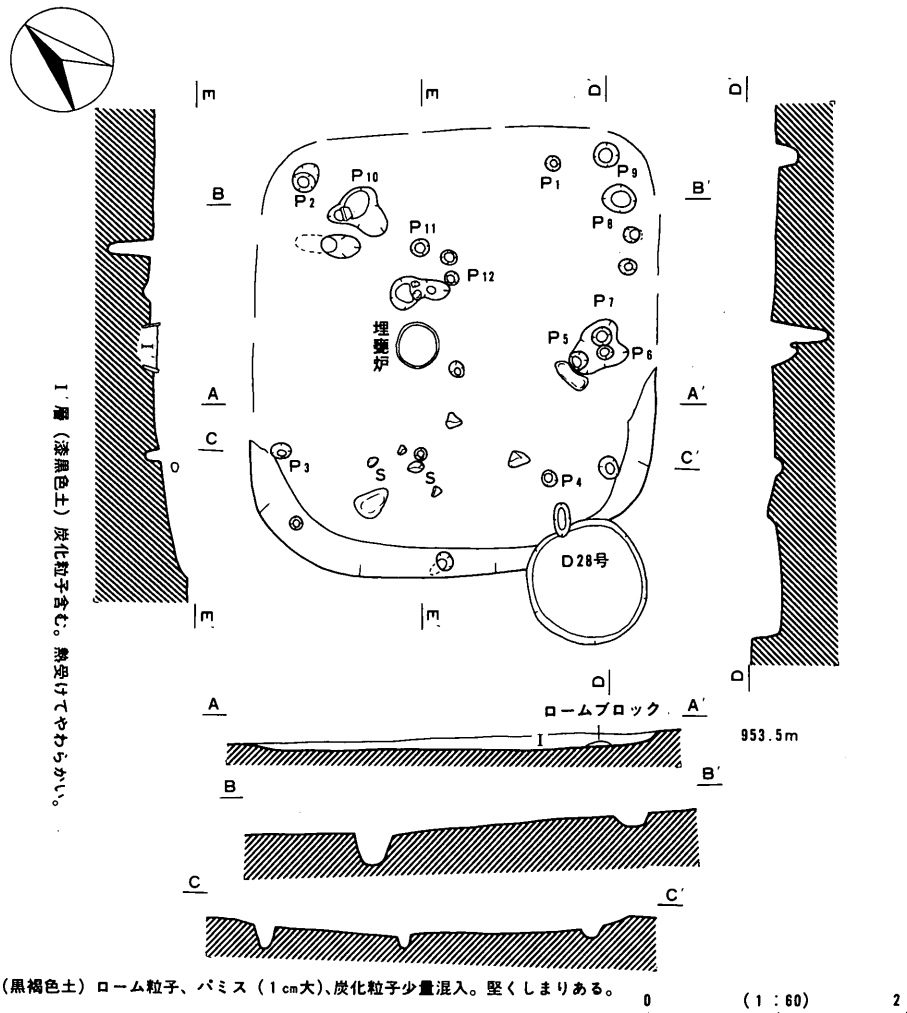
１　住 居 址

１）　Ｊ１号住居址

遺　構（第５図）

Ｊ１号住居址は、調査区の北東端のＦ・Ｇ－２・３グリッド内に検出された。北西コーナー寄りにＤ32号土坑が接触し、これに相対するように南東コーナー側にＤ28号土坑が重複している。住居址前方の北側には遺構は見当たらず、この地点で住居址および土坑は途切れる。

平面プランは、一辺3.4mを測る隅丸方形の住居址プランとなるとおもわれる。東土削平時



第５図　Ｊ１号住居址実測図

点においてすでに住居址床面付近に達していたため、かろうじて残った南東側の状態から推定される。主軸方向は、N－45°－Eを示す。

覆土は、わずかに残っていた南側にトレンチを入れた。黒褐色土が3㎝～10㎝堆積しており、ローム粒子と1㎝大のパミスと炭化粒子を少量混入した締まりのある堅い土層であった。

壁高は、ようやく残っていた南東側が10㎝足らずで、自然地形による傾斜が若干みられる。それは、北東側に10㎝程レベルが下がるが、目立ったものではなくほぼ平坦な床面であるといえる。床面はいくらか堅固な面もみられるが全面貼り床的様相はみられなかった。

柱穴は、直径10㎝を測る小さな穴が13個、15㎝～30㎝内外の穴が10個と計23個の穴が存在している。この内、柱穴としての機能を持つ穴は、P_1～P_4で深さ20～40㎝を測り、約2m～2.3mの間隔をもって配置している。この他、東壁側中央に3個の深い穴がある。また、P_8・P_{11}・P_{12}も細いがしっかりした掘り込みをもっており、なんらかの役目があった柱穴であるとおもわれる。いずれにしても数多い穴が認められる。

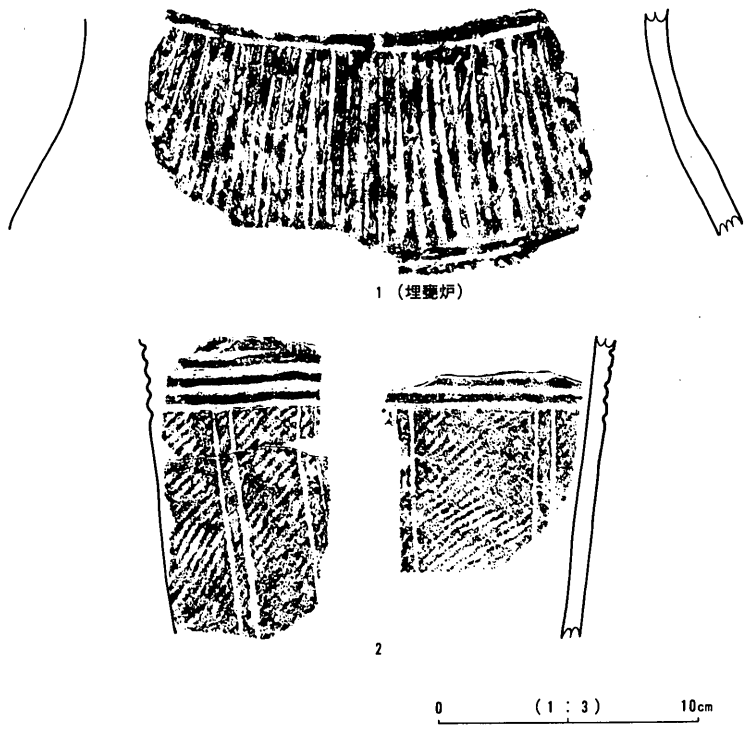
炉は、住居址中央からやや北西寄りに埋甕炉が設置されている。直径34㎝の土器が埋め込まれており、焼土の堆積は床面精査の折に若干認められたが、甕の中は炭化粒子を含んだソフトな漆黒色土が充塡していた。土器は熱を受けてかなりもろくなっている。

遺　物（第6図）

本住居址から出土した遺物は、第6図に拓影で示した深鉢2点と、土器細片、黒曜石、チャート剝片12点が全てである。

耕作土は住居址床面付近まで達していたことから、遺物はすでに移動してしまったとおもわれる。

第6図1は、埋甕炉に埋め込まれていた深鉢で頸部～胴部にかかる部分が10㎝程の幅で残っていた。多分この状態で当初



第9図　J1号住居址実測図

から埋め込まれていたとおもわれる。

帯状の区画をもって、幅0.5cm前後に沈線をた垂下して刻む文様で構成されている。器形は、口縁でやや開き胴中央で最大径をもつ深鉢形土器であるとおもわれる。熱を受けて器肌が剝落気味である。頸部25cmを計測し大形の土器である。

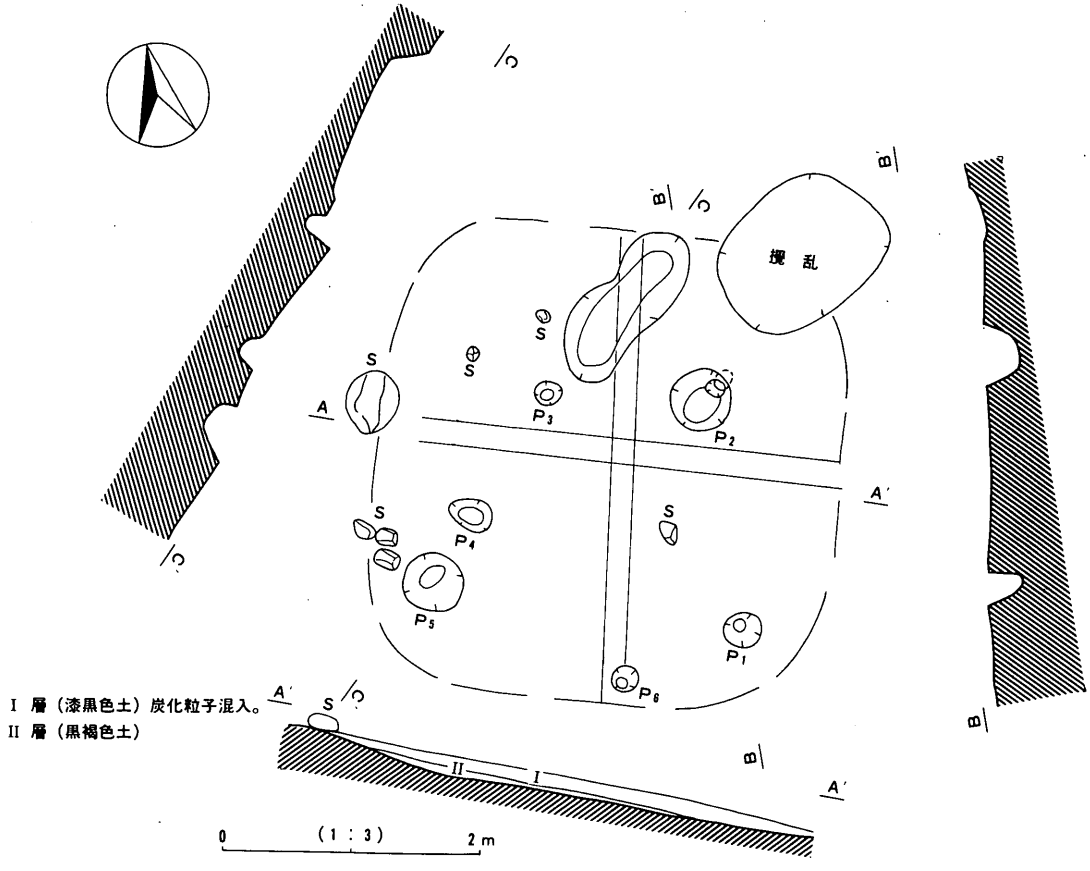
2は、横位の深い溝をもつ沈線文と胴部中央は斜縄文ならびに二条の沈線を垂下させた文様で構成されている。胴部最大径18.5cmを測り、口縁から胴下まで直線となる寸胴の器形の深鉢形土器であろう。器厚は0.6cmでやや薄い。内面にはうすいお蕉げ痕が認められる。煮炊きに使用された土器であろう。

本住居址は、以上の出土土器から縄文中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

2）Ｊ２号住居址

遺　構（第７図）

Ｊ２号住居址は、調査区中央の西端側に検出した。耕作土を取り除くと付近一帯はなだらか



第７図　Ｊ２号住居址実測図

な平坦地で黒色土に覆われていた。そのため、トレンチを残して掘り下げを行ったが明確なプラン確認には至らなかった。しかし、住居址が存在した様相は否定することはできなかったので、一応の目安として推定のプランを提示した。

平面プランは、一辺3.7mを測り、Ｊ１号住居址の形態から類推して隅丸方形が推定される。

覆土は、上面Ⅰ層は漆黒色土で、Ⅱ層は黒色土である。両層共に炭化粒子を混入していた。

床面とおもわれる底面は、堅緻な面は全くなくすでに破壊されているとおもわれる。地形的な傾斜の関係から、南から北へとレベルが40cm近い差があり、破壊の著しさが感じられる。

ピットは５個確認したが、柱穴とおもわれるものはP_1～P_4であるが、配列に規格性が全くみられないので不安は残る。

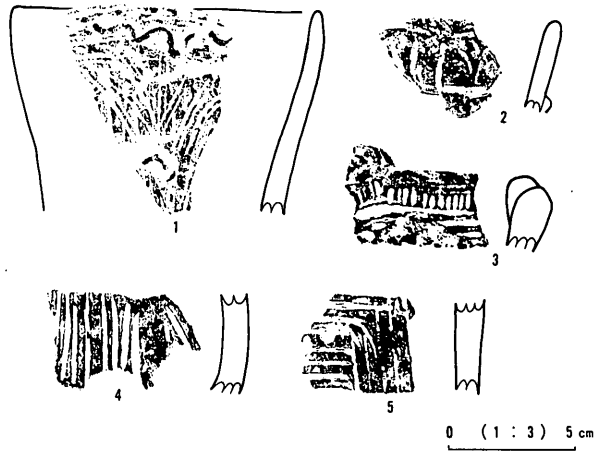
炉の痕跡は全く認められなかった。その他の施設として、住居址中央の北側に、50cm×135cmの細長い土坑状の掘り込みがある。最深部で25cmを測り、覆土は漆黒色土に覆われていた。また、北東コーナーに50×130cmの楕円形を呈した浅い落込みがある。攪乱であろう。

遺　物（第８図）

本遺構から出土した遺物は、第８図に示した拓影図と細片で20点を数える程度である。

１は、口縁に最大径をもち、第６図の２と器形が同一となる小形土器である。ソーメン状の貼り付けと細線文が乱雑に施されている。

２も小形土器の口縁部で浅い沈線文で構成されている。



第８図　Ｊ２号住居址出土土器拓影図

３は、口縁端部の内側に突起のついた口縁部片で、口縁部は連続した沈線文が施されている。半截竹管工具によって連続する削り込みを行っているとおもわれる。

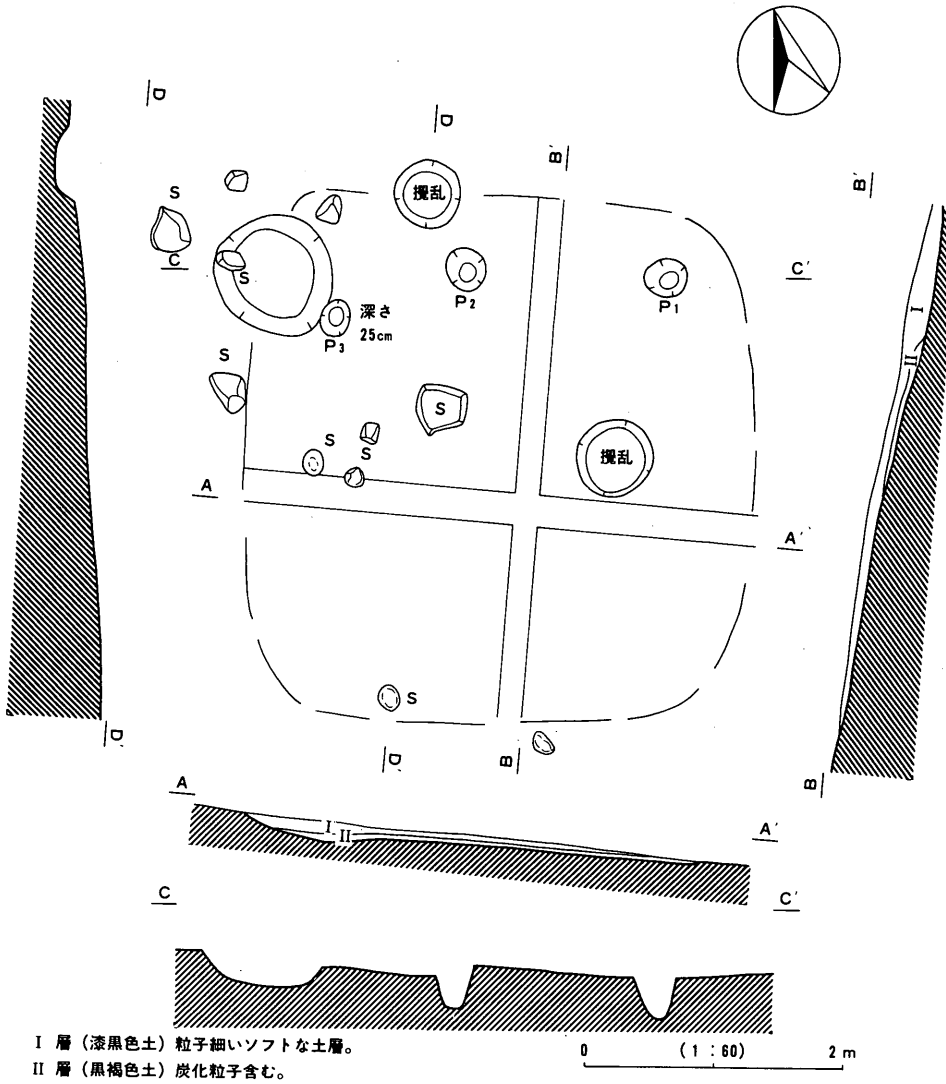
４は浅い沈線文が施されており、５はやや深い沈線が縦・横に施文されている。金雲母が目立つ。この他、渦巻のボタン状突起と貝殻状突起が各１個出土している。

１のソーメン状貼付文、ボタン状および貝殻状突起などから、前期末～中期初頭の籠畑式土器の影響が伺える。本住居址は、明確なプランの把握に至らなかったが、ここに集落が初めて営まれた初源期の住居址であった可能性が伺える。耕作土を削平した下部は漆黒色土が住居址と推定された部分にのみ堆積していたことからも充分考えられることである。

3）Ｊ３号住居址

遺　構（第９図）

Ｊ３号住居址と推定される遺構は、Ｊ２号住居址の北西側に隣接しているがＪ２号、Ｊ３号住居址の間に大形の深いＤ33号・Ｄ36号土坑が位置している。Ｊ２号住居址と同様に表土削平後、周囲は漆黒色土に覆われていたため住居址の存在が推定された。しかし、明確なプラン確認に至らなかったため、トレンチによる試掘から掘り下げを開始した。住居址の存在が推定さ



Ⅰ 層（漆黒色土）粒子細いソフトな土層。
Ⅱ 層（黒褐色土）炭化粒子含む。

第９図　Ｊ３号住居址実測図

れるグリッドは、A・B－2・3グリッド内にあたる。

平面プランは、一辺4mを測る隅丸方形の住居址であると推定した。

覆土は、Ⅰ層が漆黒色土で下部のⅡ層は黒褐色土である。Ⅰ層中には炭化粒子が含まれる。

柱穴は、P_1・P_2が計30cm、深さ30cmを測る。P_3が径22×28cm、深さ25cmで3個共にしっかりした掘り込みを呈しており、柱穴である可能性が高い。

また、地形の関係から南東側から北東側へと傾斜しているため、北側がレベル的に下っている。床面はわずか南側が残っており周囲と比較するとやや堅かった。炉の痕跡は認められなかった。

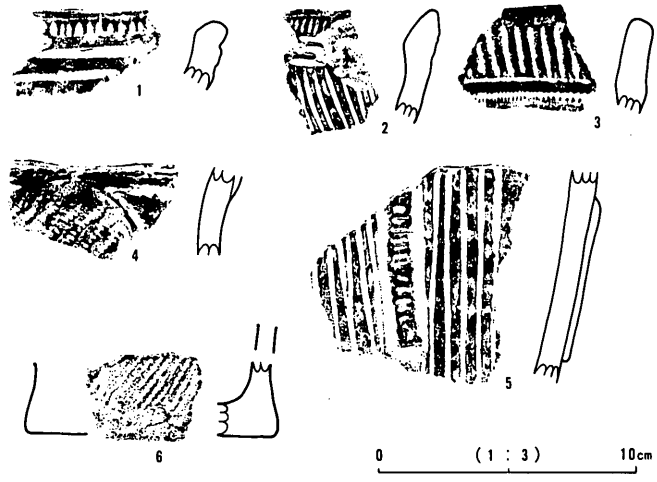
遺　物（第10図）

遺物は、土器片21点、黒曜石剝片2点が出土した。

第10図1は、口唇部に連続した刻目が施文され、口辺部は太い沈線が横位に二条みられる。

2は、口辺部に刻目が連続している。その直下に横位三条の沈縄があり、その下を縦に沈線が筋状に施されている。

3も口縁部片で、口縁部縦の沈線の下は、半截竹管工具による細い刻目のついた連続刻目文が施されている。



第10図　J3号住居址出土土器拓影図

4は、隆帯と斜縄文が施文されている。5は、等間隔に垂下した沈線文に一条の押引文が伺える。さらに粘土紐を貼り付け、横位に線の太い刻目を施文している。

6は底部片で、胴下まで斜縄文が施されている。共に焼成固く、石英、長石を多量混入している。

本住居址出土の土器も口縁端部内側の折返し的な三角形の部分が籠畑式期の影響を残している。その他、等間隔に垂下した沈線文の口縁部への施文なども同じ影響が感じられる。やはり、J2号住居址と同様の時期に住居址が存在していたと考えられる。

（島田　恵子）

2　土　　坑

1）　Ｄ１号土坑（第11～14図）

本土坑は、調査区南東端側のＧ－７グリッド内に検出された。左右にＤ２号・Ｄ９号土坑が隣接している。ここは、４ｍ幅の町道が東側の山沿いに通っていた道路際にあたる。

平面プランは、１ｍ×1.1ｍを測りほぼ円形に近いが、北東コーナー側に20㎝の出張りと穴が生じているため不整な形状を呈している。先端の穴は径10㎝×15㎝、深さ30㎝を測り大きく北側に傾斜して掘り込まれている。意図的になんらかの目的でつくられた穴ではなく、傾斜の状態からみて後に生じた木の根の痕跡であるとおもわれる。主軸方向は、Ｎ－70°－Ｗを示す。

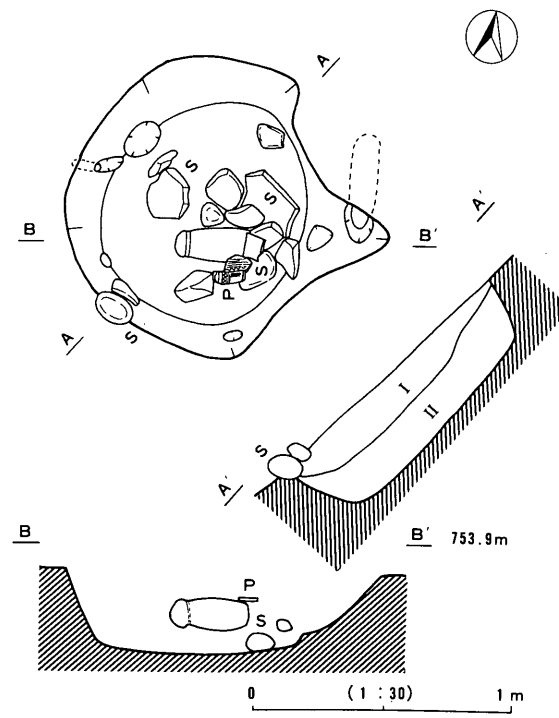
覆土は２層から成り、Ⅰ層が漆黒色であったためプラン確認は容易であった。Ⅱ層は暗褐色土で、Ⅰ・Ⅱ層共にローム粒子とパミス、炭化粒子を少量混入している。全体に粘性強く、粒子緻密で締りのある固い土層である。

深さは、最深部で30㎝を測り、壁はやや急傾斜で立ち上っている。床面はほぼ平坦である。南西コーナー側の壁立ち上り際に、第13図に示した楕円形の形の良い石が、角礫状の石と並んでいた。意図的で土坑の目印とした感を呈していた。

遺物は、10㎝程掘り下げた地点から先ず石棒の頭が姿をあらわした。続いて石棒の後方部を覆うような状態で土器口縁～胴下にかけての破片が出土し、さらに石棒の両側面から後方部には、10㎝×15㎝大の角礫や、20㎝～30㎝大の偏平な石が巡っていた。この平らな石を底面に先ず敷いて、その周囲を角礫や丸みのある石を敷いたとおもわれるようにほとんどの石が下部は偏平である。

第12図に示した土器は、石棒の左側上面に敷いた状態に置かれてあった。５箇所にひび割れがあったが全部接合できたので、埋設当初は割れていなかったとおもわれる。

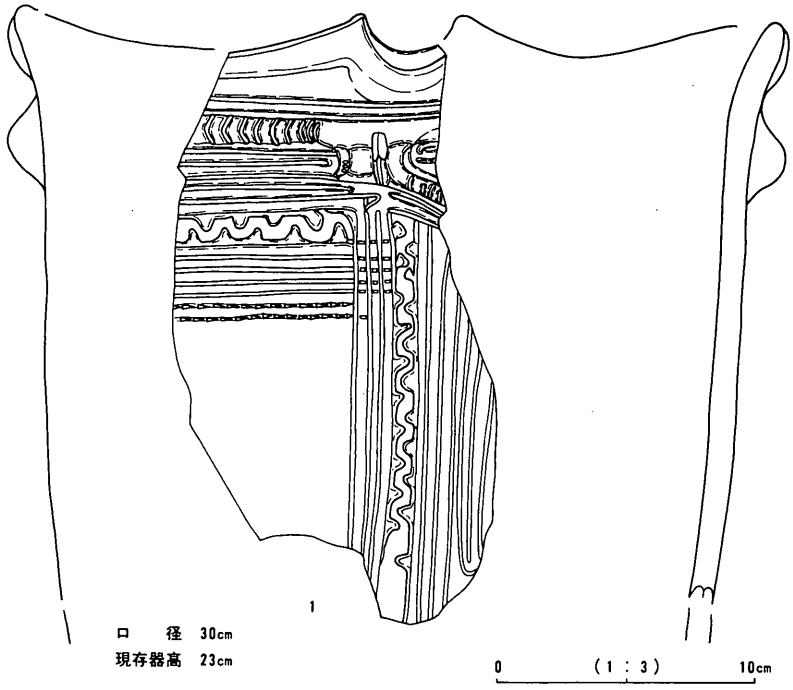
口径30㎝を測り四山の波状口縁を呈す。口縁が外反するが胴下までスト



Ⅰ 層（漆黒色土）粘性強く粒子緻密。ローム粒子、パミス（１㎝大）炭化粒子少量混入。

Ⅱ 層（暗褐色土）粘性強く粒子緻密。ローム粒子、パミス（１㎝大）炭化粒子多量混入。締りあり堅い。

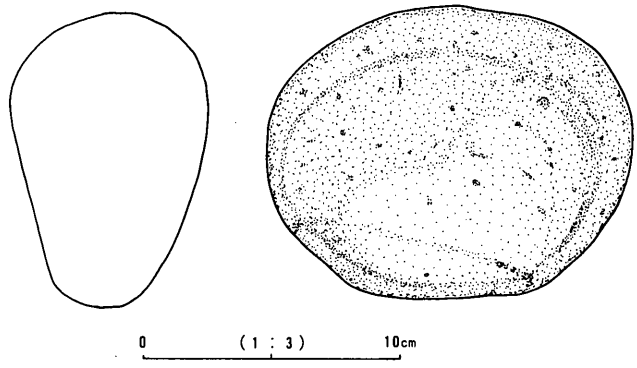
第11図　Ｄ１号土坑実測図



第12図　Ｄ１号土坑出土土器実測図

レートに降りる器形であると推定される。現存の器高は22cmを測る。文様は横位・縦位の沈線文と鋸歯文・刺突文・竹管文で構成される。沈線は横位が深い。

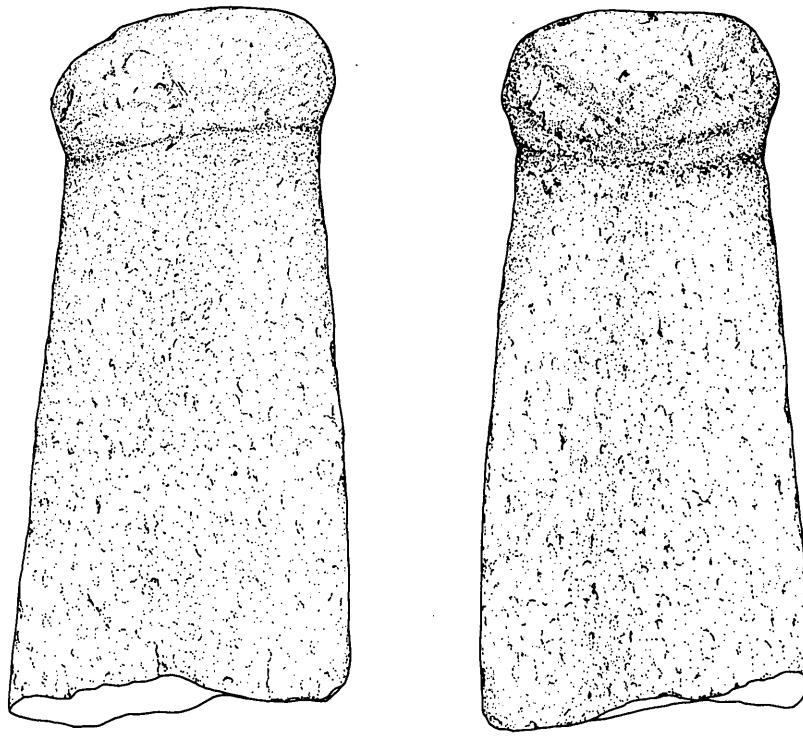
口縁部直下には、横位二条の沈線文があり、その下部に隆帯が巡っている。隆帯には、半截竹管による連続文が施され、四山の中心にあたる部分の隆帯はX状に飾られている。胴部は、四条の横位、縦位の沈線文の間にそれぞれ鋸歯文が施方されている。また、横位の沈線文の最下部には三角形の連続刺突文が二条巡っている。



第13図　Ｄ１号土坑出土磨石状石器実測図

茶褐色を呈し、胎土中に金雲母、長石、石英を多量混入する。焼成は固い。内面にはお焦げの付着は全く見られない。

この他、無文土器９点と地文に斜縄文が施され、その間に結節縄文で文様を作り出した細片



第14図　Ｄ１号土坑出土石棒実測図

が１点出土している。

第13図の磨石状の石器は、壁立ち上り際に置かれていた石である。11.3cm×14cmで厚さ４～7.5cmを測る。下端部が４cmで厚さが一定でない。両面共に中心部に磨り痕が認められる。なんらかの用途があったとおもわれる。石質は安山岩である。

石棒は坑内中心部からやや南よりに位置し、頭を西側に向けて横たわった状態に出土した。長さ29.5cm、頭部の幅５×11.8cmで頭の縦幅がせまく一部偏平である。根本に向かって直線的に開くので最下端部が最大径13cmとなる。頭と根本に熱を受けた煤の付着が認められる。底部が磨かれていないことから破損であると推定される。石質は溶結凝灰岩を素材としているが、石基は緻密で重い。

本土坑の所産期は、出土した土器から中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定される。県下における石棒の出現期は現在までのところ中期中葉が最古とされていた。しかし、本調査によって明確に中期初頭であることが裏付けられたのである。最古とされる藤内遺跡７号住居址出土の石棒は無頭であるということからもその意義は大きい。

２）　Ｄ２号土坑（第15～18図）

本土坑は、Ｄ１号土坑の南東側Ｇ－７・８グリッドにまたがって検出された。接近した東側にＤ３号土坑が所在する。ここは、従来の道路の下にあたる。そのため、表土を削平した時点から土器が確認面に少量散見していた。道路造成の際多少の移動があったとおもわれる。

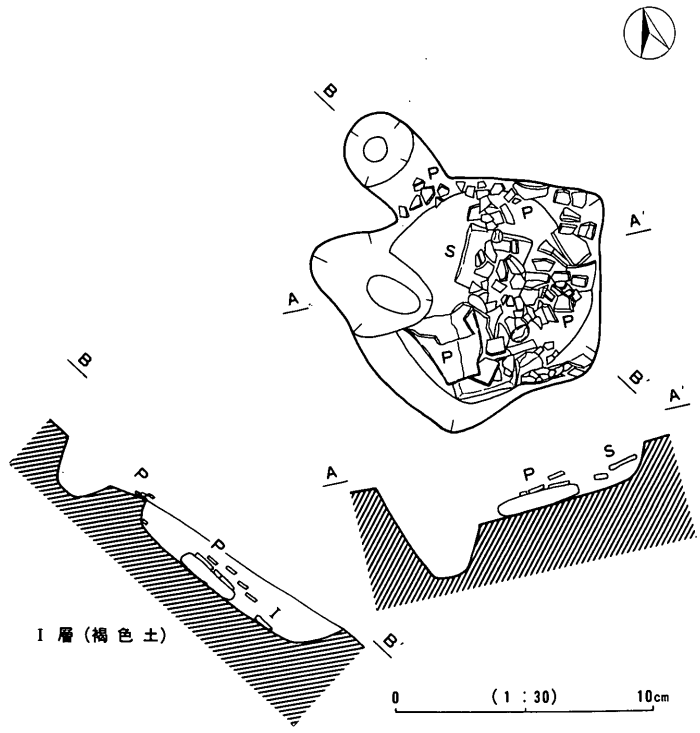
平面プランは、北西側に２箇所の穴が生じ、さらにコーナーが角張っているため、不整な方形ともいうべき形状を呈している。長軸側が1.1m、短軸側が１mを計測する。主軸方向は、ほぼ真北にあたる。

深さは、15cmを測り、坑内全面に土器が敷かれたような状態に広がっていた。こうした状況から覆土の断面図は浅いことと合わせて粉々に割れている土器を動かしてしまうため観察にとどめざるを得なかった。

底面は、地形に沿って東側から西側にやや傾斜しているが平坦である。

土器は、坑内中心部に22cm×26cm、厚さ７cmの長方形の石を敷き、その上に第16図１の土器が横たわっていた。また、坑内中央には平らな石を立てた状態に置き断面６cm幅が顔を出していた。さらに、西壁際には第17図４に示した深鉢形土器が口縁部を欠失した状態に横たわっていた。この他、浅鉢口縁部片、深鉢口縁部片がぎっしりと埋まっていた。

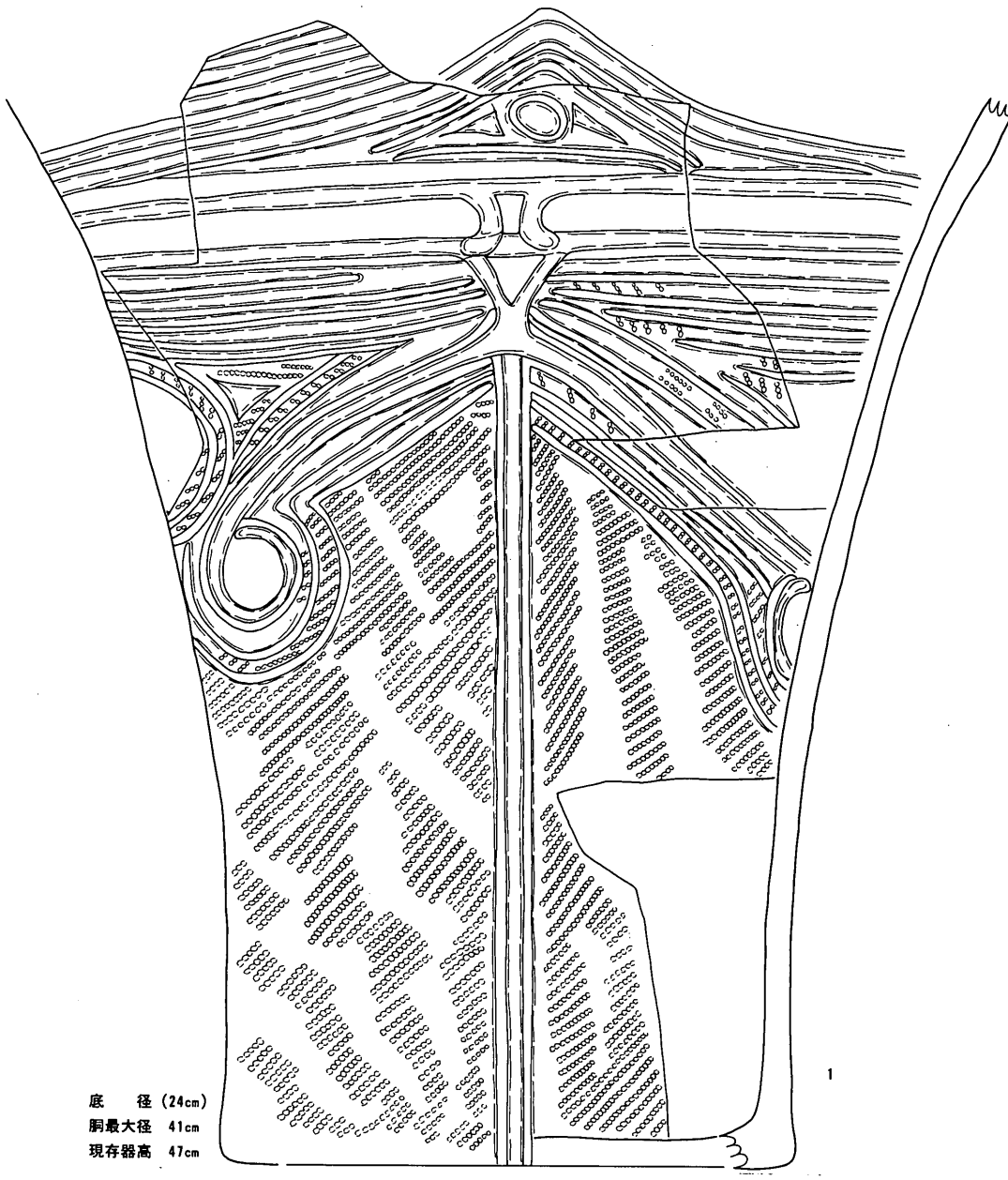
遺物は、口縁部を欠く胴上部～底部までの深鉢形土器２個体、口縁部のみの深鉢形土器２



第15図　Ｄ２号土坑実測図

点胴中央を欠く浅鉢形土器１点が主として出土した。この他、別個体の細片は10点程である。

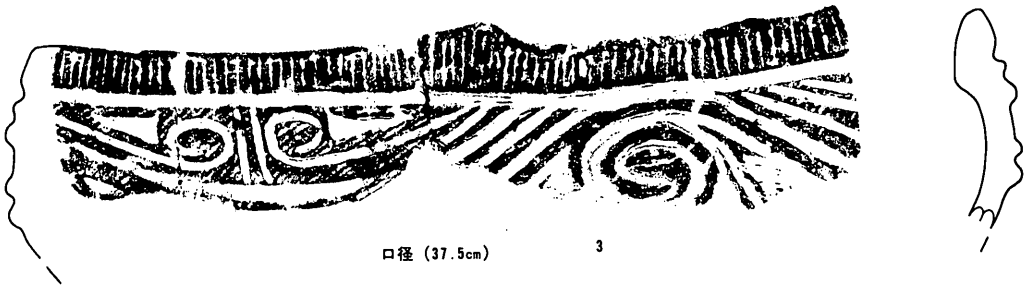
第16図１は、完形品であれば器高60cmの大形土器となろう。底部からラッパ状に開いて口縁まで立ち上っている。底径は24cmで安定感がある。



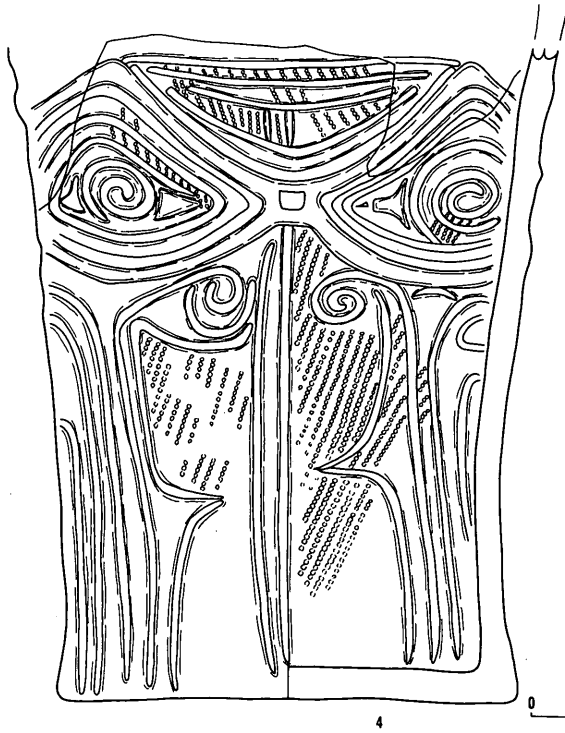
第16図　Ｄ２号土坑出土土器実測図No.１

2

口径（28.5cm）



口径（37.5cm）　3

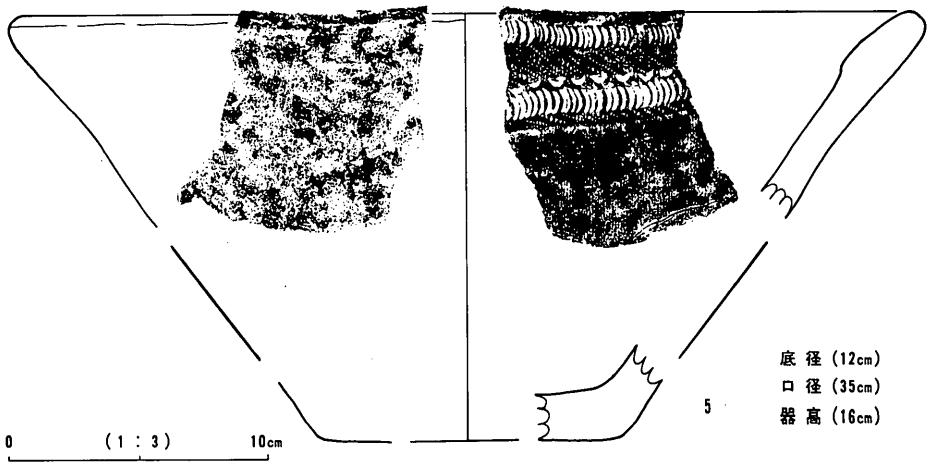


底　　径　18cm
胴最大径　21cm
現存器高　26cm

0　（1：3）　10cm

4

第17図　Ｄ２号土坑出土土器実測図No.２



第18図　D２号土坑出土土器実測図No.３

文様は、主要な部分を隆帯で区画し、その間を沈線による三角形・渦巻・三叉文で構成している。胴下部は斜縄文が施され、ところどころ磨消されている。

口辺部付近の中央部には、玉抱三叉文が三角形の中に施されている。頸部付近は横位二条の隆帯が巡り、その下段も三角形に区画され、中央部には三角形の陰刻文、斜縄文が施されている。渦巻文の中心部は隆帯で形づくられその周囲は沈線文でふち取られている。

この土器は、偏平な石の上に横たわっていた。上面にあたる約半分は多量の破片を残しながらも主要な部分が欠失しており接合に至らなかった。当初は口縁を欠するのみの完形に近い状態で埋葬されていたと考えられる。

第17図２は、深鉢形土器の口縁から胴上部にかけての破片である。口径28.5cm、胴部最大径24.5cmを測り、胴部が筒形で寸胴の器形であると推定される。文様は、口縁部中心に６山の波状口縁が正面と裏面につくり出されていると推定される。口縁のふちは斜縄文が施されている。口辺部は、隆帯で三角形が形どられその内側に二条の沈線が三角形状に施されている。沈線の線上は押引き文で埋められ、三角文の中心部には玉抱三叉文が施された区画と、二条の短い沈線が縦に引かれている区画とに分かれている。赤みがかった茶褐色を呈している。

第17図３は、深鉢形の口縁部で口径37.5cmと推定される。かなり大形の土器である。口縁端部は先の尖った工具で細い刻みを連続して施している。沈線による区画と三角形の陰刻文、渦巻文、さらに、隆帯による大きな渦巻文が配されている。平坦面にはところどころ縄文が施されている。

第17図４は、西南コーナー側に横たわった状態に出土した。底部側には、長さ26cm、一辺12cmを測る三角形の石と胴下部にも偏平の石が敷いたような状態に配石されていた。

底径18cm、現存の胴部最大径21cm、器高26cmを測る。埋葬当初から口縁部を欠損していたとおもわれるように、口縁部破片は皆無であった。口縁部で最大径をとる器形を呈していると考えられる。

文様は、三角形の区画を隆帯でおおい、区画内に渦巻文と三角形の陰刻文が配され、玉の部分は渦巻きではあるが玉抱三叉文を模している。区画下の文様は、中心部に二条の沈線が垂下し、その両脇は沈線の渦巻文が蕨のように上端部で巻いている。地文は斜縄文が施文され、ところどころ磨消しが入っている。

第18図５は、唯一の浅鉢である。底部と口縁部の一部が出土したので図上復元をした。口径35cm、底径12cm、器高16cmと推定される。器厚は厚くがっちりした作りである。胎土中に金雲母を多量混入している。正面は無文で調整が粗雑であるが、内側はなめらかな調整がなされている。口辺部には半截竹管による連続文が二段、三角形の刺突文、斜縄文が二段と４cmの幅で施文されている。

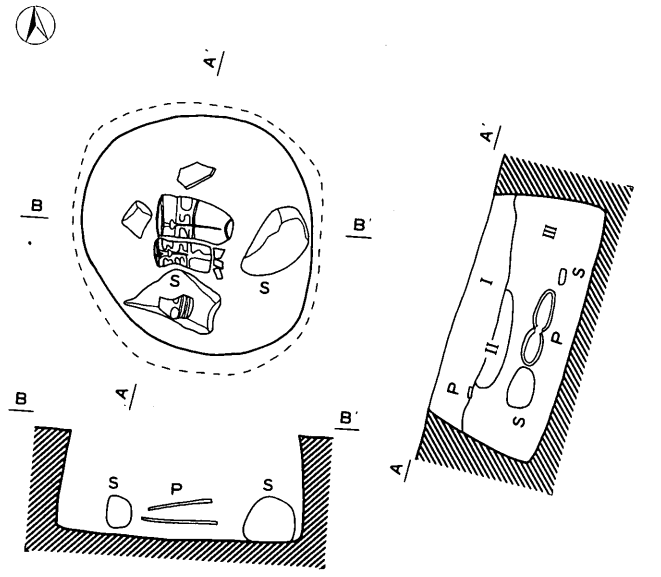
以上が本土坑にぎっしりと埋まっていた土器群である。深さ15cmの土坑内に横たわった状態に２個体の口縁を欠する大形の深鉢形土器があり、その土器周囲に２個体の口縁部のみの大形土器片が重なっていた。口縁部を欠した２個体に、別個体２個体の口縁部のみの破片との組み合せは、意図的なものが感じられる。さらに、本土坑はこれら土器の出土状態からみて、土器を埋葬したか、または、別の意味の呪術的な行為によって構築された遺構であるかが問われる。

本土坑の所産期は、九兵衛尾根Ⅰ式期に比定される。

３）　Ｄ３号土坑(第19・20図)

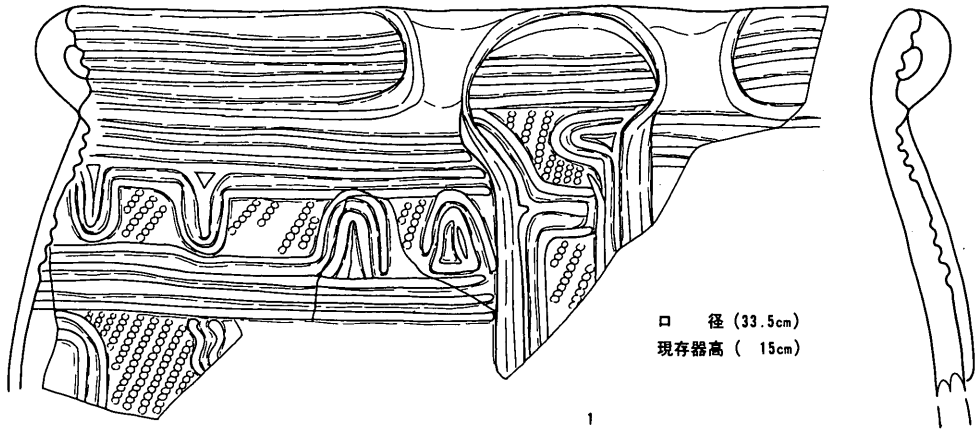
本土坑は、調査区の最東南端Ｈ－７グリッド内に検出された。東側は山斜面の土堤がせまっている。

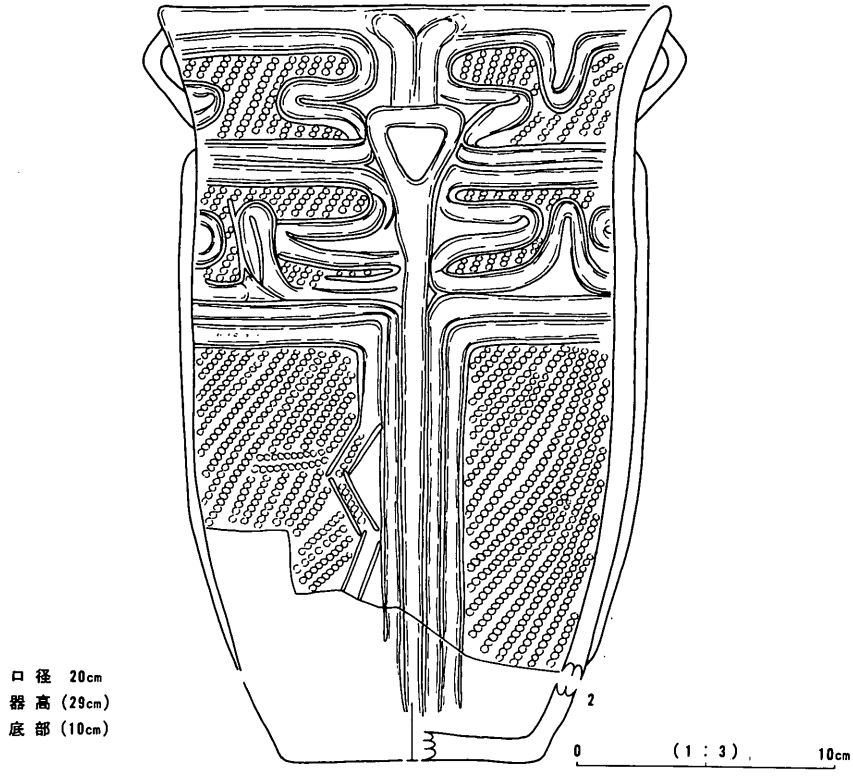
平面プランは、径90cmを測りやや形の悪い円形プランを呈している。下場が上場より５cm程抉れた状態に掘り込まれてオーバーハングしている。壁立ち上りは垂直となる。主軸方向は、



Ⅰ 層（漆黒色土）ローム粒子・パミス（１cm大）少量混入。
Ⅱ 層（黄褐色土）ロームのブロック層
Ⅲ 層（黒 色 土）ローム粒子・パミス（１cm大）少量混入。

第19図　Ｄ３号土坑実測図





第20図　Ｄ３号土坑出土土器実測図

ほぼ北を示している。

覆土は、３層から成り、Ⅰ層が漆黒色土でローム粒子、１cm大のパミスを少量混入している。Ⅱ層は黄褐色土でロームのブロック層で、Ⅲ層は黒色土である。

深さは40cmで、底面は白みがかった粘土層まで掘り込まれ、5cm～10cm大の礫が顔を出してはいるが平坦に掘り込まれている。

東西側と南側に、11cmと20×30cm大の礫を三方に配し、その中心に第20図2に示した土器が押しつぶれた状態に横たわっていた。底部は離れていたが覆土中から出土したので、埋設当時は完形品であったとおもわれる。さらに南西側の石の上には、第20図1の土器がのせたような状態に出土した。

遺物は、前記した2点のみでその他破片は2点と少ない。1は、口径33.5cm、胴部最大径37cm、現存器高15cmを測り、胴部が最大径をとりやや丸みを呈し、底部付近ですぼまる器形の深鉢となろう。文様は、口縁部に橋状の把手が7cmの間隔をもって連なっている。隆帯の区画を主要部分に配し、深くダイナミックに沈線で平行線やU字状の文様を描いている。胴上部から下部の地文は斜縄文が施されている。胎土に金雲母が多量含まれ焼成は固い。

2は、口径20cm、底径10cm、器高29cmを計測すると推定される。現存の器厚は25.5cmを測り底部との間がやや欠失する。

文様は口辺部に4単位の橋状把手が付き、その直下が三角形に形づくられ下端部が一本の隆帯となって胴下まで垂下している。口辺部2段の区画内は沈線で蛇行する文様を描き、地文は斜縄文を配している。胴中央から底部付近までは地文に斜縄文が全面施文されている。内面には胴中央から底部までお焦げの付着が若干見られる。煮炊用の土器であったことを示すかのように、胴中央から底部にかけて土器はもろく、熱をうけた様相が強く感じられる。

本土坑は、深さ40cmとしっかりした掘り込みを呈し、坑内中央に完形の深鉢形土器が埋められていた。副葬品であったと考えられることから、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の土坑墓であると判断される。

4）　D4号土坑（第21図）

本土坑は、南東側のG－6グリッド内に検出された。北側に接近してD5号土坑が存在している。確認面の西側全体に5cm～20cm大の礫が13個散乱、さらに南西コーナー側に35cm内外の角礫が2個顔を出していた。

平面プランは、90cm×95cmの形の整った円形を呈する。主軸方向は、N－27°－Wを示す。

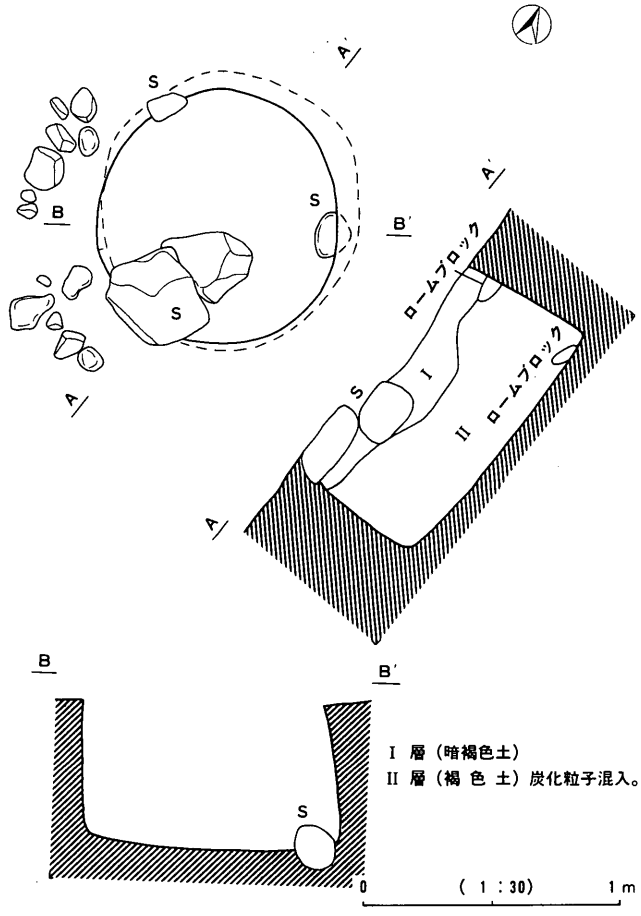
覆土は、褐色土を基調とした2層によって形成され、Ⅰ層が暗褐色土、Ⅱ層が褐色土で炭化粒子を混入する。また、ロームブロックが壁際に認められた。覆土中には10cm大の礫が多量に含まれている。西壁沿いの礫の散乱からみて、本土坑の上面は礫が並べられていた可能性が考えられる。

深さは57cmを測り、壁は一部西側を除いて、全体にオーバーハングして立ち上っている。オーバーハングは北東側が10cmの抉りを見せている。また、壁中にも礫が多かった。底面は、

平坦に掘り込まれてはいるが、東側中央の壁際に15cm大の礫が顔を出していた。

遺物は、土器細片２点と、細粒砂岩の剝片１点が出土した。土器は隆帯の付いた部分で、胎土中に金雲母を少量混入する。

本土坑は、ダイナミックな掘り方と深さ、土器細片から中期初頭の土坑墓であると判断される。



第21図　Ｄ４号土坑実測図

５）　Ｄ５号土坑（第22図・24図）

Ｄ５号土坑は、Ｇ－５・６グリッドの中間点に検出された。Ｄ４号土坑と隣接し対になった状態が観察される。

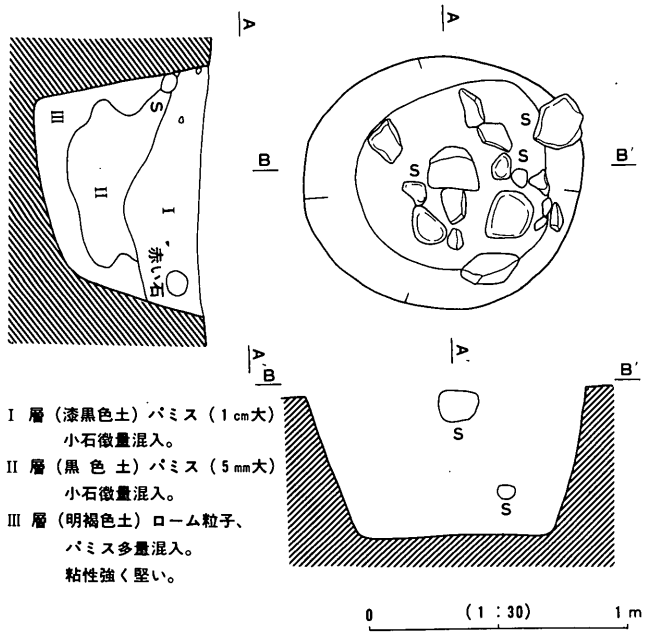
平面プランは、長軸をとる東西側が110cm、短軸の南北側が95cmを測り、形の整った楕円形を呈する。主軸方向は、Ｎ－16°－Ｗを示す。

覆土は、３層によって形成され、Ｉ層は漆黒色土で１cm大のパミスと小石を微量混入する。Ⅱ層は黒色土でＩ層と同様の混入物がある。Ⅲ層は明るい褐色土でローム粒子、パミスを多量混入し、粘性強く堅い。

深さは最深部で65cmを測るが、南壁側は55cmでやや浅い。壁は急傾斜で立ち上る。壁中には小石粒の混入が多い。底面は平坦ではあるが地形に沿って、南から北に傾斜している。

本土坑は、Ｄ４号土坑と同様に礫が多く、ダイナミックな掘り方が特徴的である。遺物の出土は少量で、第24図１に拓影１点を示した。これは、横位の沈線文三条の最上段に刺突文が連続している。胎土中に金雲母を多量含む。この他、斜縄文、溝の深い沈線文、無文土器片など計６点が出土した。

本土坑は、中期初頭九兵衛尾根Ｉ式期の墓坑であると判断した。



第22図　Ｄ５号土坑実測図

6）　Ｄ６号土坑（第23図）

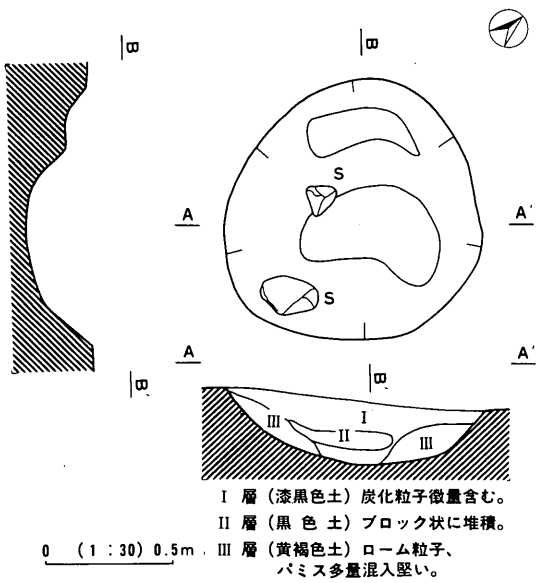
本土坑は、調査区中央の東端に検出された。グリッドは、Ｈ－４に位置する。北側にＤ７号土坑が隣接している。

平面プランは、径１ｍを測りやや不整な円形を呈する。主軸方向は、Ｎ－58°－Ｗを示す。

覆土は３層により形成される。Ⅰ層は漆黒色土で炭化粒子を微量含む。Ⅱ層は黒色土でブロック状に混入した締りのある堅い土層である。Ⅲ層は三角堆土でローム粒子・パミスを多量混入し堅い。

最深部の深さは25cmで、西側の壁立ち上り際に三日月形に近い形状の掘り込みがあり段を有している。壁はなだらかに立ち上っているが、腐触土の混入が多く黒色がしみ込んでいる。南側の壁中に10cm～20cm大の礫が２個ある。底面は鍋底状の形状で丸い。

遺物の出土は皆無であったため、所産期、性格等不明である。

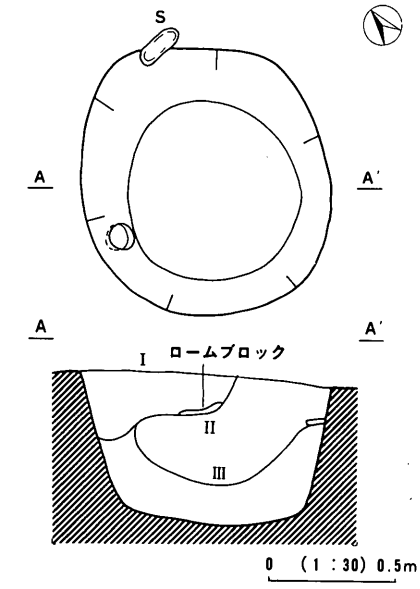


第23図　Ｄ６号土坑実測図

7）　Ｄ７号土坑（第24・25図）

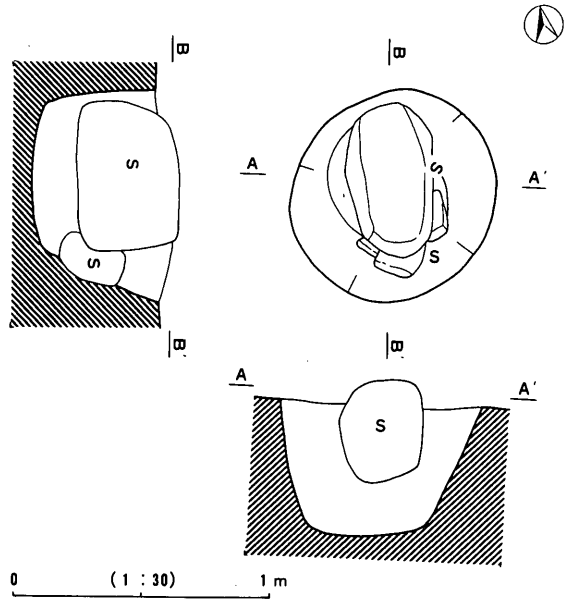
Ｄ７号土坑は、調査区北東端側のＨ－３・４グリッドの線上にまたがって検出された。東側にＤ６号土坑が、西側にＤ26号土坑が隣接している。

平面プランは長軸側105cm、短軸側98cmを測り、やや形の整った楕円形プランをとる。主軸方向は、Ｎ－36°－Ｅを示す。

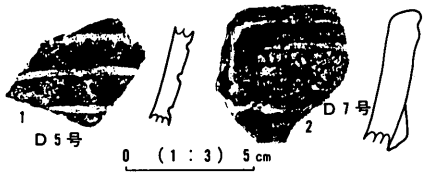


I 層（黒 色 土）ローム斑点状に混入。炭化粒子微量混入。
締りあり堅い。
II 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1㎝大）
炭化粒子微量混入。締りあり堅い。
III 層（黄褐色土）ローム粒子、パミス（1㎝大）
炭化粒子多量、小石粒少量、炭化粒子微量含む。

第24図　D７号土坑実測図



第26図　D８号土坑実測図



第25図　D５号・D７号土坑出土土器拓影図

覆土は３層から成り、Ⅰ層は黒色土でロームを斑点状に混入し、炭化粒子を微量含む。Ⅱ層は、Ⅰ層より濃く漆黒色土で、ローム粒子と１㎝大のパミスと炭化粒子を混入する。Ⅲ層は黄褐色土で、ローム粒子・パミスを多量混入し、特に底面付近に小石粒を少量と炭化粒子を混入する。

深さは55㎝で、壁は垂直に近い状態で立ち上っている。底面は白色粘土層で２～３㎝大の小石を混入し、ややゴツゴツするが平坦である。北壁立ち上り際に８×15㎝大の礫があり、西南コーナー寄りに直径10㎝、深さ10㎝の穴がある。これは、木の根の跡とおもわれる。

遺物は、第25図２の拓影図に示した口縁部片１点が出土した。文様は、沈線文、斜縄文、隆帯が認められる。器厚は厚い。

本土坑は、形状も整いダイナミックな掘り込みがなされている。中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の土坑墓であると判断される。

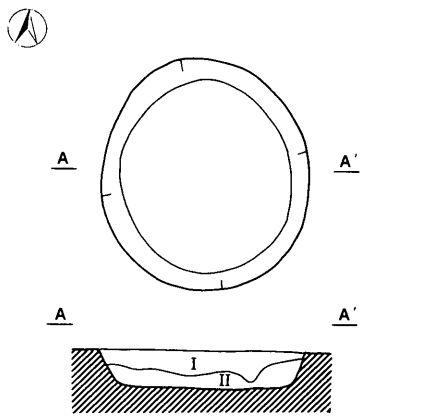
8）　D８号土坑（第26図）

D８号土坑は、道路拡幅のための予定地に重機を入れて削平した最北東端に位置し、D32号土坑から30m離れた地点に確認した。従って全体図にはのっていない。

平面プランは、径80cmで形の整った円形を呈する。主軸方向は、N－8°－Eを示す。

覆土は、褐色土のⅠ層に覆われており、坑内には35cm×55cm大の大きな石が中心に据えられている。底面の南壁側には平坦な石を立て、さらに、その並びにも大石がズレないように止めた状態が伺える。意図的な感じもするが、偶然的なものか判断は難しい。

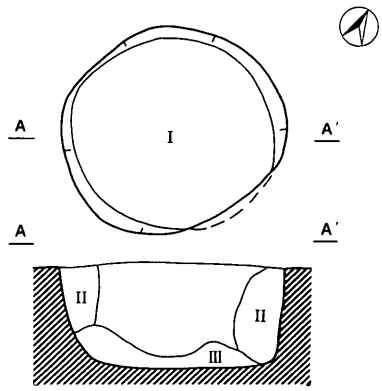
遺物の出土が皆無であったため所産期は不明である。



Ⅰ 層（漆黒色土）粘性強い。ローム粒子、パミス微量混入。
Ⅱ 層（褐 色 土）ローム粒子、パミス多量混入。堅い。

0 （1：3）0.5m

第27図　Ｄ９号土坑実測図



Ⅰ 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス、
炭化粒子微量混入。締りあり堅い。
Ⅱ 層（褐 色 土）ローム粒子、パミス、
炭化粒子多量混入。
Ⅲ 層（黒褐色土）ローム粒子、パミス、
ブロック状（5cm大）に少量混入。

0 （1：30）0.5m

第28図　Ｄ10号土坑実測図

9）　Ｄ９号土坑（第27図）

本土坑は、調査区の南端Ｆ－７グリッド内に検出された。東側にＤ１号土坑が隣接する。

平面プランは、長軸をとる南北側90cm、短軸をとる東西側80cmを測り、形の整った楕円形を呈する。主軸方向は、N－9°－Wを示す。

覆土は２層から成り、Ⅰ層は漆黒色土でローム粒子・パミス・炭化粒子を微量混入する。粘性は強いがやわらかである。Ⅱ層は褐色土でローム・粒子・パミスを多量と炭化粒子を微量混入する。粘性強く堅い土層である。

深さは15cmと浅いが、地形的に最上段にあるため耕作時に下へと削平されていると考えられる。底面は平坦であった。

遺物は、黒曜石の剝片１cm～２cm大が５点出土している。本土坑は、浅くて貧弱になってしまったが黒曜石剝片が出土していることから遺構であることは問題ない。

10）　Ｄ10号土坑（第28図）

本土坑は、調査区南端付近のＦ－７グリッド内に検出された。同グリッド内にはＤ９号土坑

があり、隣接する西側にD11号土坑がある。

平面プランは、長軸側90cm、短軸側80cmを測り、東南側の壁が一部オーバーハングして立ち上るが、やや形の整った円形プランとなろう。主軸方向は、N－30°－Wを示す。

覆土は、3層により形成される。Ⅰ層は漆黒色土で炭化粒子を微量混入し、Ⅱ層は黒褐色土でローム・パミスを5cm大のブロック状に少量混入する。Ⅲ層はローム・パミスを多量混入した三角堆土である。3層共に締りのある堅い土層であった。

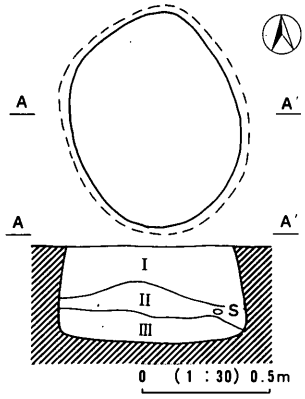
深さは48cmを測り、壁は垂直に立ち上っている。底面は平坦である。

遺物は、縄文が施文された深鉢形土器胴部の細片が3点出土した。器厚は厚い。

本土坑は形も整い、しっかりした掘り込みを呈している。中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の土坑墓であると判断される。

11)　D11号土坑（第29・30図）

本土坑は、調査区中央の南端E－7グリッド内に検出された。隣接して同グリッド内にD13号土坑が所在する。平面プランは、長軸をとる南北例が85cm、短軸をとる東西側が65cmを測り楕円形を呈する。主軸方向はほぼNを示している。



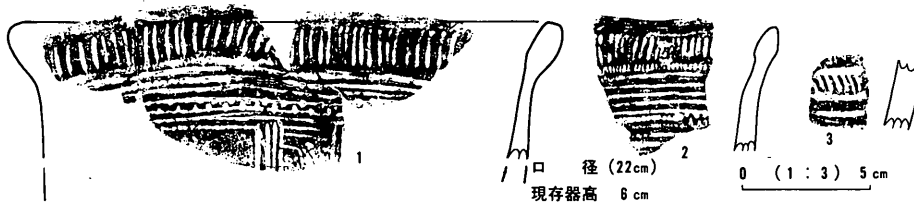
Ⅰ 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）微量、炭化粒子少量混入。
Ⅱ 層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）少量混入。締りあり堅い。
Ⅲ 層（褐 色 土）

第29図　D11号土坑実測図

覆土は、3層により形成される。Ⅰ層が漆黒色土、Ⅱ層が暗褐色土、Ⅲ層が褐色土で共にローム粒子・パミスを混入する。Ⅰ層にのみ炭化粒子を少量含む。Ⅱ・Ⅲ層はしまりある堅い層である。

深さは37cmで、壁の掘り込みはオーバーハングして抉れながら垂直に立ち上る。底面は平坦であった。

遺物は、第30図に示した土器片3点と他に4点の細片が出土している。1は、器厚のうすい深鉢形土器で、口径22cmと推定される。沈線を主体としており、沈線内に交互刺突文が施文されている。口縁部は縦方向に沈線文を連続させている。間隔が広い連続文である。黒褐色を呈した焼成で、胎土に金雲母が多量含まれている。



第30図　D11号土坑出土土器拓影図

2も同類の器形と文様をもつ深鉢形土器であるが、文様構成と口縁部を内側に折返しているため別個体とおもわれる。口縁直下の沈線内に細い刻目が連続している文様も1には見られない。3は、茶褐色を呈した細片で沈線文で構成されている。

本土坑は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の墓坑であると判断される。

12)　D12号土坑

D12号土坑は、調査区中央の南端付近E－6グリッド内に検出された。南北の直線上にD11号・D12号・D17号・D18号の各土坑が並ぶ。

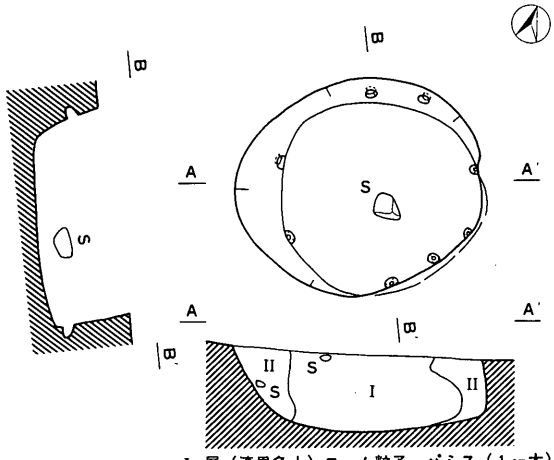
平面プランは、長軸をとる東西側が95cm、短軸をとる南北側が85cmを測り、やや東側がくずれるが楕円形プランを呈している。主軸方向は、N－21°－Wを示す。

覆土は、Ⅰ層が漆黒色土で、Ⅱ層は黄褐色土の三角堆土である。Ⅰ・Ⅱ層共にローム粒子・パミス・炭化粒子を混入する。締りのある層である。

深さは30cmで、壁は垂直気味に立ち上るが、東南側の壁はオーバーハングしている。さらに壁中には径5cmの穴が8個巡っている。これは、墓坑としてなんらかの施設がつくられた痕跡であるとおもわれる。底面は平坦でやや堅緻な面が認められた。底面直上に6×10cm大の礫が置かれていた。出土遺物は皆無であった。

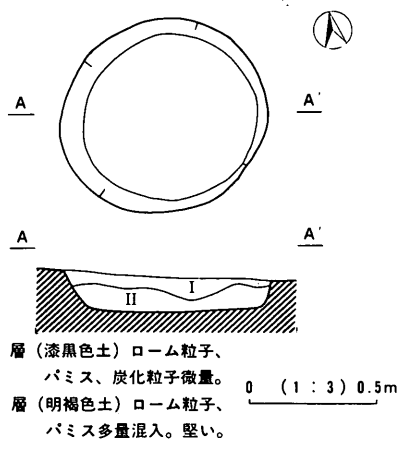
13)　D13号土坑（第32図）

本土坑は、D11号土坑と東西に並んだ状態で共にE－6グリッド内に検出された。ここは、



Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）炭化粒子微量混入。
Ⅱ層（黄褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）炭化粒子多量混入。

第31図　D12号土坑実測図



Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス、炭化粒子微量。
Ⅱ層（明褐色土）ローム粒子、パミス多量混入。堅い。

第32図　D13号土坑実測図

調査区中央の南端に位置し、一段丘上る土堤の下にあたる。

平面プランは、東西側80cm、南北側75cmで形の整った円形を呈する。主軸方向は、N－10°－Eを示す。

覆土は2層から成り、Ⅰ層は漆黒色土で炭化粒子を微量混入する。Ⅱ層はロームが2cm～5cm大のブロック状に多量混入した堅くしまった土層である。

深さは13cmでやや貧弱な土坑であるが傾斜面の最上段に位置しているため、風雨で流れたり耕作により削り取られた可能性がある。床面は平坦で特に堅緻な面は認められなかった。

遺物は、深い沈線文・鋸歯文が施文された土器片1点が出土したのみであった。

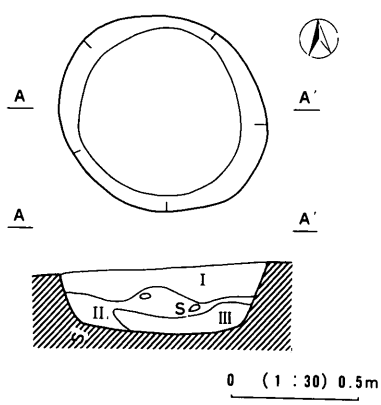
本土坑の所産期は中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

14)　D14号土坑（第33図・37図）

本土坑もD13号土坑と同様、調査区南端の土堤直下に検出された。C・D－6・7の二つのグリッド線上に位置している。

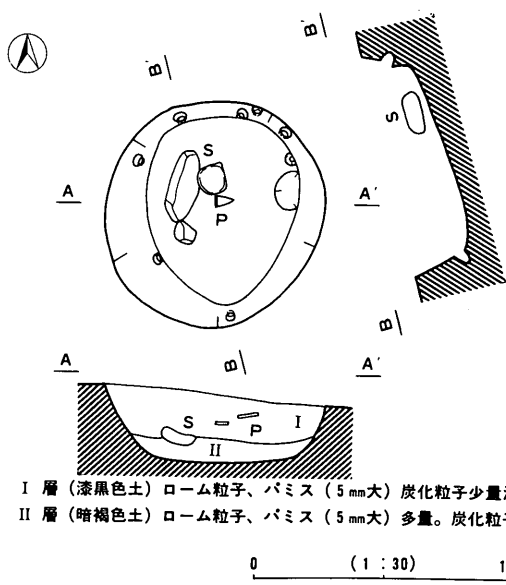
平面プランは、東西側80cm、南北側75cmでややゆがみはあるが円形を呈す。D13号土坑と同一の規格である。主軸方向は、ほぼ北を指している。

覆土は、3層により形成される。Ⅰ層は漆黒色土、Ⅱ層は暗褐色土でⅢ層はやや濃い黒褐色土となる。共にローム粒子・1cm大のパミス、炭化粒子を混入する。Ⅱ層中には5cm大の礫の



Ⅰ 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）炭化粒子少量混入。
Ⅱ 層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）多量混入。
Ⅲ 層（黒褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）少量混入。

第33図　D14号土坑実測図



Ⅰ 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（5mm大）炭化粒子少量混入。
Ⅱ 層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（5mm大）多量。炭化粒子微量含む。

第34図　D15号土坑実測図

混入があった。

深さは、東側最深部で25cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上る。底面は平坦である。

遺物は、第37図に示した底部片と別個体の胴部片１点が出土した。底径は10cmと推定され、胴下まで斜縄文が施文されている。

本土坑も中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

15)　D15号土坑（第34図・37図）

本土坑は、土坑墓群の集中している調査区中央の南側Ｆ－６グリッド内に検出された。

平面プランは、径85cmの円形を呈す。主軸方向は、ほぼ北を指し示している。覆土は、Ⅰ層が漆黒色土、Ⅱ層が暗褐色土で共に炭化粒子を含む。

深さは28cmで、壁はなだらかに立ち上っている。土坑内には、６～10cm大、10×28cm大の礫と第37図３に拓影で示した口縁部片が集中した状態に配されていた。また、壁中には径６cm大の小穴が８個巡り、東壁下底面には径14cmの弱い凹が認められる。

遺物は、黒曜石剝片２点と7.5cm×2.5cmの黒曜石の石該が１点、第37図２・３の土器口縁部片２点が出土している。石核は質の悪い黒曜石で付近の稲子産出のものに類似する。

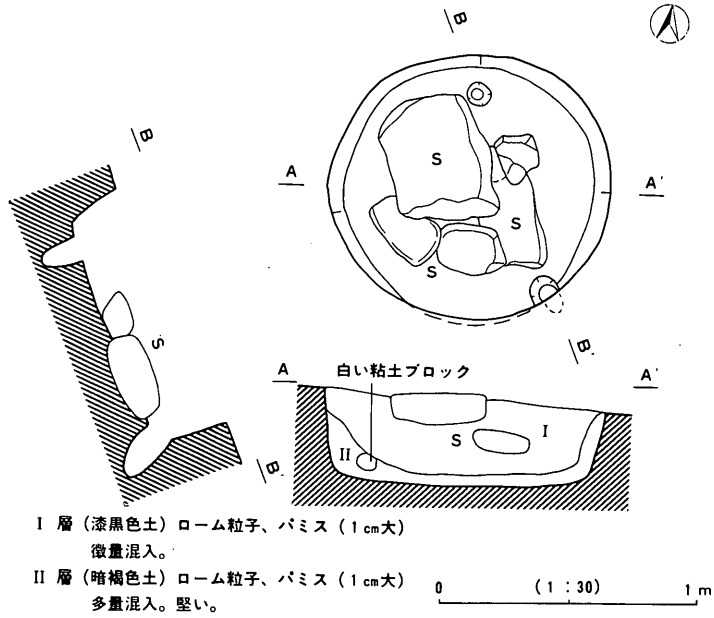
土器は、２が沈線と斜縄文で文様構成がなされ、３は、ソーメン状の貼り付が５段あり、上面には縄文が施文されている。器厚はうすく摩滅しており、古い様相が感じられる。

本土坑の所産期は、本集落の時期と同一の中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

16)　D16号土坑（第35図）

本土坑は、調査区中央の南側寄りのＥ－５グリッド内に検出された。本土坑から南に向って一直線上に、D17号・D12号・D11号土坑の４基が並んでいる。

平面プランは、長軸をとる東西側が1.1m、短軸をとる南北側が１mで形の整った円形を呈している。主軸方向はN－11°－Eを示す。



第35図　D16号土坑実測図

覆土は、漆黒色土と暗褐色土の２層から成り、Ⅱ層中には白色の粘土ブロックが認められ、締りのある堅い土層であった。また、坑内には20cm～50cm大の偏平な礫が集中して６個配石されていた。50cm大の大きな礫を最上部にして二段重ねとしている。

深さは35cmで壁は急傾斜で立ち上っている。北壁側底面に径10cm、深さ15cmの穴があり、さらに東南側コーナー壁下にも斜めに掘り込んだ、径10cm、深さ20cmの小穴がある。土坑に伴ったなんからの用途をもったものであるかは不明である。

遺物は、黒曜石剝片２点、使用痕の認められない横刃型状の石器１点、無文土器細片２点が出土した。

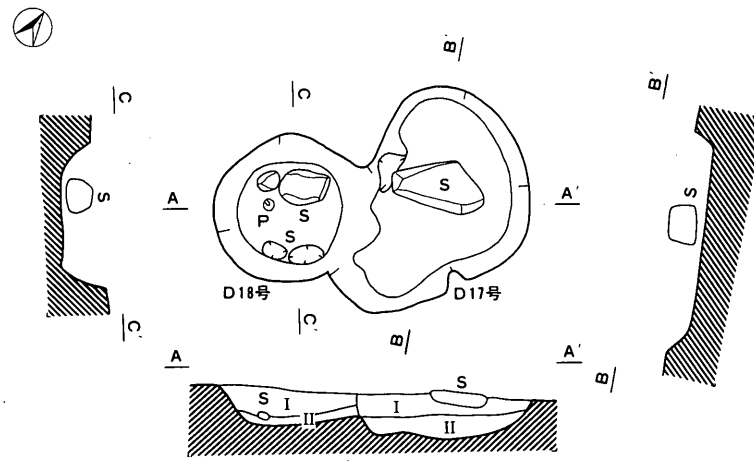
本土坑も本遺跡集落の出現期である中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の所産として位置付けられよう。

17)　D17号土坑（第36・37図）

本土坑は、D16号とD12号土坑の間にはさまれた、E－６グリッド内に検出された。西側にD18号土坑が接触している。

平面プランは、長軸をとる南北側が95cm、短軸の東西側が65cmを測り、南端がすぼまった不整な楕円形を呈する。主軸方向は、ほぼNを示している。

覆土は、褐色土を基調とした２層に覆われ、Ⅰ層中には炭化粒子が混入していた。共に堅い土層であった。

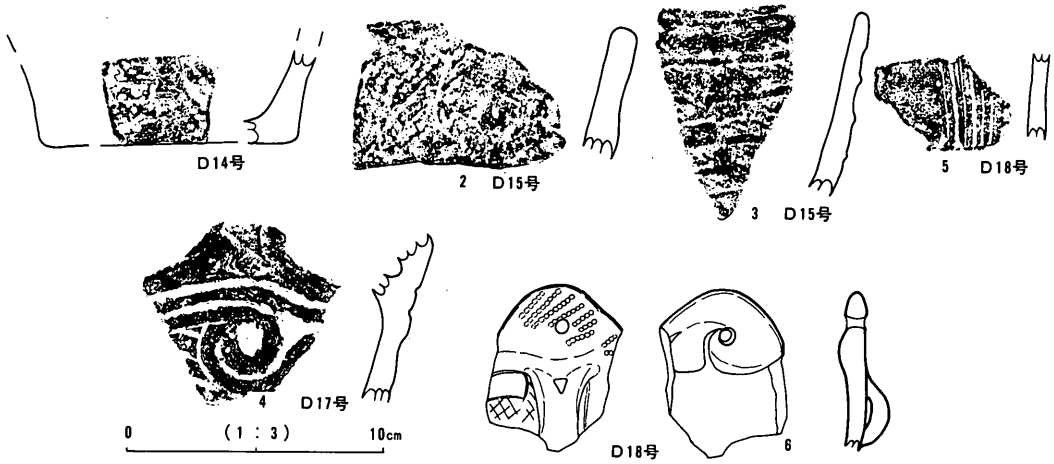


D18号
Ⅰ層（黒色土）ローム粒子、パミス（5mm大）少量混入。やや堅い。
Ⅱ層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（5mm大）多量混入。堅い。

D17号
Ⅰ層（褐色土）ローム粒子、パミス、炭化粒子少量混入。堅い。
Ⅱ層（黄褐色土）ローム粒子、パミス多量、炭化粒子少量混入。堅い。

0　(1：30)　1m

第36図　D17号・D18号土坑実測図



第37図　D14号・D15号・D17号・D18号土坑出土土器拓影図

最深部の深さは15cmを測る。坑内中央に20×35cm大の三角形の偏平な石が据えられていた。

遺物は、第37図4に示した土器口縁部片1点が出土した。胎土中に金雲母を多量含み、調整は丁寧に施されている。沈線によって渦巻文を描き、中心部とその右横に半肉彫の三叉文的な彫りがあるが乱雑である。口縁端部の突き出しは4山の1山の部分であるとおもわれる。内側に割れ目が残っていることからここに把手が付いていたと推定される。

本土坑の所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

18)　D18号土坑（第36・37図）

本土坑は、D17号土坑と東壁側が重複した状態で検出された。平面プランは、径55cmを測る円形プランとなる。主軸方向は、N－36°－Wを示す。

覆土は、Ⅰ層が黒色土でⅡ層が暗褐色土である。覆土の色調の関係からも本土坑がD17号土坑を切って構築していると判断される。

深さは15cmと貧弱であるが、D17号と共に10cm～20cm大の礫の配石が認められると共に、床面直上から第37図6に示した土器口縁部が出土した。意図的に土器が置かれたと判断される。

遺物は、前述の口縁部と拓影に示した第37図5の2点が出土している。5は垂下する沈線文が描かれた胴下部片で、胎土中に金雲母を多量含む。調整がきれいで焼成固い。6は、4山の1山の部分であるとおもわれる。山の中心部に5mm大の孔が設けられ、その直下に橋状肥手がある。文様は山の裏側に渦巻が描かれ渦巻の中心部に孔があけられている。正面は斜線文と格子目文が施されている。

本土坑は、これらの土器から中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定される。

19)　D19号土坑（第38～40図）

D19号土坑は、土坑群の集中している調査区中央から南端部付近のD－5・6グリッドの線上にD20号土坑と接近して検出された。

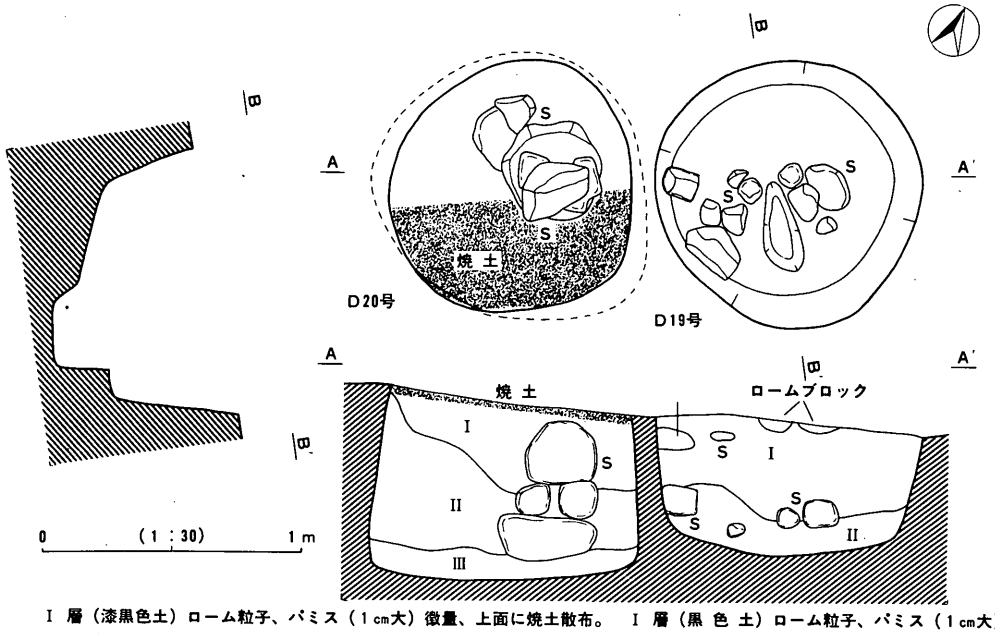
平面プランは、径105cmを測り円形を呈する。主軸方向は、N－30°－Wを示す。

覆土は2層から成り、Ⅰ層は黒色土でローム粒子・1cm大のパミス・炭化粒子を少量混入する。ロームブロックが上面に3箇所認められた。Ⅱ層は明褐色土で炭化粒子は含まれない。全体に締りのある土層で人工的埋土の様相が強く感じられた。

深さは55cmを測り、壁は垂直に近い状態で立ち上っている。床面はほぼ平坦ではあるが、床面中央から南寄りに15×35cm、深さ15cmの細長い掘り込みが生じている。また、床面直上からⅠ層下部にかけて10～25cm大の礫が10個集石していた。その中にD1号土坑内に埋められていた石棒と同様の石質、あるいは、その石棒の破片とおもわれる根本の部分が西壁下中央に配石されていた。

遺物は、土器片8点と石棒破片1点が出土した。その内、拓影可能なものを第39図に示した。1は、口縁部片である。口縁を包みこむように2本隆帯が巻かれ、口唇部にも半截竹管による連続文が施文されている。胴上は無文である。2・3は細い斜縄文が施文されている。

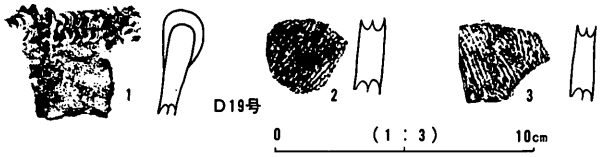
第40図は石棒の根本の破片である。第14図のD1号土坑出土の石棒と石質も同一であるが、



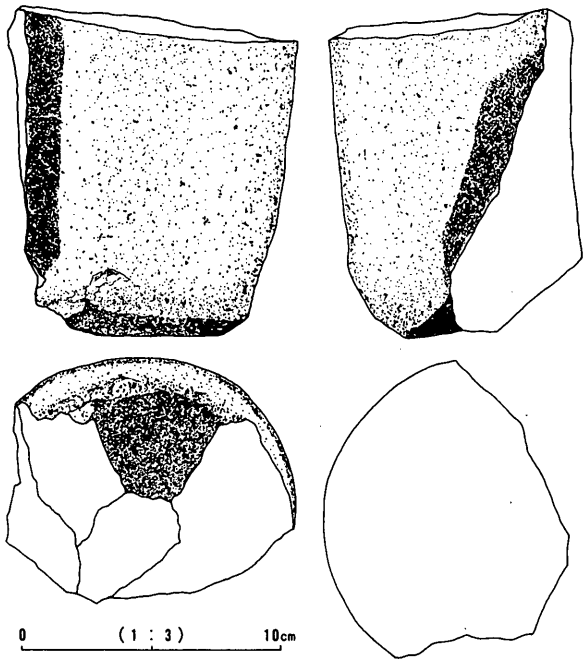
Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）微量、上面に焼土散布。
Ⅱ層（黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）少量混入。堅い。
Ⅲ層（褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）多量混入。堅い。

Ⅰ層（黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）炭化粒子少量混入。
Ⅱ層（明褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）多量混入。

第38図　D19号・D20号土坑実測図



第39図　D19号土坑出土土器拓影図



第40図　D19号土坑出土石棒実測図

接合には至らない。しかし、その間が若干欠失していると考えられる。長さ12.5cmで先端はスパッと切り割ったかのように平坦である。下端～底面は面がとられて形が整えられている。根本底面は煤が付着しており熱を受けている。D１号土坑と関連をもつ土坑であろう。本土坑は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の土坑墓であると考えられる。

20)　D20号土坑（第38・41図）

本土坑は、D19号土坑と連なる形でD－６グリッド内に検出された。その間隔は10cm程離れているのみである。確認時点において上面の南側半分に焼土が２cmの厚さに堆積していた。埋葬にあたりなんらかの儀式がとり行われたのだろうか。

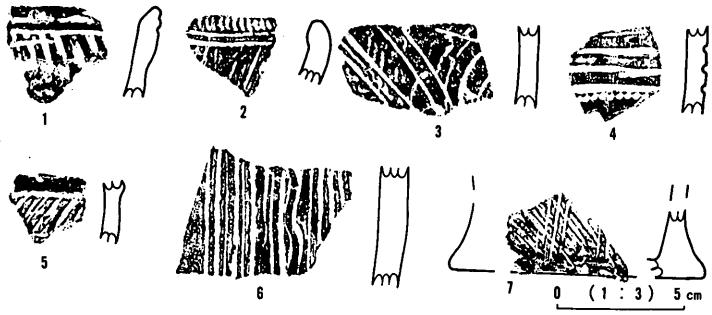
平面プランは、径１mの円形プランをとる。主軸方向は、N－24°－Wを示している。

覆土は、３層によって形成され、Ⅰ層が漆黒色土、Ⅱ層が黒色土、Ⅲ層が褐色土である。Ⅰ層中には焼土・炭化粒子が少量含まれ、やわらかい土層である。熱を受けたからであろう。Ⅱ層・Ⅲ層は比較的堅く、人工的埋土の様相を呈していた。

深さは70cmで、壁は垂直にオーバーハングして立ち上っている。土坑内中央から北側寄りに配石がある。この配石は幅35cmの円形の石を最下部に据えて、その上部２段に石をきちんと積んでいる。意図的な石積みであるとおもわれる。

D19号・D20号土坑は、掘り込みの様相からあまり時間のへだたりがなく、親近者の対になる土坑墓であると考えられる。

遺物は、土器片23点、黒曜石剝片５点が出土した。その内の７点を第41図に拓影で図示した。文様は、沈線文を主体としている。２は口唇部に連続刻目が、３は斜縄文、４は連続刺突文、５は、溝の深い斜めの沈線文、６は垂下する沈線文、７は、籠畑式期に出現する張り出し底を



第41図　D20号土坑出土土器拓影図

呈した格子目文の底部片である。

本土坑は、70cmという深くてしっかりしたつくりの土坑である。土器からみてその所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

21)　D21号土坑（第42・45図）

本土坑は、調査区中央のE－4グリッド内に検出された。北側には炭を焼いた130cm×185cmの長方形の穴があり、土坑の半分がその穴に破壊されている。これは最近のもので穴は粉状の炭と土で埋まっていた。

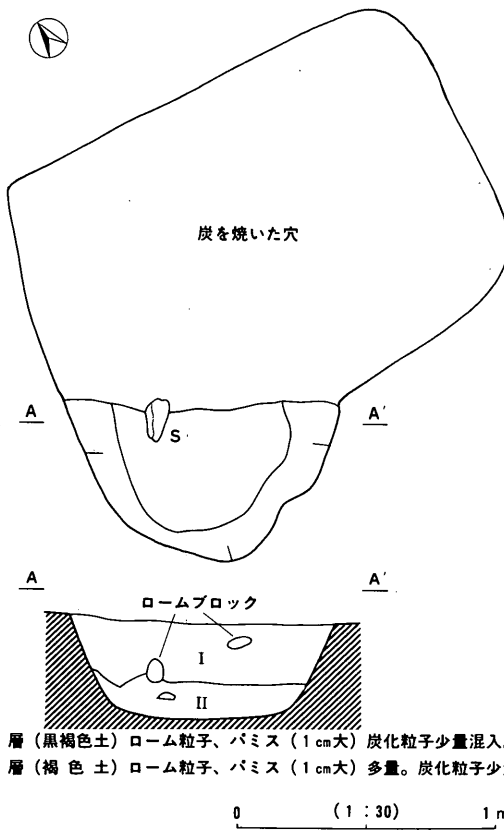
平面プランは、円形に近い形状であるとおもわれる。東西の径は約1mを計測する。

覆土は、褐色土を基調とした2層から成り、炭化粒子を少量混入している。また、ロームブロックが目立った。

深さは、40cmで壁は急傾斜で立ち上っている。底面は平坦である。

遺物は、黒曜石剝片1点と土器片5点が出土した。この内、拓影可能だった1点を第45図1に示した。沈線文と縄文が施文されている。

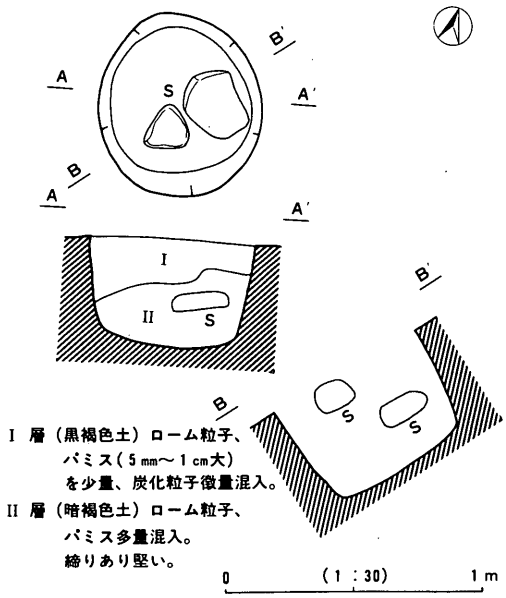
本土坑の所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。



第42図　D21号土坑実測図

22)　D22号土坑（第43図）

本土坑は、調査区の中心部D・E－5グリッドにまたがって検出された。平面プランは、長



第43図　D22号土坑実測図

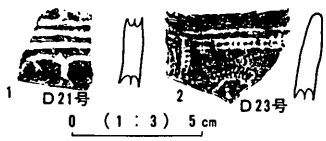
軸をとる南北側が70cm、短軸をとる東西側が65cmを計測し、やや北端部が尖った円形を呈する。主軸方向は、N－17°－Wを示す。

覆土は褐色土を基調とした2層により形成され、炭化粒子を微量含む。Ⅰ層はやや堅いが、Ⅱ層はⅠ層に比較して締りがありさらに堅くなる。

深さは、42cmで壁は垂直に立ち上っている。小形ではあるがしっかりした掘り込みである。底面は鍋底状を呈している。

坑内には2個の石が配石されていた。上部の石は三角形で15×18cmで、下部の石は底面から15cm上面に配石された偏平の石である。意図的な配石である様相を呈していた。

遺物の出土は皆無であるが、小形ながらしっかりした掘り込みを有している。墓坑であると考えられる。



第44図　D21号・D23号土坑出土土器拓影図

23)　D23号土坑（第44・45図）

本土坑は、群を成す土坑の西側に位置し、D－5グリッド内に検出された。南東側に隣接して対を成すD19号、D20号土坑が所在する。

平面プランは、東西側が1m、南北側が90cmを測り、楕円形プランを呈している。北壁中央には斜めに掘り込まれた、径20cm、深さ70cmの穴が存在している。土坑との直接的な関係はなく木の根の痕跡であるとおもわれる。土坑の主軸方向は、N－21°－Eを示す。

覆土は、4層に分かれる。Ⅰ層は褐色土、Ⅱ層は黒色土で炭化粒子を微量含んでいる。Ⅲ層は明褐色土で人工的埋土の様相を呈しており、Ⅳ層はロームを多量混入していた。また、西壁側のⅡ層とⅢ層の間にロームブロックが認められた。

深さは70cmを測り、壁は垂直に立ち上っている。底面は平坦でしっかりした掘り込みを呈した土坑である。

遺物は、第44図に拓影で示した口縁部片と黒曜石剝片2点が出土した。口縁部片は、器厚がうすく、調整が整ってきれいな土器である。焼成は固い。D11号土坑出土の小形土器に類似する。文様は先の尖った施文具で連続刻目を縦・横・円形に施文している。

本土坑は70cmという深さで形も整っており、ダイナミックな遺構である。

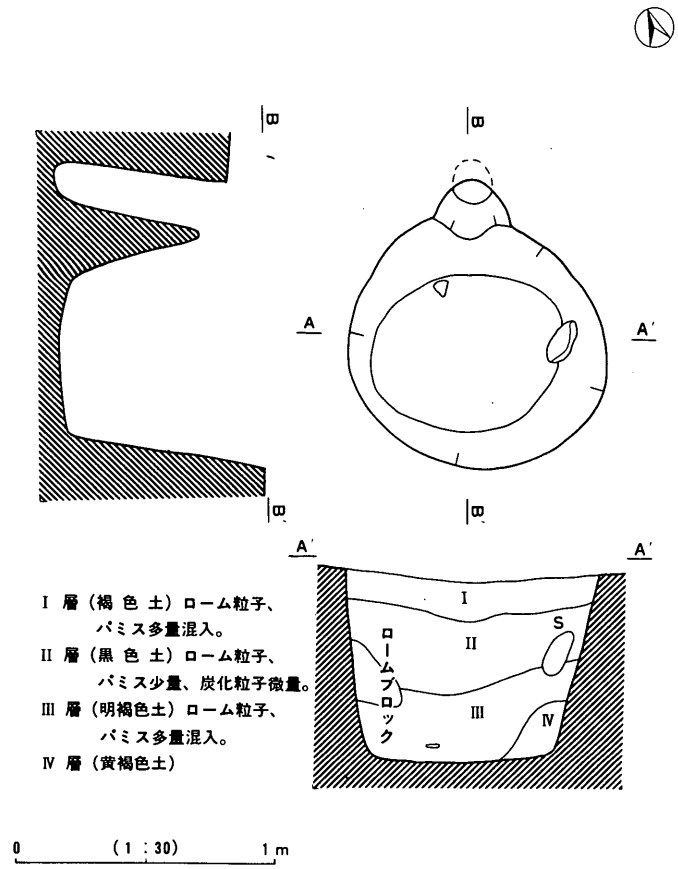
所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

24)　D24号土坑(第46・47図)

本土坑は、D23号土坑の北西側に隣接したC－5グリッド内に検出された。D23号をはじめ付近に隣接しているD19号・D20号と共に、ダイナミックな掘り込みをもつ深い土坑群が集まっている。

平面プランは、長軸115cm、短軸105cmで北側が突き出た、やや不整な円形を呈する。主軸方向は、N－43°－Eを示す。

覆土は、上面漆黒色土のⅠ層と黒褐色土のⅡ層がほぼ坑内全体を覆っている。



第45図　D23号土坑実測図

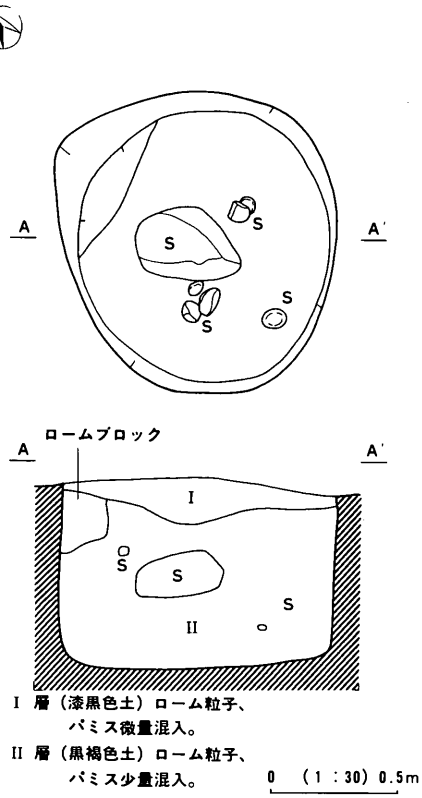
深さは、75cmを測り、本遺跡の土坑では最も深いものである。壁は真直な垂直状態で立ち上っている。

坑内中央の中間部には、28×42cmの礫が配石されていた。その周囲に10cm前後の小さい礫が5個散乱していた。中心部に位置している大きな石は意図的な配石であるとおもわれる。また、北壁先端の突き出しはロームが上部壁際にとび出していることから耕作によるなんからの衝撃が加わったために生じたものと判断される。

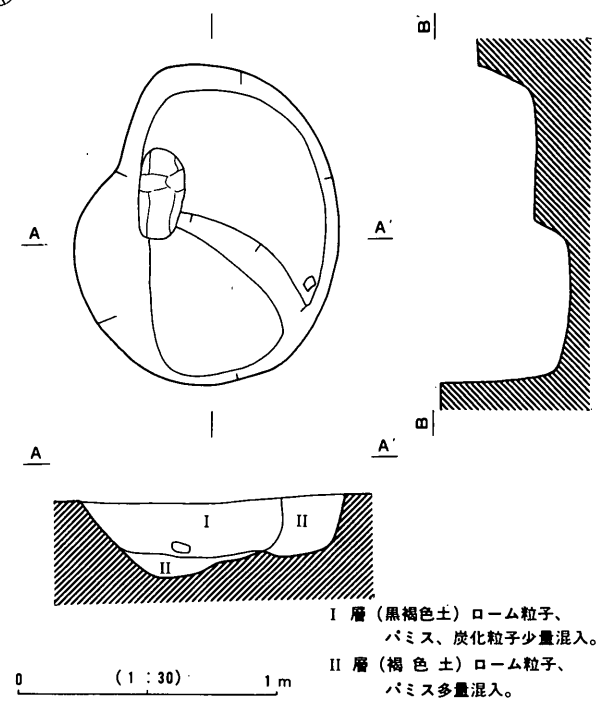
遺物は、底部片5点、口縁部細片2点、胴部片18点、黒曜石剝片3点、その他、第47図1に示した比較的破片の大きい深鉢形土器が出土した。

第47図1は、口径20cmを測ると推定される。器形は、底部から直線的に口縁部まで立ち上る寸胴を呈した形状をとり、口縁部で最大径となる。器面全体に斜縄文が施文されている。

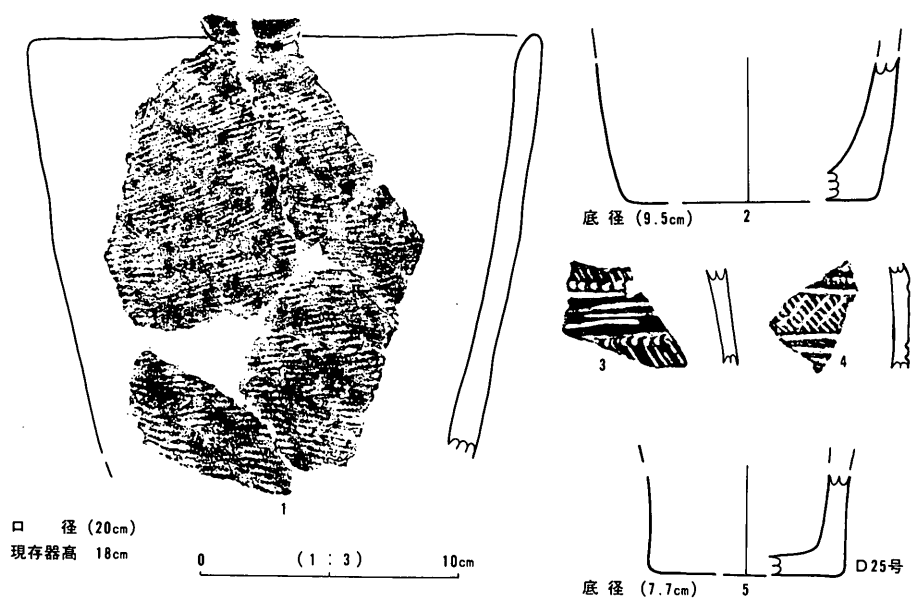
2は、沈線文に連続刺突文が施され、3は格子目文が施文されている。4は、底径9.5cmを測ると推定される。石英状の白い粒子と金雲母が目立つ。内面にはお蕉げ痕が付着しており、煮



第46図　D24号土坑実測図



第48図　D25号土坑実測図



第47図　D24号・D25号土坑実測図

炊き用土器であったことが伺える。

本土坑は、一連の深い土坑群と同様の中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

25)　D25号土坑（第47・48図）

本土坑は、調査区南西端の土堤直下に検出した。B・C－6グリッド内に位置している。

平面プランは、長軸123cm、短軸1mを測り不整な楕円形を呈している。主軸方向は、N－57°－Eを示す。

覆土は、褐色土を基調とした2層から成り、炭化粒子を少量混入するが土層はやわらかい。

深さは、最深部で30cmを計測し、壁は急傾斜で立ち上っている。坑内は2区分され深さ25cmの浅い部分とに段差をもって分かれる。北側の中央上面に18×35cm大のひびの入った礫が所在していた。また、南側の壁下底面に土器底部が認められた。

遺物は、南側壁下底面から出土した底部片1点のみである。第47図5に図示した。底径75cmを測ると推定される。中形の深鉢形土器となろう。器面には縄文が施文された痕跡うかがえる。内面にはお蕉げが付着している。煮炊き用の土器であろう。

本土坑は、段差をもって2区分されている関係から形状が悪い。一連の浅い土坑群の中に含まれるであろう。底部片からその所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式に比定されよう。

26)　D26号土坑（第49図）

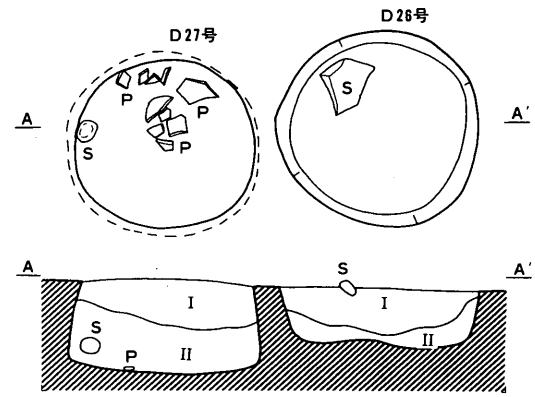
本土坑は、D27号土坑と接する近さに並んで検出された。J1号住居址が北側に隣接している。グリッドは、G－3・4にあたる。

平面プランは、東西側80cm、南北側75cmを計測し、円形プランをとる。主軸方向は、ほぼNを示す。

覆土は、褐色土を基調としており、Ⅰ層が黒褐色土、Ⅱ層が黄褐色土で堅く締りがある。

深さは22cmで、底面は中央がやや上げ底状態を示している。

坑内の北西側コーナー寄りに、20cm大の角礫が配石されていた。意図的なものと判断される。



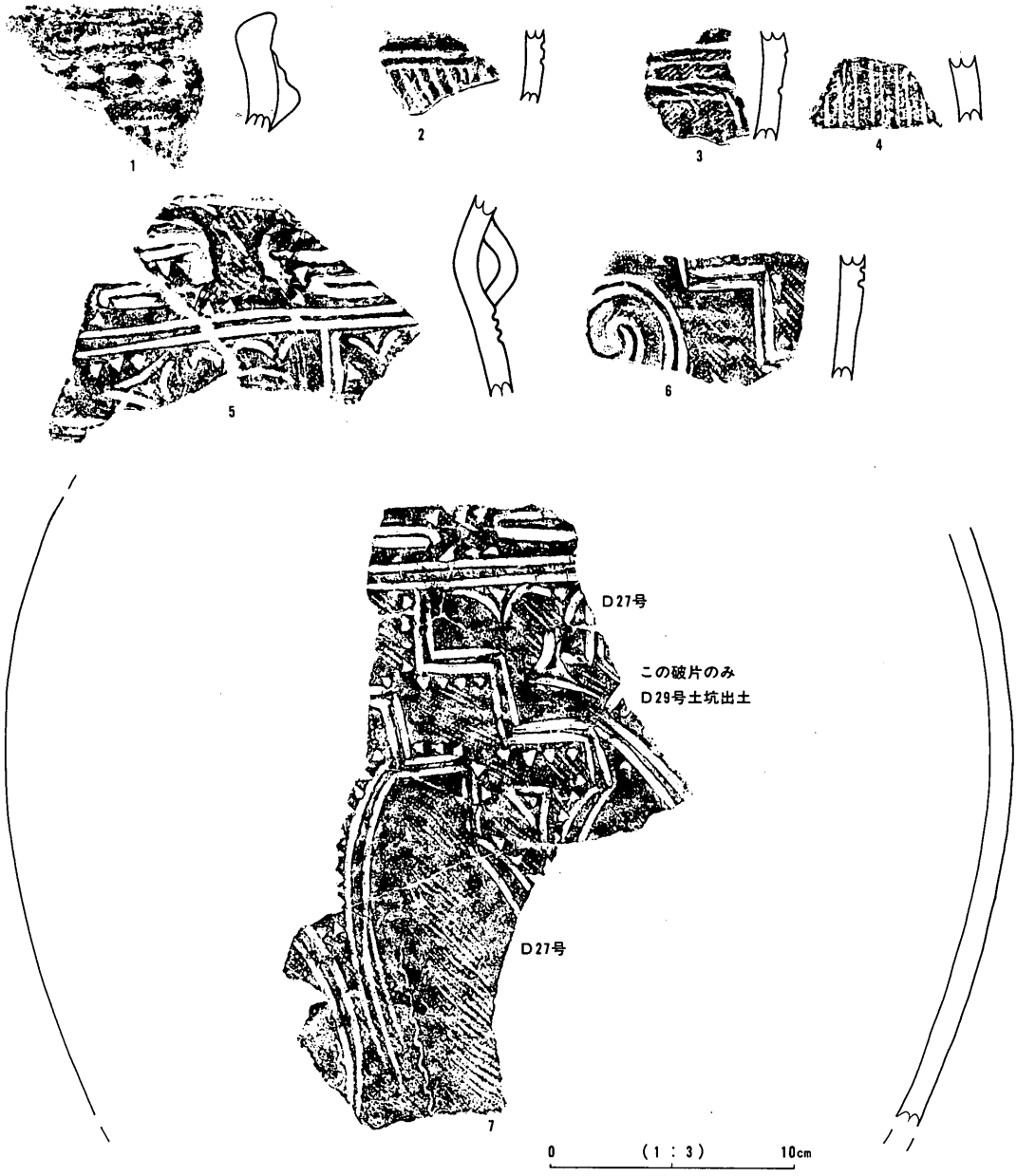
D26号
Ⅰ層（黒褐色土）ローム粒子、パミス微量混入。堅い。
Ⅱ層（黄褐色土）ローム粒子、パミス多量混入。黄色強く堅い。

D27号
Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（1cm大）炭化粒子微量混入。
Ⅱ層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（1cm大）多量、炭化粒子微量混入。

第49図　D26号・D27号土坑実測図

遺物は、摩滅の著しい土器片１点が出土している。Ｊ１号住居址の埋甕炉の土器に類似している。

本土坑は、中期初頭九兵衛尾根Ｉ式期に比定されよう。



第50図　Ｄ27号・Ｄ29号土坑出土土器拓影図

27)　D27号土坑（第49・50図）

本土坑は、右側にD26号土坑が並び、南西側にD29号土坑が隣接しているG－3グリッド内に検出された。

平面プランは、東西側が70cm、南北側が65cmを測り円形プランを呈する。主軸方位は、ほぼNを示す。

覆土はⅠ層が漆黒色土、Ⅱ層が暗褐色土で共に炭化粒子を微量混入する。Ⅰ層に比較するとⅡ層の方が堅い。深さは、35cmを計測し、壁はオーバーハングして垂直に立ち上っている。

坑内中心部から北壁際にかけて土器が集中的に出土した。底面から浮いた状態であった。

遺物は、第50図に拓影で示した7点と無文土器胴部片、縄文の施文された土器片、黒曜石剝片1点が出土している。

1は口縁部片で摩滅している。目の荒い押引き文が施文されている。2は、溝の深い横位の沈線が施文されているので隆帯のように盛り上がっている。区画内には格子目文が施文されている。格子目は当初溝の深い沈線が付けられ、その上部はヘラ状の工具で浅い刻目を入れている。本遺跡出土の格子目はこのような状態が特徴である。3は、沈線文と縄文が施されている。4は垂下する沈線文が区画内に6～7mmの間隔で施文されている。J1号住居址埋甕炉と同類の土器であるが、熱は炉の土器ほど受けていないので焼成固くしっかりしている。

5・6・7は、同個体の土器片とおもわれるが接合には至らなかった。5・6はやや摩耗気味であるが、7は丁寧な調整できれいな土器である。胴部は球状に湾曲し底部付近ですぼまる器形であろう。口縁部は5にみられるように4単位の橋状把手が付き、その上部でわずかに外反する口縁になるとおもわれる。5の破片を7と組み合わせた図上復元図を示した。

文様は、沈線文、斜縄分、三角印刻文、渦巻文で構成されている。隆帯は全くみられない。胴下には結節縄文が連続して垂下している。また、沈線で三角形を作り出し中央部には三角形の印刻文が施文されている。ところどころ磨消しはみられるものの地文は縄文でうめられている。籠畑式期の影響が強く残っているが、新しい感覚のにじみ出た精製土器である。

また、7の胴中央部の破片は、隣接しているD29号土坑から出土した破片と接合できた。両土坑は同時に構築された可能性がある。

本土坑は、他の出土土器との関係からも九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

28)　D28号土坑（第51・52図）

本土坑は、J1号住居址の南西コーナーに検出された。住居址を少し切って構築している。グリッドはF－3内にあたる。

平面プランは、径90cmの円形プランをとる。主軸方向は、ほぼNを指し示している。

覆土は、2層によって形成され、Ⅰ層が漆黒色土で炭化粒子を微量含む。Ⅱ層は黄褐色土で

ロームをブロック状に混入する。

深さは、30cmを測り、壁は垂直に近い状態で立ち上っている。底面は平坦である。南壁直下に10×15cm大の三角形の石があった。

遺物は、土器片3点と黒曜石剝片2点が出土した。その内の2点を拓影で第52図に示した。1は、細い撚り糸文が施文されている。2は、溝の深い沈線文（半隆起線文）が施文された細片である。

以上から、本土坑の所産期は中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

29)　D29号土坑（第53・54図）

本土坑は、D27号土坑の南西側に隣接して検出された。F・G－4グリッドの線上に位置している。

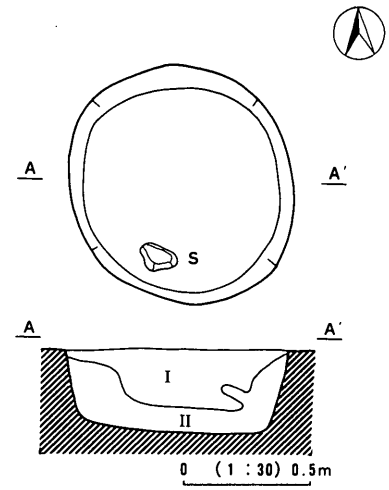
平面プランは、径67cmの円形プランである。主軸方向は、N－13°－Eを示す。

覆土は、Ⅰ層が漆黒色土、Ⅱ層が暗褐色土で共に炭化粒子を混入するが、その量はⅡ層の方が多くなる。

深さは、25cmを測り、壁は急傾斜で立ち上っている。坑内の南壁中央には、口縁～胴中央にかけての深鉢が立てかけるような状態で出土した。坑内中央にあった土器片は、D27号土坑出土の土器片と接合された。D26号・D27号・D28号・D29号土坑は、小形である形状と同個体の土器片出土などから同時期に構築されたとおもわれる。

出土した遺物は全て拓影が可能であったため、第54図に示した。1は、4山の口縁を呈すと推定される。山の直下に孔を有し、おへその形をしている。その直下に低い橋状の把手がある。頸部～胴下までは、やや丸みをもつか、寸胴であるかという器形であろう。

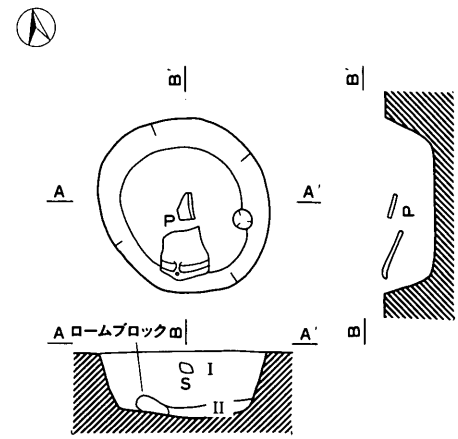
文様は、沈線文で構成されている。口辺部は横に長い楕円形の区画が設けられ、区画内は縦線が連続



Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス、炭化粒子微量含む。
Ⅱ層（黄褐色土）ロームブロック状に混入。

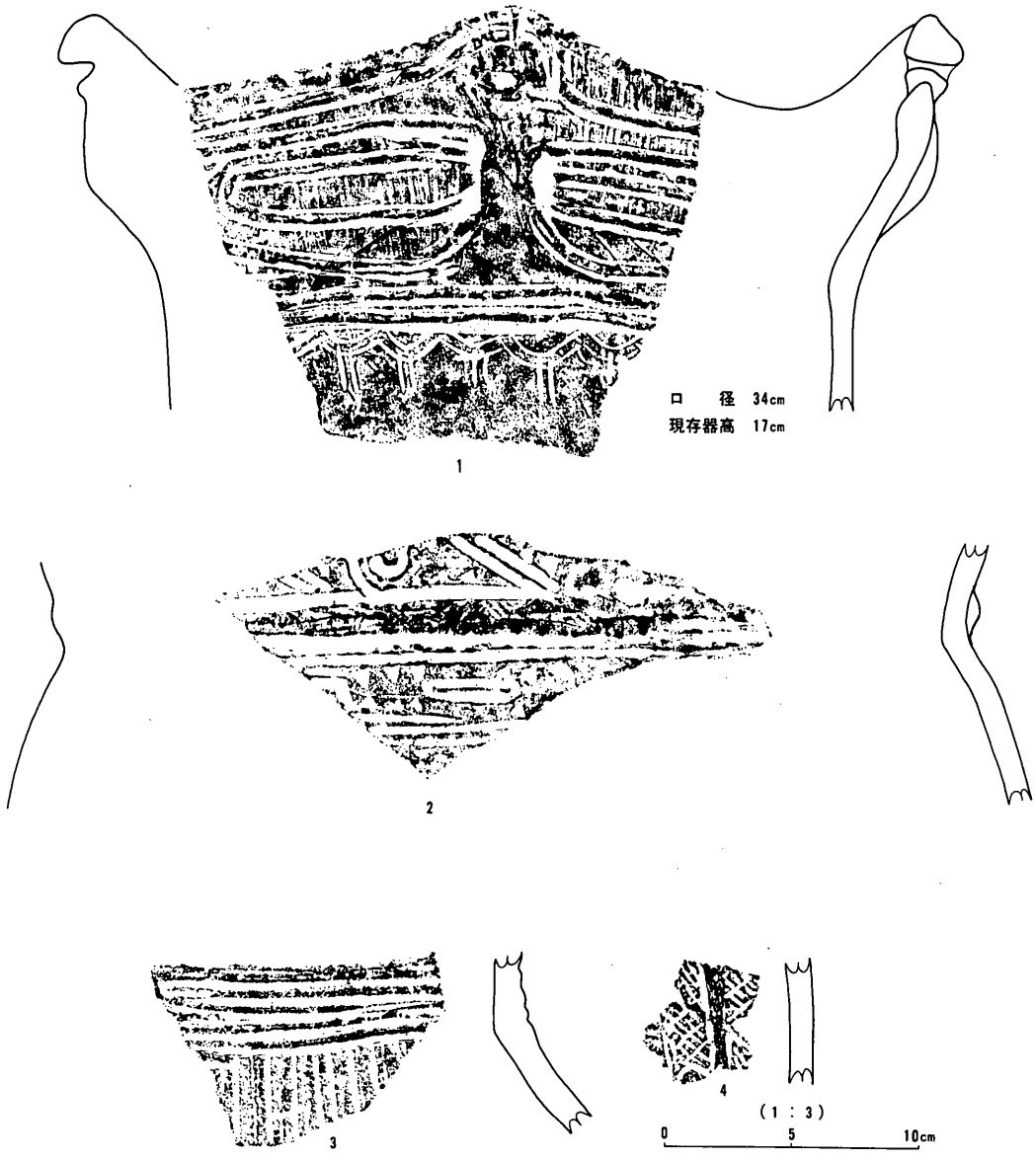
第51図　D28号土坑実測図

第52図　D28号土坑出土土器拓影図



Ⅰ層（漆黒色土）ローム粒子、パミス（5mm大）炭化粒子微量混入。
Ⅱ層（暗褐色土）ローム粒子、パミス（5mm大）炭化粒子少量混入。
0 (1：30) 0.5m

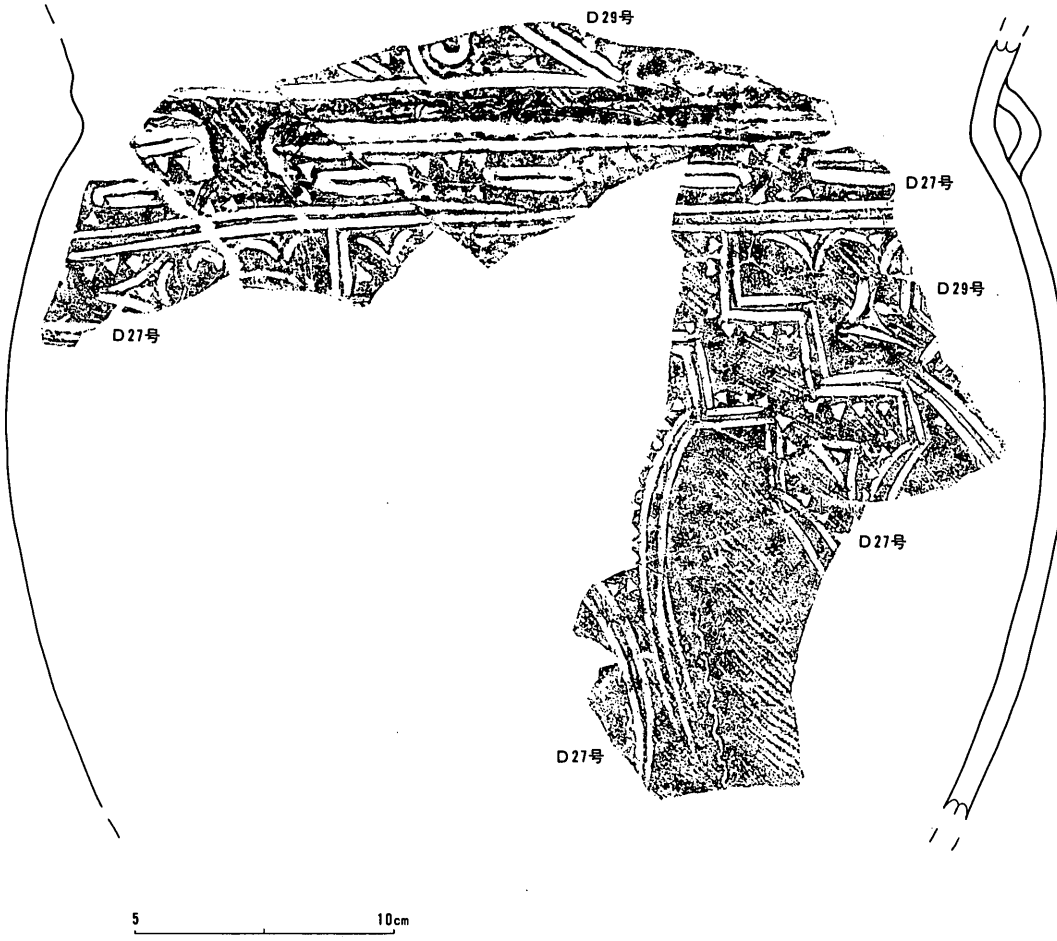
第53図　D29号土坑実測図



第54図　D29号土坑出土土器実測図

している。区画の線は溝が深く半隆起線文となっている。頸部は横位二条の半隆起線文が施文され、胴上部は沈線による連続Y字文が描かれている。籠畑Ⅱ式の手法である。器面は無分となりそうであるが欠けているのでわからない。茶褐色を呈し胎土中に金雲母を多量含む。調整は粗い。2は、D27号土坑出土の土器(第50図5)と焼成、胎土、文様が酷似する。接合すると同個体であることがわかった。第55図に接合図を示した。頸部には太い半隆起線文が一条巡っている。三角印刻文、渦巻文、沈線部で文様構成されている。頸部の径は31cmで大形土器である。

3は、平行する半隆起線文と5～8㎜間隔に沈線が縦に描かれた頸部片である。J1号住居址の埋甕炉の土器と酷似している。しかし、埋甕炉のように熱は受けていない。この土器はD27号、D30号土坑からも出土している。茶褐色を呈し胎土中に金雲母を多量含む。特に胴部がどの土器も粗製でザラついている。4は、格子目文様が描かれている。垂下するのは半隆起線文である。



第55図　D27号・D29号土坑出土の接合土器実測図

第55図は、D27号・D29号土坑出土の土器が接合し一個体となった復原図である。現存の器高は31㎝を測り、頸部径36㎝と推定される。口縁部あるいは胴中央部が最大径（42㎝）となるとおもわれる。胴部は球状に丸みをもっていることから、甕形の器形になるであろう。

文様は、沈線文で渦巻、平行線、V状、三角形などを描き、三角形の印刻文がところどころに配置され、地文は斜縄文、結節縄文が垂下している。隆帯は橋状把手のみである。頸部は交互に配した隆起線文であり隆帯ではない。古い様相が残っている土器で籠畑式期の影響が強い。

D27号土坑で3片、D29号土坑で大形破片2片とに分かれている。時間的差があまりない状態で土坑が構築されたとおもわれる。

本土坑の所産期は、以上の出土土器から中期初頭九兵衛尾根一式期に比定されよう。

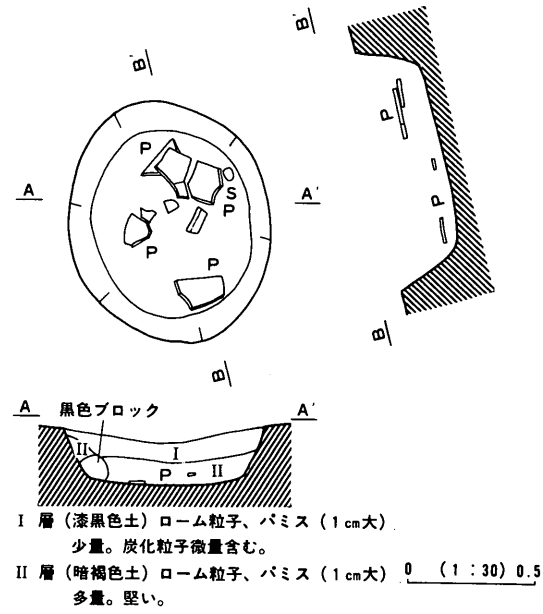
30)　D30号土坑（第55～57図）

本土坑は、調査区中央付近のF－4グリッド内に検出された。すぐ脇に炭を焼いた穴があり、北東側には小形で坑内に土器が多量に埋めこまれた、D26号～D29号土坑が集中している。

平面プランは、長軸95cm、短軸80cmで楕円形を呈する。主軸方向は、N－40°－Wを示す。

覆土は、2層から成り、I層が漆黒色土で炭化粒子を混入する。II層は暗褐色土で堅い。II層の西壁下に黒色土のブロック層が認められた。

深さは20cmを測り、壁は急傾斜で立ち上っている。II層中の底面および直上に10～20cm大の土器片が多量に並んでいた。

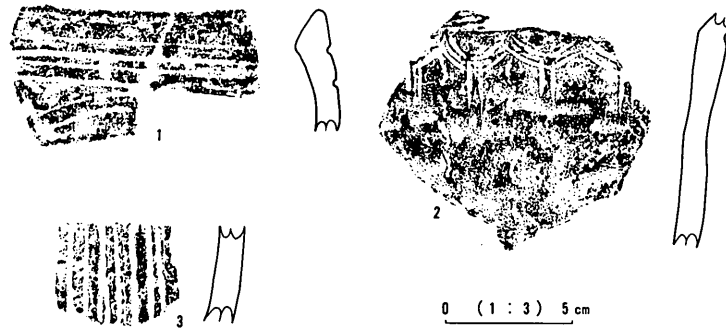


第56図　D30号土坑実測図

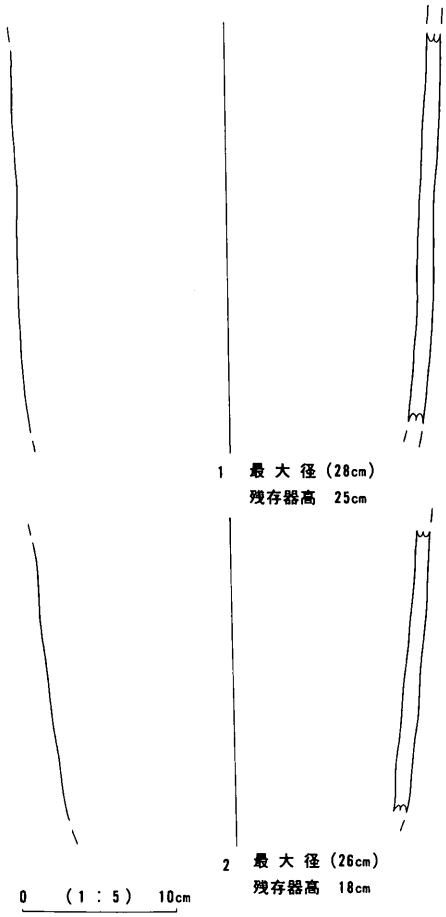
遺物は主に、第57図に示した無文粗製土器が主体を占めていた。破片は第56図の拓影図に示した。1は、口縁部片で内側に強い陵線があり口縁端部は三角形を呈す。沈線文で文様構成されている。

胎土中に白い砂粒子と金雲母が多量含まれている。

2は、沈線によるY字文



第57図　D30号土坑出土土器拓影図



第58図　D30号土坑出土土器実測図

と結節縄文が垂下している。1と同様の胎土である。D29号土坑出土のY字文と同じ描き方であるが、D29号の土器には結節縄文が見られない。また、本土坑の土器片は摩滅しているが、D29号のものは焼成固くしっかりしている。その点、むしろ第57図の無文粗製土器の口縁に近い部分の破片かとおもわれる。

3は、一連のJ1号住居址埋甕炉の土器と酷似する土器片である。熱はうけていない。

第57図の無文粗製土器は2個体の破片が出土している。1は、残存器高25cm、最大径28cmである。2は、最大径26cm、残存器高18cmを測る。この無文粗製土器の口縁部は、第56図1や2の口辺部であるかともおもわれるが接合には至らなかった。茶褐色を呈し、胎土中に白い砂粒子と金雲母を多量混入している。焼成は固いが、もろい部分が多少みられる。お焦げの付着はみられなかった。

この他、黒曜石の剝片6点が出土している。

本土坑の所産期は、九兵衛尾根Ⅰ式期に比定されよう。

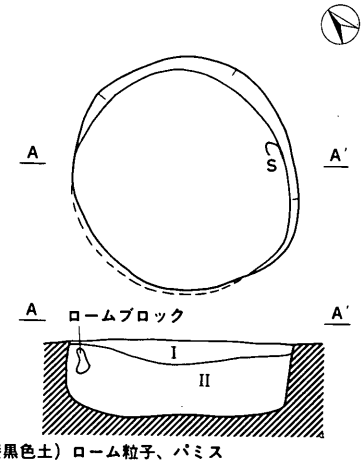
31）　D31号土坑（第58・59図）

本土坑は、調査区中央のE－3グリッド内に検出された。東西側の左右に3.5mの間隔をもってD28号、D34号土坑が隣接している。

平面プランは、径90cmを測り、円形を呈する。主軸方向は、N－38°－Eを示す。覆土は、Ⅰ層が漆黒色土で、ローム粒子、5mm～1cm大のパミスを微量混入する。Ⅱ層は褐色土で底面付近に炭化粒子を多量混入する。意図的な埋土であるとおもわれる。

深さは30cmで、壁は垂直に立ち上る部分とオーバーハングして立ち上る部分がある。底面は平坦である。

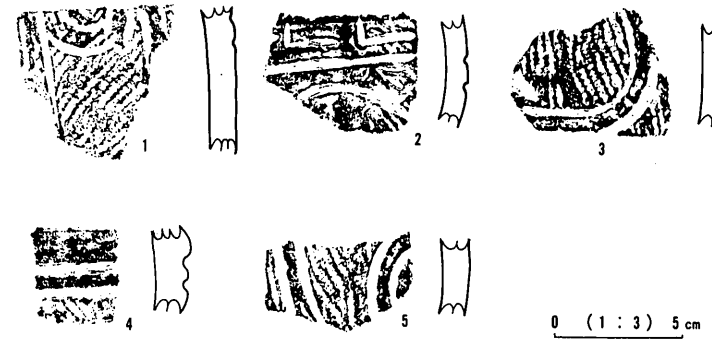
遺物は、黒曜石剝片7点、土器片6点が出土した。この内、5点を第59図の拓影図に示した。1は、地文にやや大粒の斜縄文が施文され、沈線の渦巻文、垂下する沈線文で構成されている。暗褐色を呈し胎土中に金雲母の混入多く、焼成固い。2も沈線文が主体である。焼成、胎土は1に類似する。3は、茶褐色を呈し半隆起線文の区画内は斜縄文で埋められている。4、5も半隆起線文と斜縄文で構成されている。暗褐色を呈し、胎土、焼成は1・2と同様の状態にある。



I 層（漆黒色土）ローム粒子、パミス
（5mm～1cm大）微量混入。
II　　ローム粒子、パミス
（5mm～1cm大）多量混入。
II 層（褐 色 土）炭化粒子底面に多量ある。

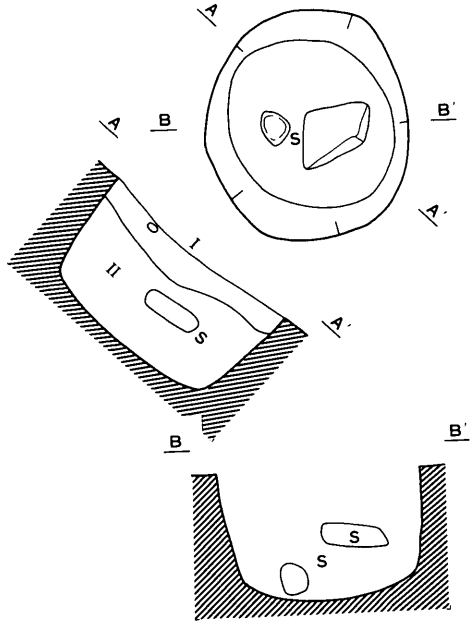
0　（1：30）0.5m

第59図　D31号土坑実測図



第60図　D31号土坑出土土器拓影図

本土坑の所産期は、中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期の新しい時期に比定されよう。



I 層（黒 色 土）ローム粒子、パミス微量混入。
II 層（暗褐色土）ローム粒子、パミス少量混入。

0　（1：30）0.5m

第61図　D32号土坑実測図

32)　D32号土坑（第60・61図）

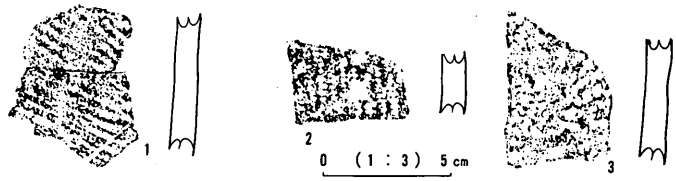
本土坑は、J1号住居址の東側に住居址と接して構築されており、G－2グリッド内に属している。

平面プランは、長軸をとる南北側が90cm、短軸をとる東西側が80cmを測り、楕円形を呈する主軸方向は、ほぼ北を示している。

覆土は、2層から成り、Ⅰ層が黒色土、Ⅱ層が暗褐色土で、ローム粒子とパミスの他は混入物は認められなかった。

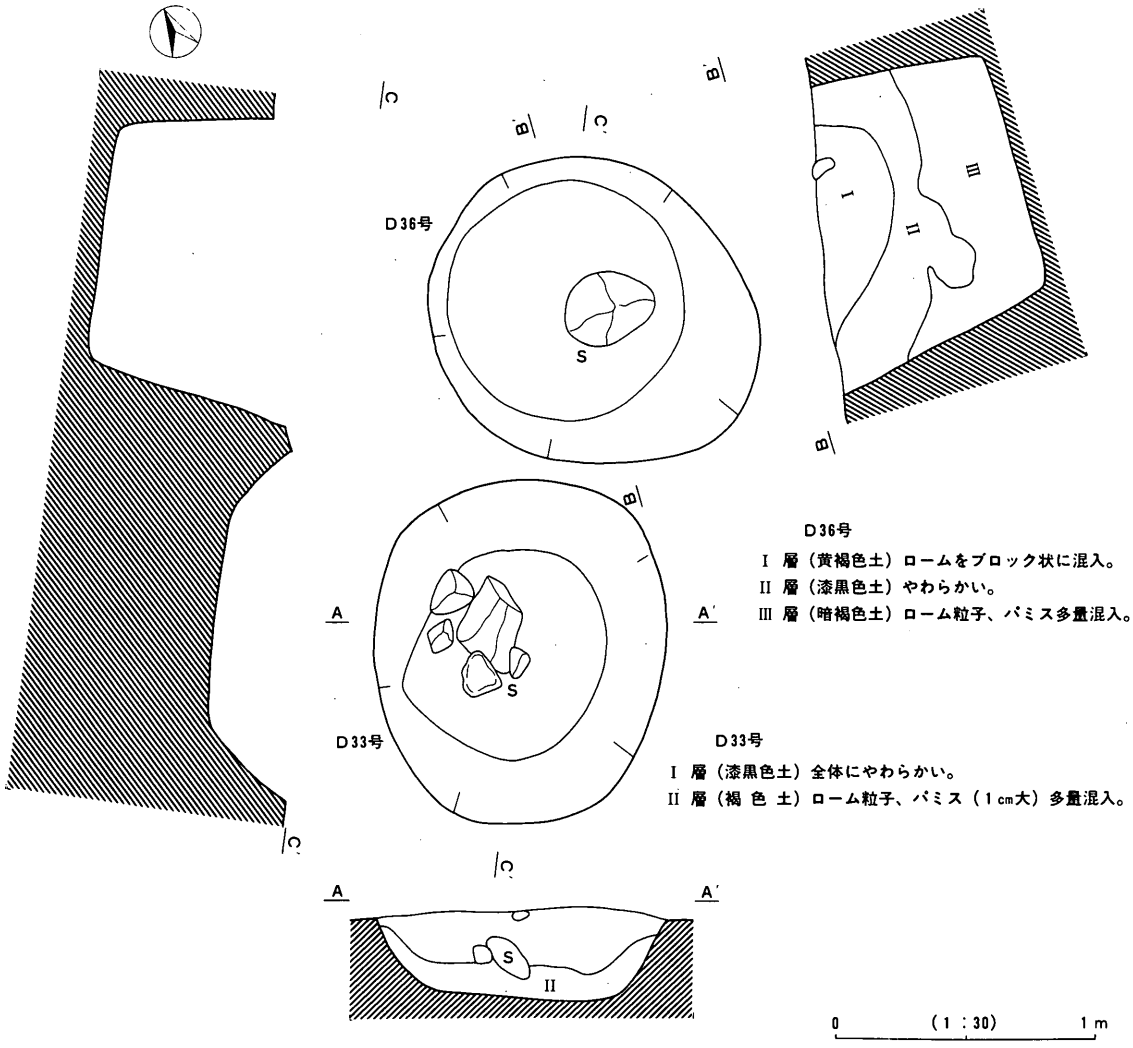
深さは、40cmで小形ながらしっかりした掘り込みで、壁は垂直に立ち上っていた。坑内には20×25cm大の偏平な礫と10cm大の丸みのある礫が上下に並んで配石されていた。偏平で四角形の礫と丸い礫との組み合わせは、なんらかの意味をもつ意図的配石であるとおもわれる。

遺物は、第61図に拓影で示した土器片と他４点、石錐１点（第68図）、黒曜石剝片４点が出土した。拓影図の１～３は、地文に縄文が施文された土器片ばかりである。



第62図　D32号土坑出土土器拓影図

本土坑の所産期は、本集落確立期の中期初頭九兵衛尾根Ｉ式期に比定されよう。



第63図　D33号・D36号土坑実測図

33)　D33号土坑（第62図）

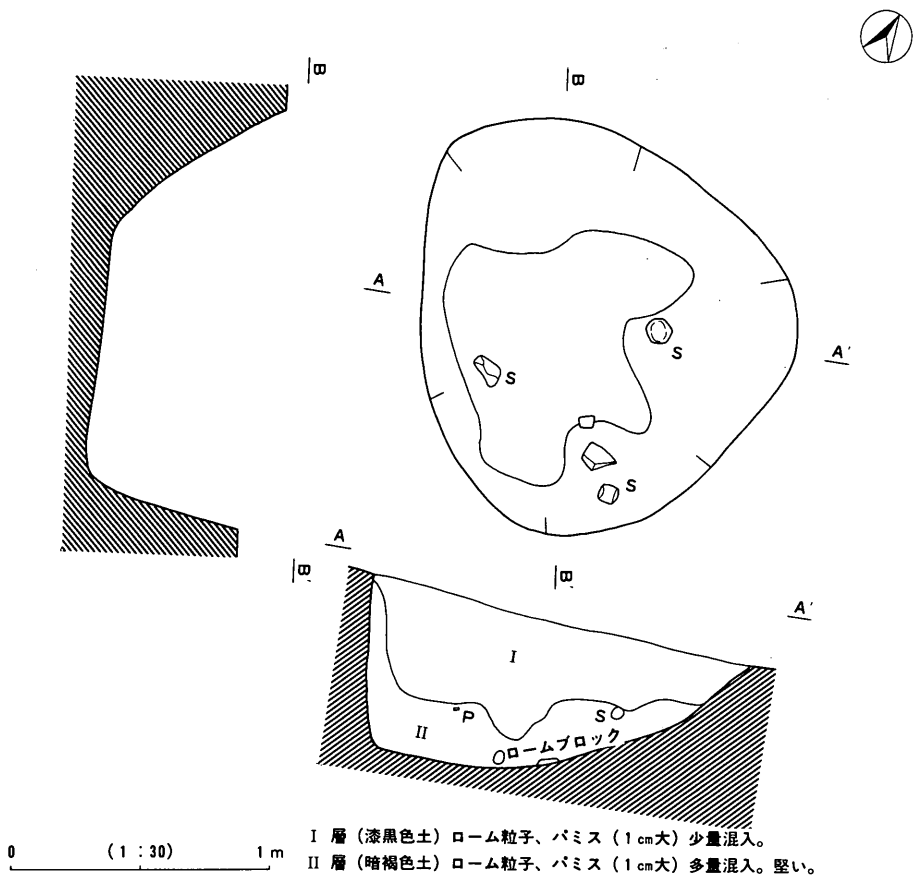
本土坑は、調査区中央の最西端に検出された。すぐ脇の北側にD36号土坑が接近し、さらにＪ２号住居址、Ｊ３号住居址が北側と南側に所在しているため、その間の空白地点に構築されているといえる。グリッドは、Ａ－３・４に属している。

平面プランは、長軸側が135cm、短軸側が113cmを測り、楕円形を呈する。本調査区検出の土坑としては大形に属する。主軸方向は、Ｎ－42°－Ｅを示す。

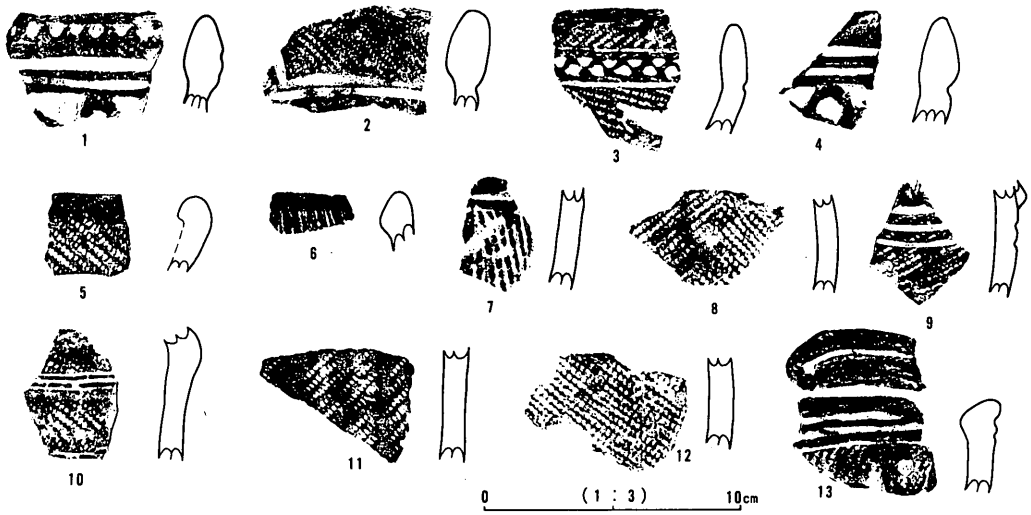
覆土は、Ⅰ層が漆黒色土でソフトである。Ⅱ層は褐色土でローム粒子、１cm大のパミスを多量混入する。

深さは、35cmを計測し、底面は平坦である。坑内には10cm大～30cm大の礫が５個集石していた。

遺物の出土は皆無であるが、本土坑も集落の確立期に比定されよう。



第64図　D34号土坑実測図



第65図　D34号土坑出土土器拓影図

34)　D34号土坑（第63・64図）

本土坑は、調査区の北西側C・D－3グリッド内に検出された。周囲は3m～4mの間隔で土坑が点在し、比較的間隔が広くゆるやかである。

平面プランは、長軸をとる南北側は1.6m、短軸の東西側が1.5mを計測し、東側に突き出た不整な楕円形を呈する。主軸方位は、N－35°－Wを示す。

覆土は、Ⅰ層が漆黒色土で、Ⅱ層が暗褐色土となり堅い。Ⅱ層中には5～6cmのロームブロックが3箇所に認められた。

深さは、60～70cmを計測するが、地形的な関係による段差である。壁は垂直に立ち上る西南側と、ゆるやかに立ち上る北東側とに分かれる。底面は平坦ではあるが形状がゆがんでいる。特に北東側は底面と壁上面の幅が広く、底面は波状を呈している。

遺物は、土器片45点、黒曜石剝片7点、石鏃完形品3点が出土している。第64図は拓影図を示した。1は、口唇部直下に円形に近い刺突文が施され、その直下に二条の平行沈線、粗雑な陰彫の三叉文がみられる。2も1と同様器厚の厚い口縁部片で斜縄文と沈線文が施文されている。3は、精製された土器で、斜縄文と三角刻目を交互につけた鋸歯状文が平行沈線の区画内に施文されている。また、陰彫の三叉文も見受けられる。5も、肉厚の口縁部片で、陰彫の三叉文と渦巻文らしきものが見えるが細片なのでよくわからない。

5、8、9～12は、沈線文、斜縄文で構成された土器片で焼成固く、調整は丁寧である。6・7は細線文が施文されている。13は、口唇部に一条の平行沈線が施文され、正に唇状の形をしている。正面の文様は、玉抱三叉文的様相が伺えるが割れているので分からない。

本土坑は、ダイナミックな掘り方で大胆なつくりである。石鏃3点の出土は、本遺跡の遺構では唯一の貴重なものである。本坑の所産期は中期初頭九兵衛尾根Ⅰ式期に比定できよう。

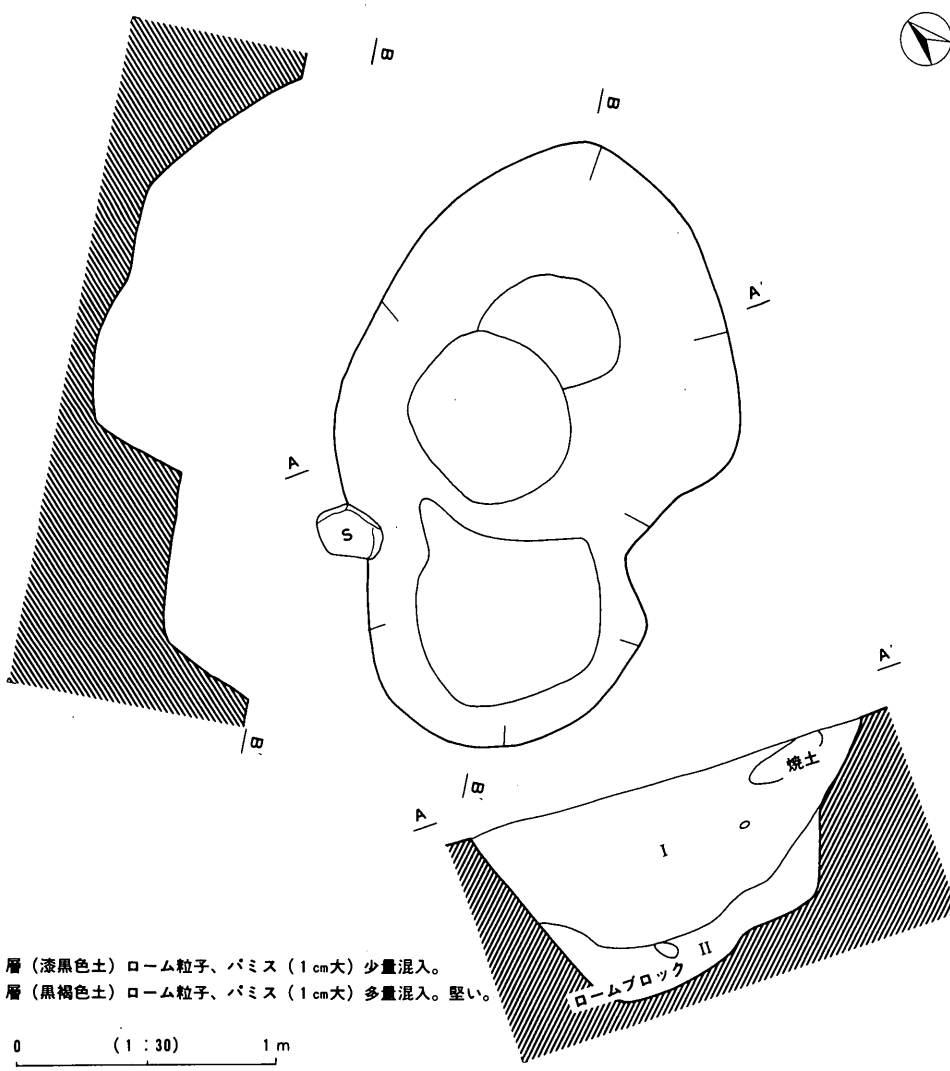
35)　D35号土坑（第65・66図）

本土坑は、調査区の最北西端に検出された。すぐ西南側にＪ３号住居址が所在するが、北東側には遺構が認められない。Ｂ・Ｃ－１グリッドにあたる。

平面プランは、長軸が2.4m、短軸が1.55mを計測し、本調査区においては最大の規模となる。ダイナミックな遺構である。主軸方向は、Ｎ－58°－Ｅを示す。

覆土は、２層により形成され、Ｉ層が漆黒色土で東側上面に焼土がブロック状に堆積していた。Ⅱ層は黒褐色土で堅い。

深さは、40～55cmを測り、底面は段を有している。上場がややくびれる南端部の底面は40cm

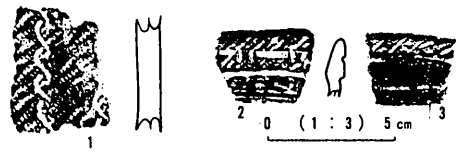


第66図　D35号土坑実測図

の段差がみられる。

出土遺物は、土器片７点、黒曜石剝片３点が出土し、その内の２点を拓影図に示した。

第66図１は、斜縄文とＳ字状の結節縄文が施文されている。２は、器厚のうすい精製土器で表裏面を拓影に示した。斜縄文、沈線文、刺突文で構成され、特に沈線文の溝には赤色塗彩が施されている。内側にも斜縄文直下の沈線に一条の赤色塗彩がみられる。特別な土器であるとおもわれる。



第67図　Ｄ35号土坑出土土器拓影図

本土坑の所産期は、縄文中期初頭九兵衛尾根Ｉ式期に比定されよう。

36)　Ｄ36号土坑（第63図）

本土坑は、Ｄ33号と並び、Ｊ２号住居址の北西コーナー、Ｊ３号住居址の南東コーナーに接した位置に検出された。Ｂ－３グリッド内に属する。

平面プランは、長軸側が1.35m、短軸側が1.2mを測り、東側が張り出した不整な円形を呈する。主軸方向は、Ｎ－42°－Ｅを示す。

覆土は、３層によって形成される。Ｉ層は、ロームをブロック状に混入した黄褐色土で、Ⅱ層はやわらかい漆黒色土に覆われていた。Ⅲ層はローム粒子・パミスを多量混入した暗褐色土で堅い。

最深部は90cmを測り、壁は垂直に立ち上っている。底面は真平でダイナミックな掘り込みがなされた土坑である。上面Ｉ層にはロームの塊が中央に残っていて攪乱があったとおもわれる。

遺物の出土は皆無であった。これ程のしっかりした掘り込みを持ちながら遺物の出土がみられないこともめずらしい土坑である。用途が別にあったとおもわれる。

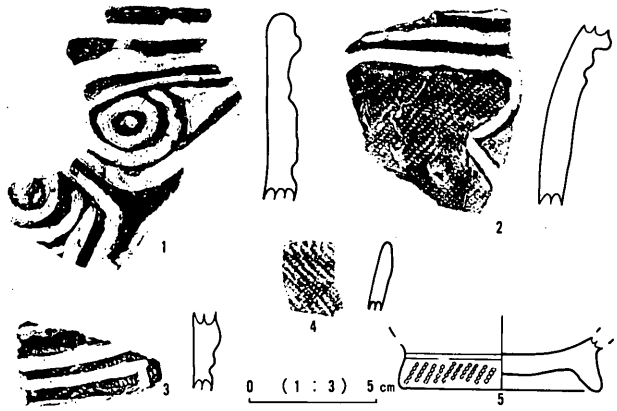
３　グリッド出土遺物

１）土　器（第67図）

本遺跡のグリッドおよび表面採集で得られた土器片は50点程で少ない。この内、５点を取りあげた。

１は、溝の深い半隆起線文の状態となる沈線文で、平行沈線、渦巻文が施文されている。陰彫の三叉文も加わる。

２も、溝の深い沈線文に斜縄文、



第68図　表面採集土器拓影図

結節縄文が施文されている。３は、同じく溝の深い平行沈線文に斜縄文が見受けられる細片である。４は、器厚がうすい小形土器の口縁部で口唇付近に三つの刻目があり、地文は斜縄文が施文されている。

５は、高台付土器の高台部である。径7.8cm、高台は1.3cmで低い。台部の正面は斜縄文が施文されている。調整は粗い。　（島田　恵子）

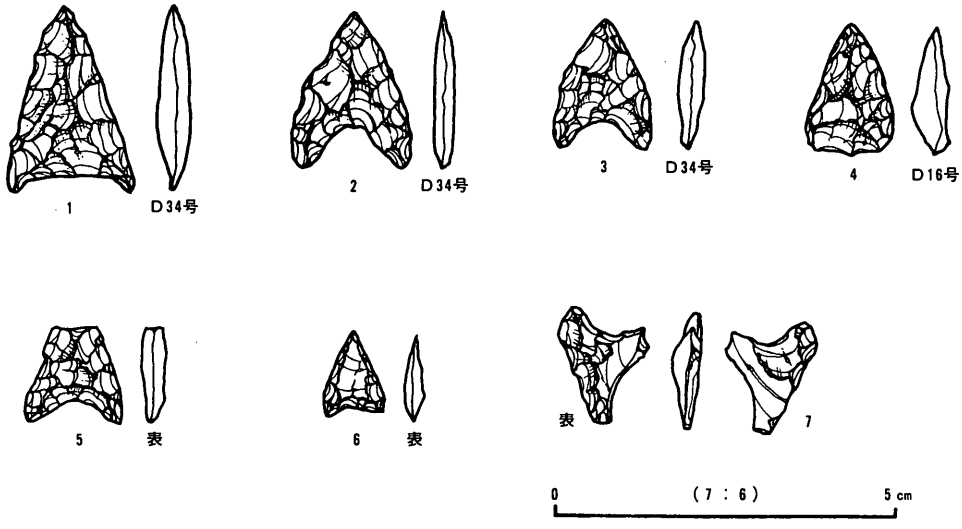
２）石　器

石　鏃（第68図１～６）

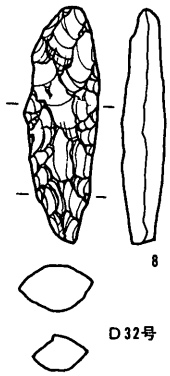
１～３は、Ｄ34号土坑出土、１はチャート製で、最大長2.75cm、最大幅1.9cm、最大厚0.5cm。２は最大長2.35cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cmの黒曜石製である。３も黒曜石製で最大長1.9cm、最大幅1.53cm、最大厚0.4cmである。４はＤ16号土坑出土の黒曜石製で、最大長1.95cm、最大幅1.3cm、最大厚0.5cmである。５、６は遺跡内表採遺物で、ともに黒曜石製。５は尖端を古く欠損する現存長1.43cm、最大厚0.36cm。６は最大長1.3cm、最大0.9cm、最大厚0.24cmである。

石　錐（第68図７、８）

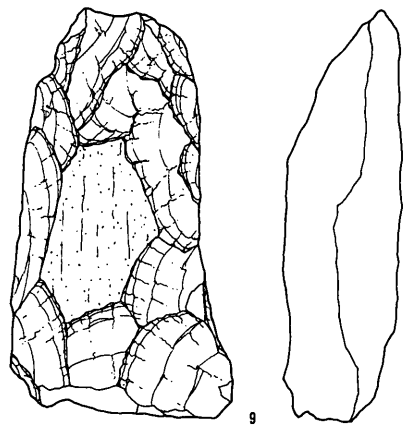
７は剝片の末端側に錐部を設けたものであるが錐尖端を欠損する。現存長1.75cm、幅1.32cm、厚さ0.4cmで黒曜石製である。表面採集遺物。８はＤ32号土坑出土の黒曜石製で最大長3.46cm、最大幅1.1cm、最大厚0.66cmであるが、下端部を欠損する。両面調整の整った形状である。



第69図　穴沢遺跡出土石器実測図石鏃No.1



石　錐　No.2

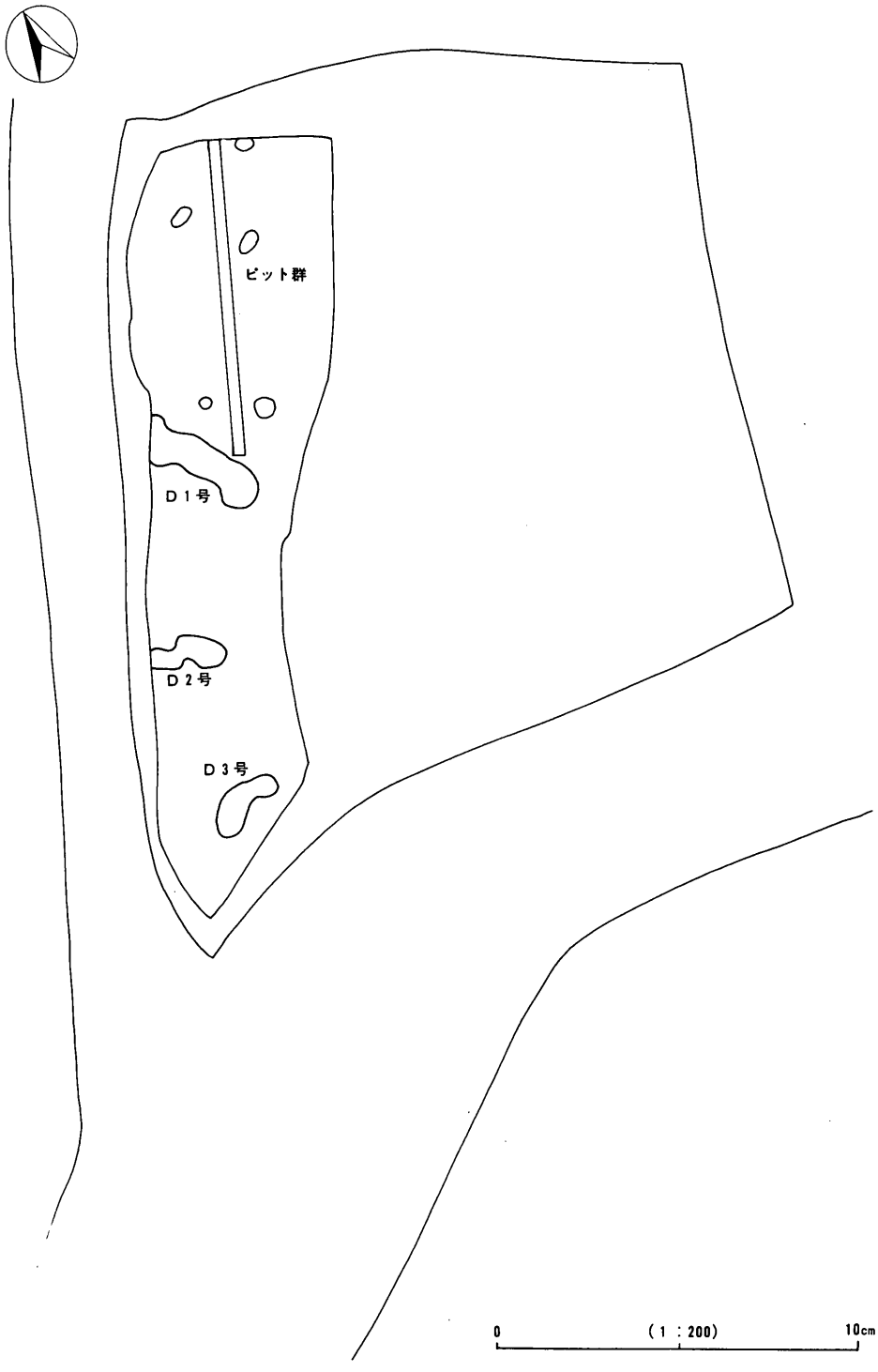


石　鏃　No.3

石　鏃（第68図No.3）

粘板岩製で刃部側の下半部位を欠損する。現存長8.34cm、幅4.55cm、厚さ2.3cmである。表面採集遺物である。

（吉沢　靖）

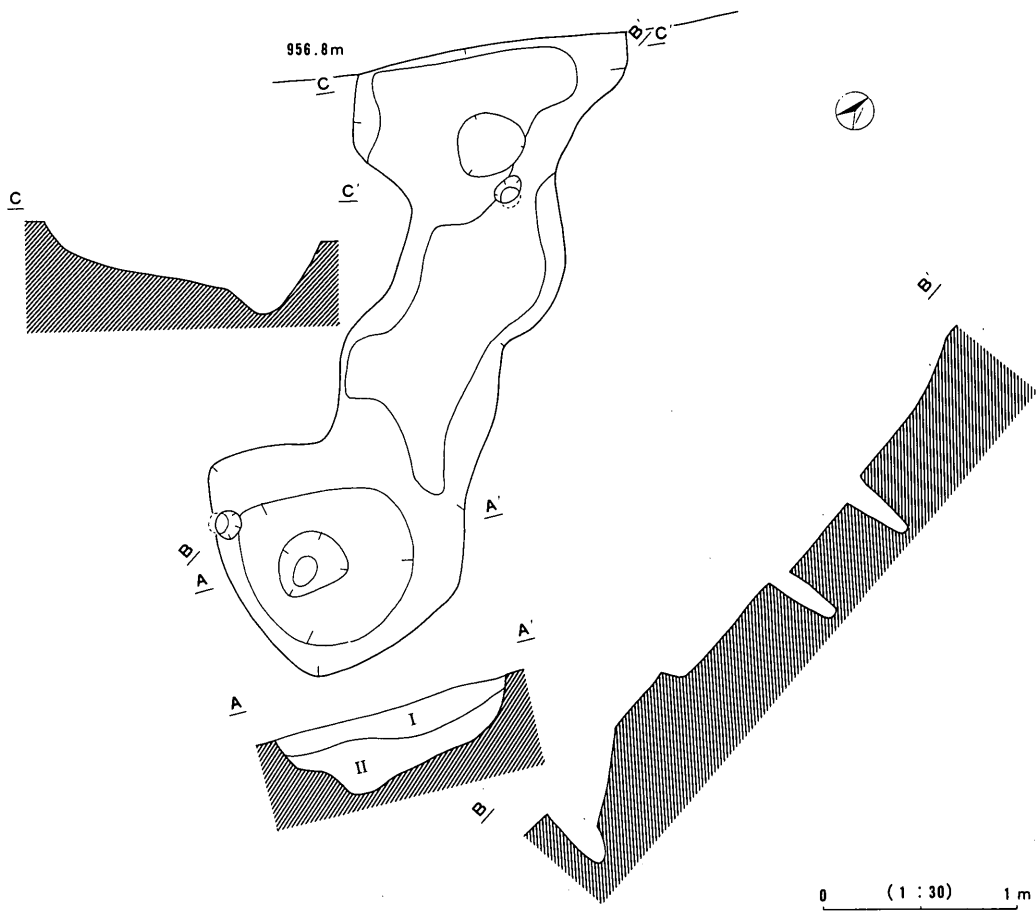


第70図　第２次調査区穴沢遺跡検出遺構全体図

第２次調査

本調査は、平成４年10月１日から10月７日にかけて、道路拡幅の約90㎡を調査した。調査区は第１次調査地点から一段丘上った緩傾斜面に位置し、畑および大工さんの作業場となっており、従来からこの畑内で土器・黒曜石が採集された。この一帯は、明治～大正時代にかけて馬市場が開かれた関係から、馬市場とよばれている。

全体図に示されているように、攪乱の入った土坑状の落込みが三箇所と、ピットの群集する地点が検出された。しかし、遺物の出土も黒曜石剝石、チャート剝石、無文土器細片の計10点が出土したのみである。このため、第１次調査区の縄文中期初頭の集落に関連した領域内であることは認められるが、明確な遺構が検出できなかったので、住居址はこの地点に存在してい



Ⅰ 層（褐 色 土）ローム上部に多量混入。炭化粒子、パミス微量含む。堅く締りある。
Ⅱ 層（明褐色土）ローム粒子全体に多量混入。炭化粒子、パミス微量含む。堅く締りある。

第70図　第２次調査Ｄ１号土坑実測図

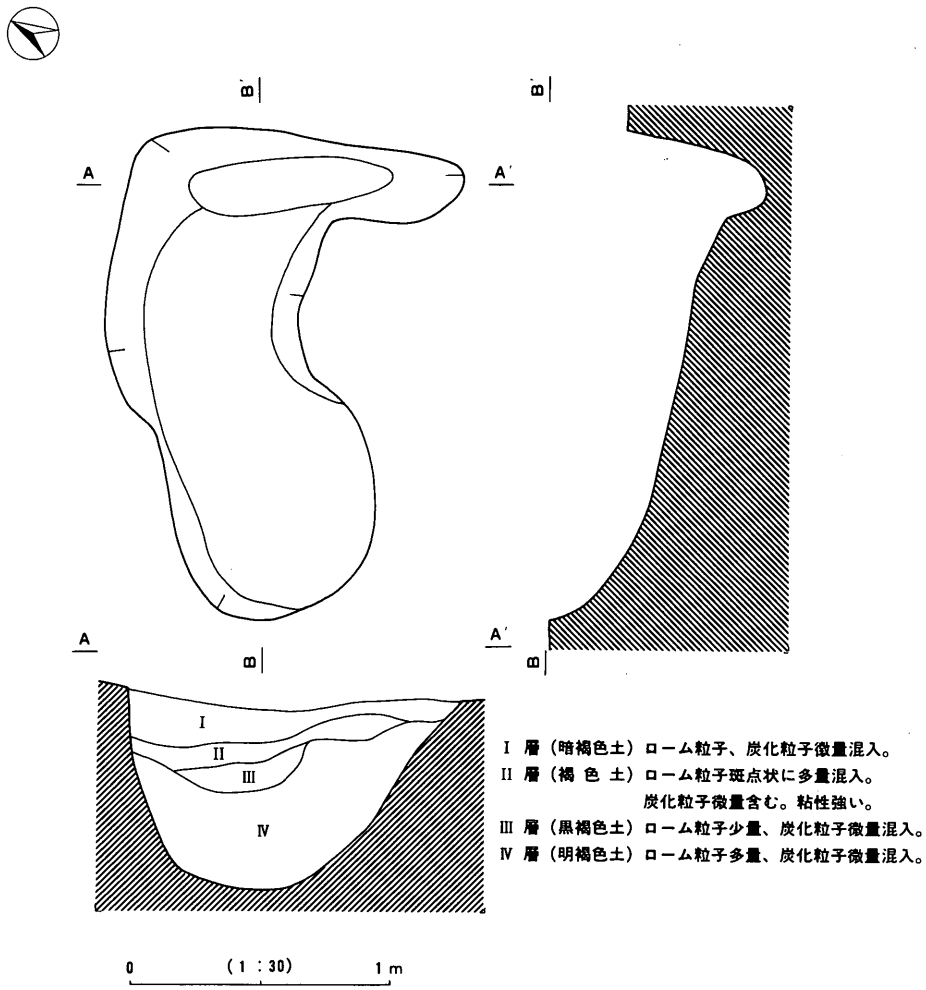
なかったと考えられる。

1　土坑状の遺構

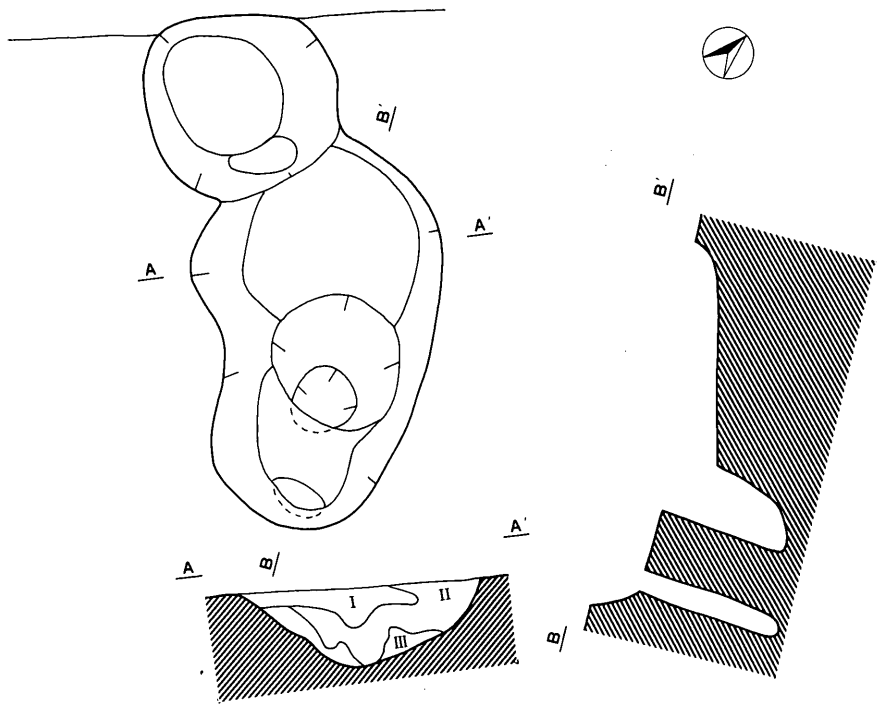
Ｄ１号土坑と命名して調査した遺構は、土坑とおもわれる落込み部分の平面プランをみると、長軸130cm、短軸120cmを計測し、不整な楕円形を呈する。

覆土は、Ⅰ層が褐色土、Ⅱ層が黒褐色土で共に、ローム粒子、パミス、炭化粒子を混入した堅くて締りのある層である。

深さは、30～40cmを測り、壁は急傾斜で立ち上っている。坑内中心部に30×35cmの浅い凹み



第71図　第２次調査Ｄ２号土坑実測図



I 層（暗褐色土）ローム粒子、炭化粒子微量混入。
II 層（黒褐色土）ローム粒子、炭化粒子微量混入。
III 層（黄褐色土）ロームブロック状に多量混入。

0 (1：30) 1m

第72図　第２次調査Ｄ３号土坑実測図

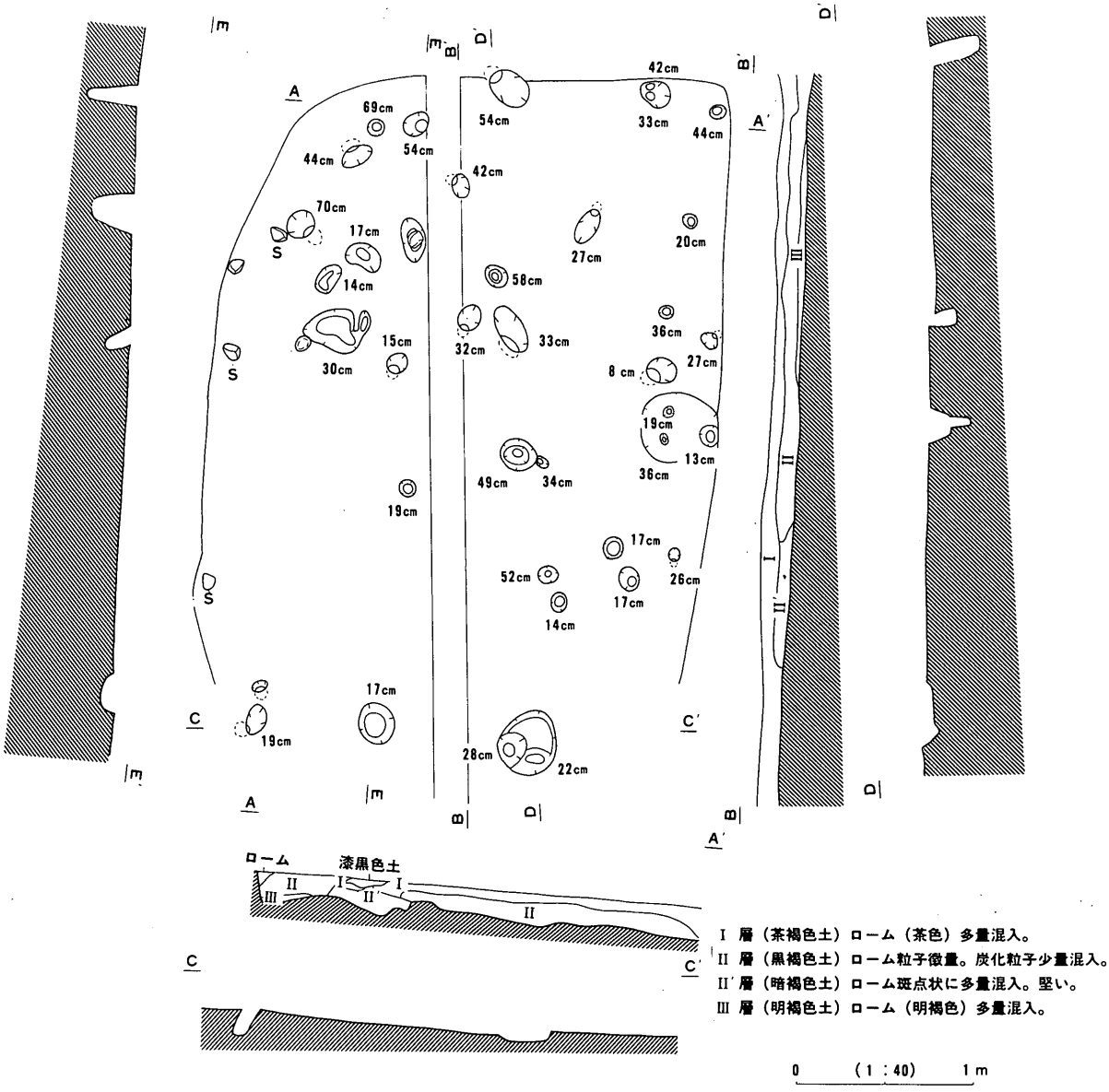
がみられる。

この土坑に連なるように、深さ15cm～40cmの不整な落込みが２ｍの長さに認められ、中間に径13cm、深さ35cmのピットが２個存在している。全体に不整な形状であることから、木の根などによる攪乱によって生じた落込みであると判断される。

Ｄ２号と命名した土坑は、道路に接した部分に長軸135cm、短軸35cm、深さ70cmの落込みが認められ、黒曜石とチャートの剝片、無文土器細片の計４点が出土している。

覆土は褐色土を基調とした４層に覆われ、炭化粒子を微量混入した粘性の強い土層であった。道路際の深い地点からゆるやかに1.5mの長さで立ち上っている。動物の落し穴のような様相を呈しているが、用途の判明しない遺構である。

Ｄ３号と命名した土坑は、４箇所の凹みが認められる。まず、道路直下の落込みは、計75cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。これと連なるように、１ｍ×80cm、深さ20cmの円形を呈し



第72図　第２次調査ピット群実測図

た落込みがある。覆土は、褐色土を基調とした３層から成り、Ⅰ・Ⅱ層中に炭化粒子を微量混入する。さらに、この落込みを切って、南側に若干傾いて掘り込まれた深さ50～55cmのピット状の穴が存在する。やはりこれは木の根の痕跡であろう。

円形を呈し、連なって構築されている土坑状の落込みは、遺物の出土が皆無であり、掘り込

みも貧弱であることから時期、用途を判別することは困難である。

2　ピット群

ピット群の集中している地点は、南西側から北東側に向って50cm程傾斜している。径10cmから50cm、深さ15cmから60cmまで、さまざまな規模のピットが36個散在している。規格性をもった配置は全く認められない。また、遺物の出土が皆無であることから、これらのピットは木の根の痕跡であると考えられる。

以上のような遺構の状態から、時期、性格、用途を決定することはできなかった。遺物の出土が若干認められたこと、以前から土器、黒曜石剝片が表面採集されていることから、同一地点内に遺構の存在は暗示されるが、道路拡幅面積のみの調査であることから、北東側に続く畑地と大工さんの作業場と資材置場に、あるいは遺構が所在していることも考えられる。

いずれにしても、第１次調査地点から検出された中期初頭の集落の生活領域の一部分であったことは問題ないとおもわれる。　（島田　恵子）

第5章　考　　察

第1節　遺　　構

1　住居址

穴沢遺跡が立地する沢は、尾根が連なる凹地で北東方向に傾斜している。このため、北風をさえぎり、日当りがよく、穴沢川が流れ水の便もある。人々はここに小さな田圃、畑を開いている。同じように私たちの祖先である縄文人もこの地に今から約4,900年前に集落を営んでいたのである。

今回の調査は、穴沢遺跡の約半分を発掘したに過ぎないので集落の全容を把握するには至らなかった。先ず、住居址は3軒検出したが、Ｊ２号・Ｊ３号住居址は不明確な点が多く、全面漆黒色土の落込み状態から、集落の終焉直後の廃絶住居址ではなく、それより早い時期の廃絶住居址とおもわれる。なぜならば住居址を切って土坑が築かれているからである。

Ｊ１号住居址は竪穴の部分を残していたので、住居址としての調査を実施することができた。この時期の住居址は浅く、しっかりした掘り込みを呈していない場合が多い。穴沢遺跡の発掘調査寸前に実施した隣接する小原遺跡では、九兵衛尾根Ⅱ式期～狢沢式併行期の住居址２軒を検出したが、その内のＪ２号住居址はパリパリに堅い貼り床であったため、住居址としてとらえることができた。地床炉であったためか炉は検出できなかった。Ｊ３号住居址は攪乱が著しかったので判然としない面が多かった。

また、筆者が担当した川上村三沢遺跡でも土器・石器が多量に出土はしたものの、明確な住居址の検出には至らなかった。

南佐久郡下においては以上のような状況がみられるが、長野県下においても同様の状況がみられるようである。

穴沢遺跡検出のＪ１号住居址は、輪郭は三分の一の残存であったがそれから推定して、直径3.4mを測る隅丸方形の形態をとる。住居址中央からやや東寄りに埋甕炉が設置されていた。床面は堅緻な面はみられるものの貼り床ではない。柱穴は７個検出したが直径10cm程の木材を柱に使ったと考えられる細くて深い穴であり、貧弱な感じがする。上屋構造との関連が注目されよう。

Ｊ２号住居址・Ｊ３号住居址は、前述のように住居址プランは全く確認できなかった。土層や土器の出土から、かつて住居址が存在したことが推しはかれる。縄文時代中期初頭どこからか移住してきた人々は、この穴沢の日当りがよく水の便がある地を選定して集落を営み、のんびりとのどかな日々を自然と一体化しながら過ごした。やがて住居が老朽化したため20～30m

第２表　穴沢遺跡検出住居址一覧表

遺構	平面プラン			壁高	炉	柱穴	主軸方向	時期	備考
	形態	東西	南北						
Ｊ１号住	隅丸方形	cm (340)	cm (340)	cm 10	埋甕炉	(7)	N－45°－E	九兵衛尾根Ⅰ式	
Ｊ２号住	(隅丸方形)	(370)	(370)	—	—	(4)	—	〃	
Ｊ３号住	(隅丸方形)	(400)	(400)	—	—	(3)	—	〃	

北東側に新しい住居を建てて移った。という想定が成り立つように本遺跡出土の土器は九兵衛尾根Ⅰ式期よりも古い様相の土器がみられる。中期初頭籠畑式の影響が強く残っている。こうした状態から、Ｊ２号・Ｊ３号住居址は集落を営む初期段階の住居址であった可能性が高い。

２　土　坑

土坑は36基検出された。北東方向へ緩傾斜する台地の最上段部から下方へと土坑群が広がっている。Ｄ１号土坑からＤ３号土坑の位置する上段部は土堤がなかったため、バックホーで試掘を行ったが落込みは認められなかった。そのためこれ以上の上段部へは遺構の広がりはなく集落はここで途切れているものとおもわれる。

土坑は、長軸が１ｍ以下を計測するものが20基、１ｍ以上が16基で、小形土坑が多い。平面形態は、円形・楕円形が主であるが、その内、不整な円形、不整な楕円形も多い。深さは、90cmを測るＤ36号を最高として、70～60cmまでが５基、50cmが４基、40～30cmが14基、29～15cmまでが12基となる。15～49cmまでが26基で70％を占める。

土器・石器などの遺物が全く出土しなかった土坑は６基であるが、他の30基はそれぞれの遺物が出土している。遺物については後述するのでここでは出土状況にとどめたい。

実測あるいは復元実測が可能となった土器が出土した土坑は、Ｄ１号・Ｄ２号・Ｄ３号・Ｄ11号・Ｄ27号・Ｄ28号・Ｄ30号土坑であるが、これらの土坑は15～40cmの深さで、比較的浅い土坑のみである。特に、深鉢２個体、口縁部片２個体を出土したＤ２号土坑は、15cmでもっとも浅い。土器を埋葬した墓坑という感じであった。また、Ｄ27号土坑出土の土器とＤ29号土坑出土の土器は同一個体で接合可能となった。同一時期に構築されたと考えられる。

土坑内に意図的配石があったのは、Ｄ１号・Ｄ２号・Ｄ３号・Ｄ４号・Ｄ５号・Ｄ８号・Ｄ15号・Ｄ17号・Ｄ18号・Ｄ19号・Ｄ20号・Ｄ22号・Ｄ24号・Ｄ32号土坑と14基である。土器・配石と合わせると21基で、なんらかの人為的行為が加わっている土坑が多い。

これら土坑群は、墓坑である可能性が最も高く、その比率も大きいが、中には他の目的で構築された土坑もあるとおもわれる。呪術的な意味がこめられているＤ１号・Ｄ２号・Ｄ３号・

第３表　穴沢遺跡検出土坑一覧表

遺物	平面形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	備考
		cm	cm	cm		
D１号	不正円形	110	100	30	N－７°－W	石棒・深鉢出土
D２号	不正方形	110	100	15	N	深鉢２個体口縁のみ２個体
D３号	不正円形	90	90	40	N	深鉢２個体出土
D４号	円形	95	90	57	N－27°－W	土器破片出土・配石
D５号	楕円形	110	95	65	N－16°－W	土器破片出土・配石
D６号	不正円形	100	100	25	N－58°－W	
D７号	楕円形	105	98	55	N－36°－E	土器破片出土
D８号	円形	80	80	50	N－８°－E	配石
D９号	楕円形	90	80	15	N－９°－W	黒曜石剝片５点出土
D10号	不正円形	90	80	48	N－30°－W	土器破片出土
D11号	楕円形	85	65	37	N	小形深鉢１個体他破片
D12号	〃	95	85	30	N－21°－W	
D13号	円形	80	75	13	N－10°－W	土器破片出土
D14号	〃	80	75	25	N	土器破片出土
D15号	〃	85	85	28	N	土器破片出土・配石
D16号	〃	110	100	35	N－11°－E	石錐出土
D17号	不正楕円形	95	65	15	N	土器破片出土・配石
D18号	円形	55	55	15	N－36°－W	土器破片出土・配石
D19号	〃	105	105	55	N－30°－W	石棒の根元部分出土・土器破片
D20号	〃	100	100	70	N－24°－W	土器破片出土・配石
D21号	〃	100	—	40	——	土器破片出土
D22号	〃	70	65	42	N－17°－W	配石

遺物	平面形態	長軸	短軸	深さ	主軸方向	備考
D23号	楕円形	cm 100	cm 90	cm 70	N－21°－E	土器破片出土
D24号	不正円形	115	105	75	N－43°－E	土器破片出土・配石
D25号	不正楕円形	123	100	30	N－57°－E	土器底部片
D26号	円形	80	75	22	N	土器破片出土
D27号	〃	70	65	35	N	土器片29号出土と接合
D28号	〃	90	90	30	N	土器破片出土
D29号	〃	67	67	25	N－13°－E	土器片27号出土と接合
D30号	楕円形	95	80	20	N－40°－W	無文土器深鉢2個体
D31号	円形	90	90	30	N－38°－E	土器破片出土
D32号	楕円形	90	80	40	N	土器破片出土・配石
D33号	〃	135	113	35	N－42°－E	
D34号	不正楕円形	160	150	60～70	N－35°－W	土器片出土 石鏃3点出土
D35号	〃	240	155	40～55	N－58°－E	土器破片出土
D36号	不正円形	135	120	90	N－42°－E	

D19号・D27号・D29号・D30号土坑などがあり、大形でダイナミックな掘り方が成されているD34号・D35・D36号土坑などもある。

集落内の一角に築かれた土坑群の調査は、中期初頭という類例の少ない時期であるという点において貴重な調査となった。

第2節 遺　物

1 土 器

本遺跡から出土した縄文中期初頭九兵衛尾根式期に比定される土器群の分類を次に示した。これらの分類は、藤森栄一・武藤雄六両先生の確立した八ヶ岳山麓の編年・型式設定を中心にすえ、さらに、中央道報告書「茅野市・原村その1・富士見町その2」(1974)の大石遺跡の資料「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」(1979)山口明氏らの型式分類を参考とした。

また、南佐久郡川上村三沢遺跡出土の該期の土器群、さらにこの三沢遺跡と同一文様の深鉢が出土している曽利遺跡の土器群なども集成に加え文化圏の拡がりをとらえてみることにした。しかし、煩雑な細分は避けて大きく分類し、その中で出来得る範囲において、型式学的な文様構成の相関性・系統性・地域差などをみていきたい。

(1) 穴沢遺跡出土の土器群（第75図～78図）

穴沢遺跡出土の土器群の中で古い要素を残しているのは、第75図1の土器である。やや粗雑な文様を施しているが、ソーメン状貼り付けの波状文と細線文とで構成されている。籠畑Ⅱ式期の手法を受け継いでいる。この他、ソーメン状の貼り付け文は、D15号土坑から摩滅の著しい破片が1点出土しているのみである。

2は、平行線文・鋸歯状文・ヘラ状工具による「く」の字文・押引文で構成されている。3も同様の文様構成であるが精製された小形土器である。

4は、2と同様で口縁上端部無文である。橋状把手が付き、楕円形の区画内は細線文で充塡されている。頸部直下はY字文が連続している。Y字文も籠畑Ⅱ式期の手法を受け継いでいる。また、平行する沈線文は溝が深いので半隆起線文の状態となっている。

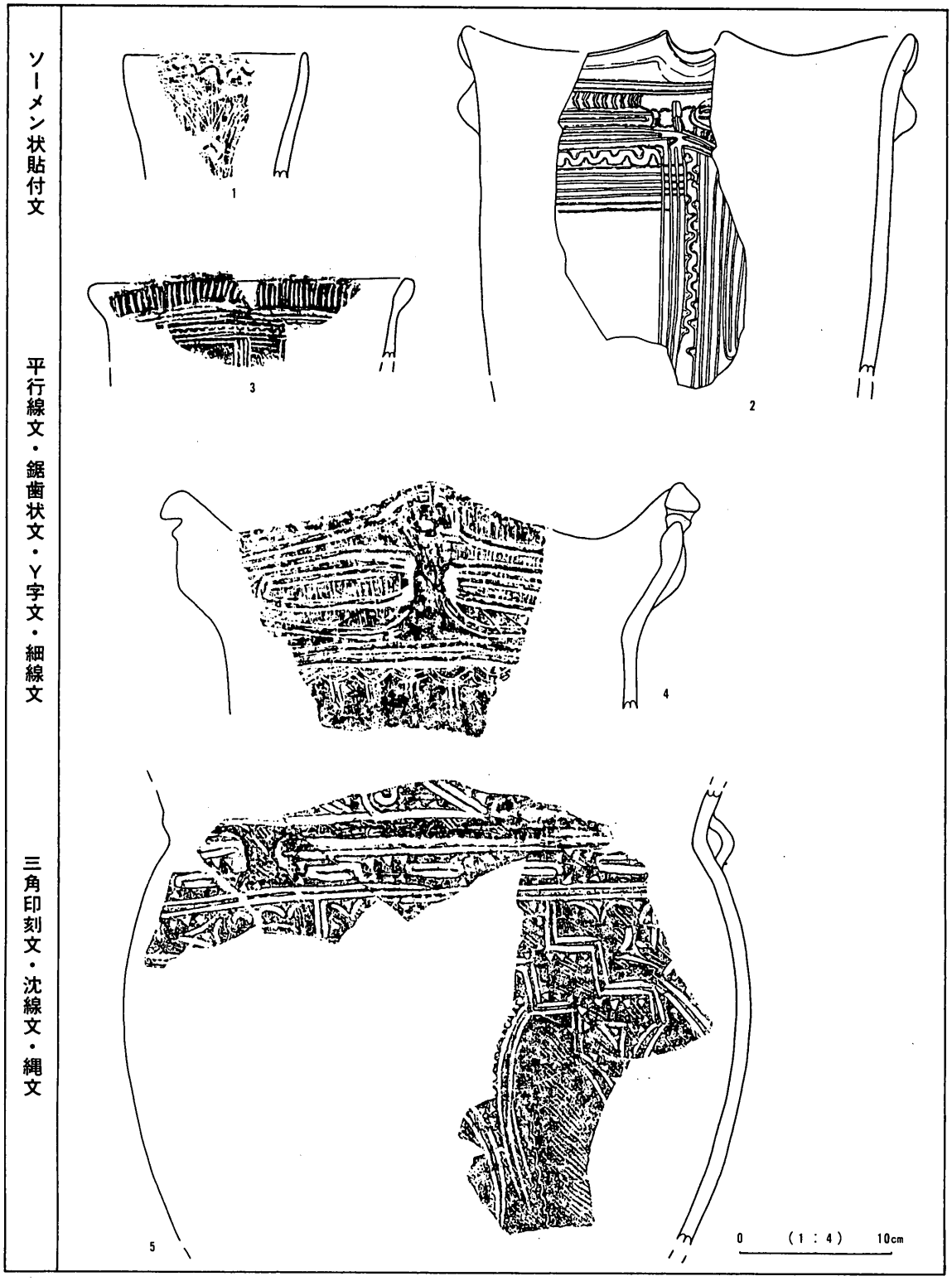
5は、球状の胴部を呈している。三角印刻文・沈線文・地文に磨消縄文で構成され、沈線で渦巻文が描かれた精製土器である。

6～11は、縄文が施文されている土器群を取り上げた。これらは前述した1～4の文様構成から大きく変化している。

6は、溝の深い沈線文（半隆起線文）と、単なる沈線文、縄文で文様構成されている。三角形の区画内は、三角形の陰刻文と渦巻文が描かれている。胴部は沈線文と地文に縄文が施文されている。

7は、4つの橋状把手、半隆起線文、隆線文、地文に斜縄文で構成されている筒形に近い形をした寸胴の深鉢形土器である。

8は、2つ連続して湾曲の強い橋状把手が付いている。多分これは2単位に橋状把手が付いているとおもわれる。半隆起線文および隆線で平行線文、区画文などが施文された大胆な文様



第75図　穴沢遺跡出土の土器群　No.1

構成でまとまっている。

9は、本遺跡出土の中では最大の深鉢形土器である。文様の主要部分のところどころは隆帯を用いている。半隆起線文、沈線による渦巻文、三角形の陰刻文、玉抱三叉文、地文には縄文が施文されている。口縁部が欠失しているが頸部の開き具合から、頸部から大きく開いて口縁部でやや内湾する器形であるとおもわれる。

10・11は、キャリパー形の深鉢で、口縁部上端に帯縄文・沈線文があり、2単位にわたって口唇部に4山の波状が作り出されている。口辺部は4単位に三角形の区画帯が押引き文と隆帯で区画され、上段部の区画内は玉抱三叉文が描かれている。11は口縁端部の内側にも刻目がみられる。

12は、沈線による平行線文と縄文で構成されているが、口縁と底部を欠失する。

13は、縄文が口縁の内側から底部まで施文された縄文一色の小形深鉢である。

14は、本遺跡と隣接している小原遺跡出土の椀形土器である。三角の刻目を交互につけた鋸歯波状、区画を作り出した沈線内には押引文が施文され、区画内は、竹管状工具による「く」の字文および斜線文で充塡されている。地文は細かい斜縄文で埋め、渦巻文が口縁中央のアクセントになっている。小原遺跡は、九兵衛尾根式～狢沢式に併行する住居址が2軒と狢沢式期1軒が検出されている。そのため、この14の土器が出土した土坑は九兵衛尾根Ⅱ式期とした。しかし、穴沢遺跡出土の土器片と比較した場合、文様構成には全く変化がなく、九兵衛尾根Ⅰ式。Ⅱ式の時期決定は困難である。本遺跡においても集落址の全体を調査したならば、かなりの細分は可能であったかもしれないが、現段階においては、籠畑式期の古い要素の強い土器が出土しているため、むしろ九兵衛尾根式の古い段階であるⅠ式と考える方が妥当であろう。

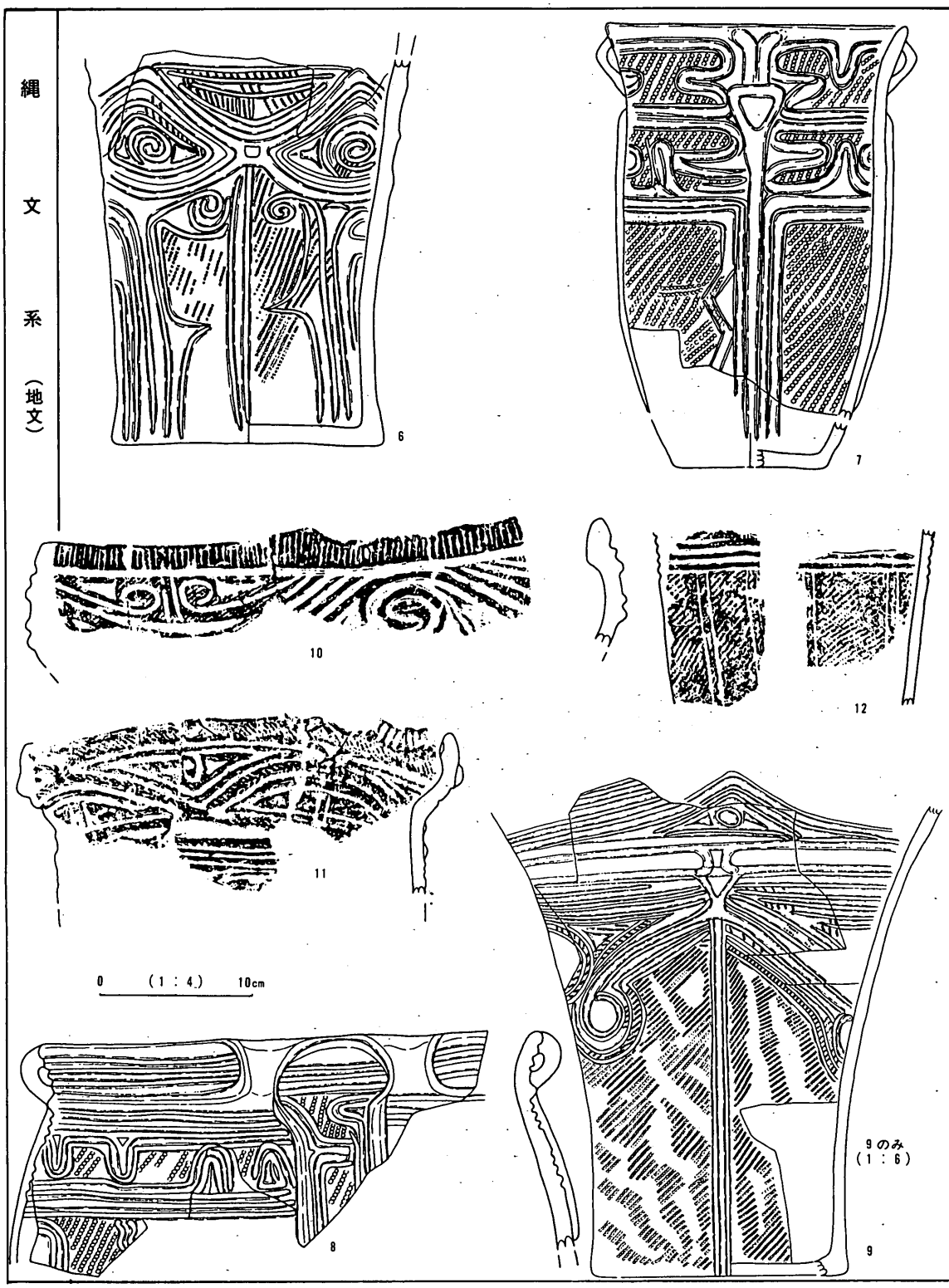
第79図に本遺跡出土の文様構成に類似する諏訪郡原村大石遺跡出土の土器群を参考のために提示した。№1は、九兵衛尾根Ⅱ式期に比定されているが、穴沢遺跡D2号土坑出土の第76図6・9に類似する文様構成であるが、やや異なる面が伺える。これら2つの土器文様がミックスされてⅡ式期の№1の土器に変化したのかもしれない。№2は、第77図示した沈線文系の土器および第9図1のJ1号住居址埋甕炉の土器と類似している。

3は、川上村三沢遺跡出土の第80図3の土器に共通した文様および器形である。

5は、穴沢遺跡第75図4に橋状把手、4山の口縁、Y字文、細線文などが共通するが、区画文と地文の縄文が異なる。6は、D1号土坑出土の第75図2に文様は共通するが、口縁部から胴部にかけての器形が異なる。

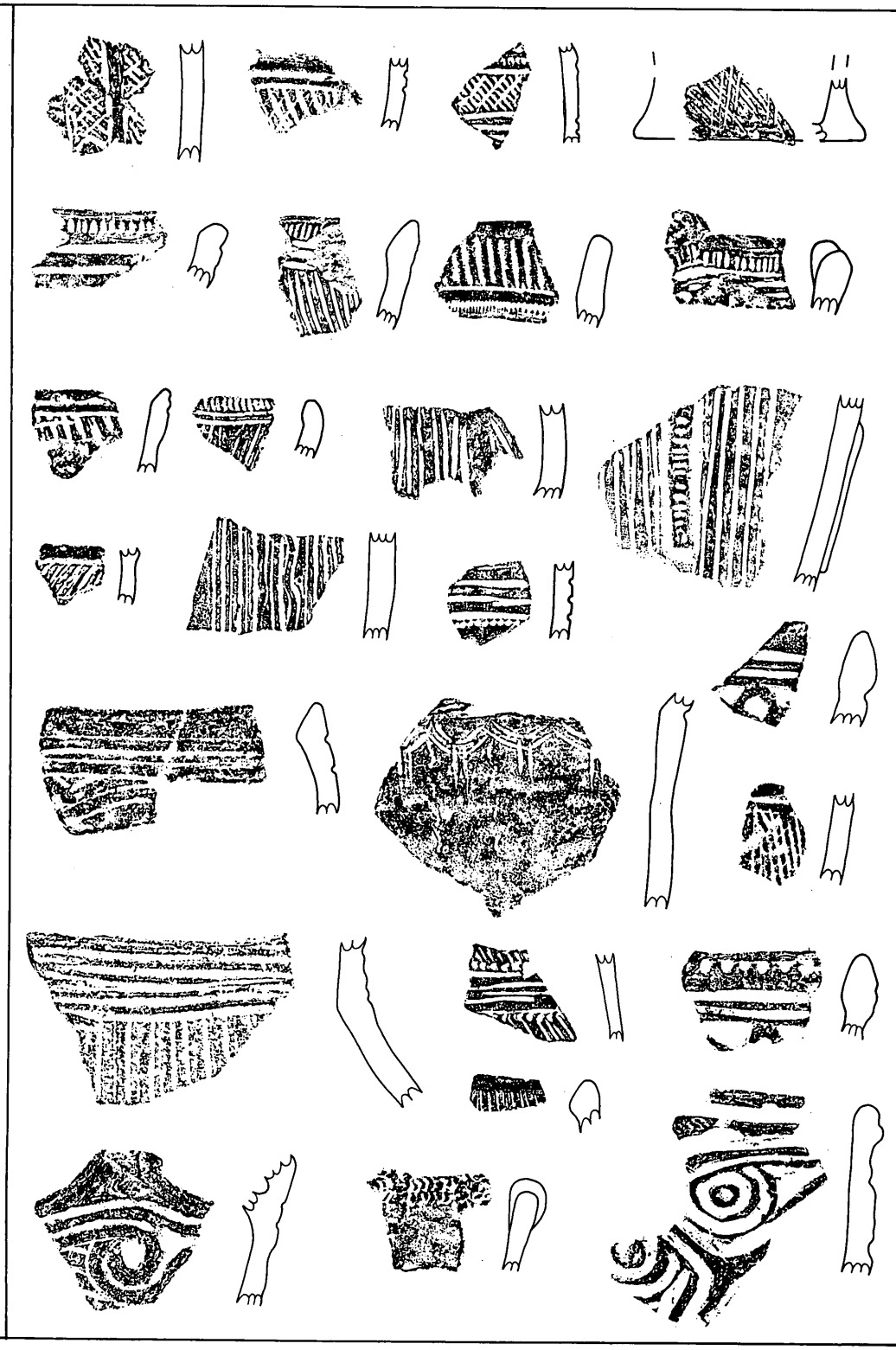
しかし、大石遺跡出土の土器とはかなりの共通点があり、人間・物の移動、交流が伺える。

第77図・第78図は穴沢遺跡出土の土器破片の拓影図である。詳細は第4章で記述してある。細片なので細かい分類はできないが、第77図は主に平行線文・沈線文系の文様を集めた。沈線による文様は、格子目文・Y字文・渦巻文・刺突文、瓜形文などがみられる。



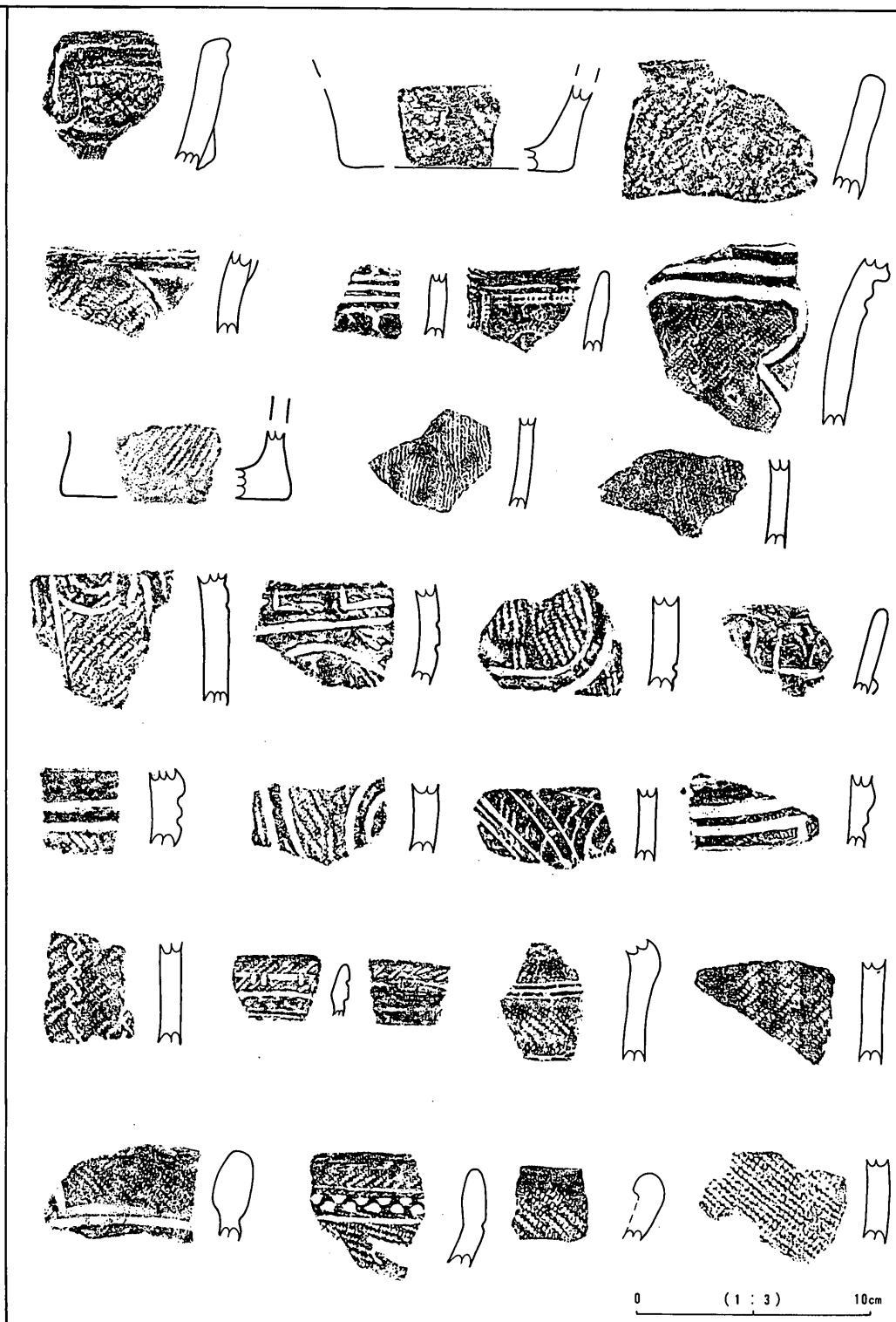
第76図　穴沢遺跡出土の土器群　No. 2

平行線文・沈線文系（格子目・Y字文・刺突文・渦巻文）



第77図　穴沢遺跡出土の土器群　No. 3

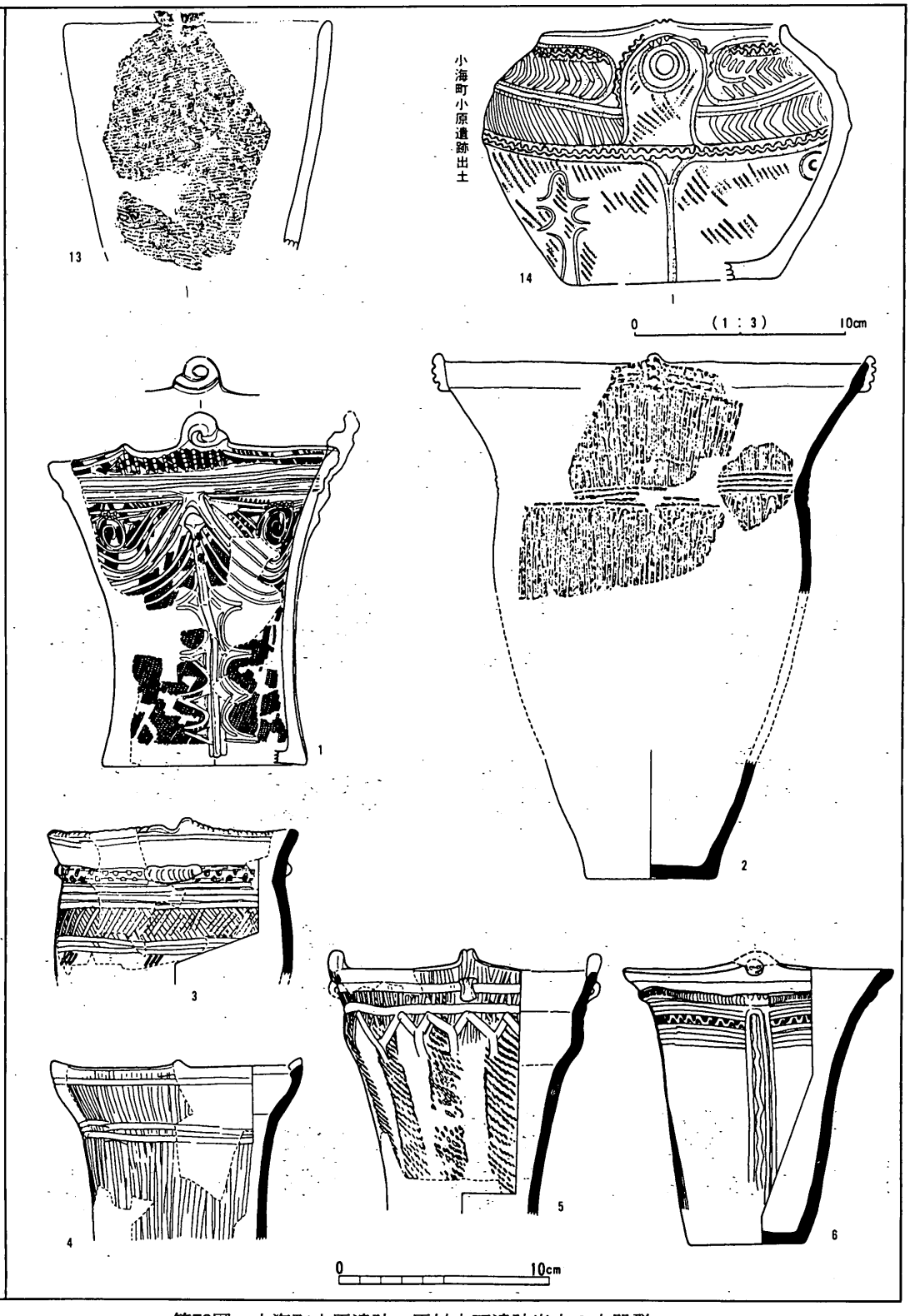
縄文系



第78図　穴沢遺跡出土の土器群　No. 4

縄文系

原村大石遺跡類似土器



第79図　小海町小原遺跡・原村大石遺跡出土の土器群

第78図は主に縄文系を集めた。斜縄文・結節縄文・撚糸文、さらに沈線文・刺突文などが施文されている。こうした土器片が出土していることを認識するために第77・78図に集成した。

南佐久郡においては、中期初頭の集落址の調査は少なく、本遺跡で3遺跡である。今回の調査がその中で最大の規模であった。だがいずれも住居址は浅くそのプランも把握できれば幸いという状態である。長野県下でも良好な集落址の全容を調査した例は少ない。不明な点が多いのも事実である。今後に期待したい。

(2) 川上村三沢遺跡出土の土器群（第80施・81図）

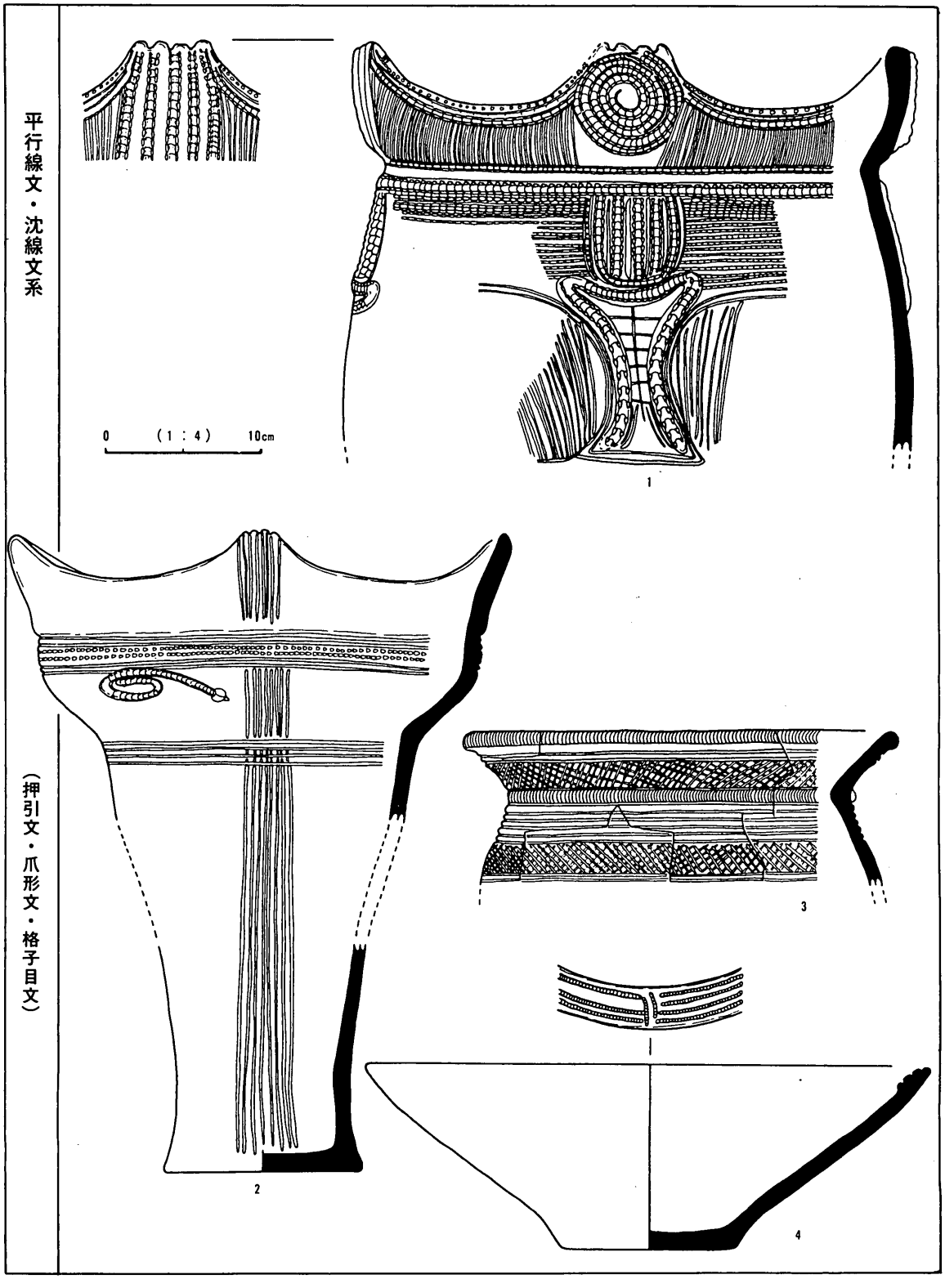
三沢遺跡は、昭和60年ゴルフ場建設に先立って調査が実施された。南面する日当りのよい緩傾斜面の山腹に立地し、すぐ脇を小さな川が流れている。検出遺跡は、墓坑6基でこの墓坑周囲南北28m、東西20mの範囲におびただしい数の礫が配石しており、配石は7ユニットに分かれて集石していた。さらにこの集石と共に土器が細かく砕かれて散りばめてあった。これらの土器を接合して復元したのが第80・81図の土器群である。

第80図は、平行線文・沈線文系の文様を集めた。1は、約60点の破片を集めて接合した。文様は、半截竹管工具によって両側面を同時に施文する押引文、やや間隔の開いた連続瓜形文、渦巻文が施文されている。4山の口縁部には、渦巻文と5条の隆帯に押引文、連続瓜形文で飾った文様との2種類2単位に分かれる。胴部は半楕円形、X字形との隆帯を同様の押引文、連続瓜形文とで施文している。華麗な深鉢形土器である。球状にふくらんだ胴部は、穴沢遺跡出土の第75図№5の深鉢に類似している。

2は、30点の破片から接合した。4山の波状口縁で口辺部はやわらかくふくらみながら波状口縁に向って大きく開いている。胴中央部から底部にかけてややすぼまった長胴である。底部は張り出し底で、文様構成は、平行沈線文と連続刺突文が主体である。4山の口縁下～底部まで8条及至6条の沈線文が垂下している。2段の段を有す口辺部には、横位に4条の沈線文と2条の連続刺突文とが配されている。やわらかいふくらみをもつ2段目の口辺部には、蛇をあらわす隆帯が半截竹管工具による押引文と連続瓜形文とで構成されている。これと酷似する土器が富士見町の曽利遺跡40号住居址から出土している。第82図1に示した。器高50cmを測り、本土器より10cm程大形である。しかし、器形・文様共にこれ程酷似した土器は稀である。人間あるいは物の動きが川上村～富士見町の遺跡と大きく関わっていたことを示している資料である。

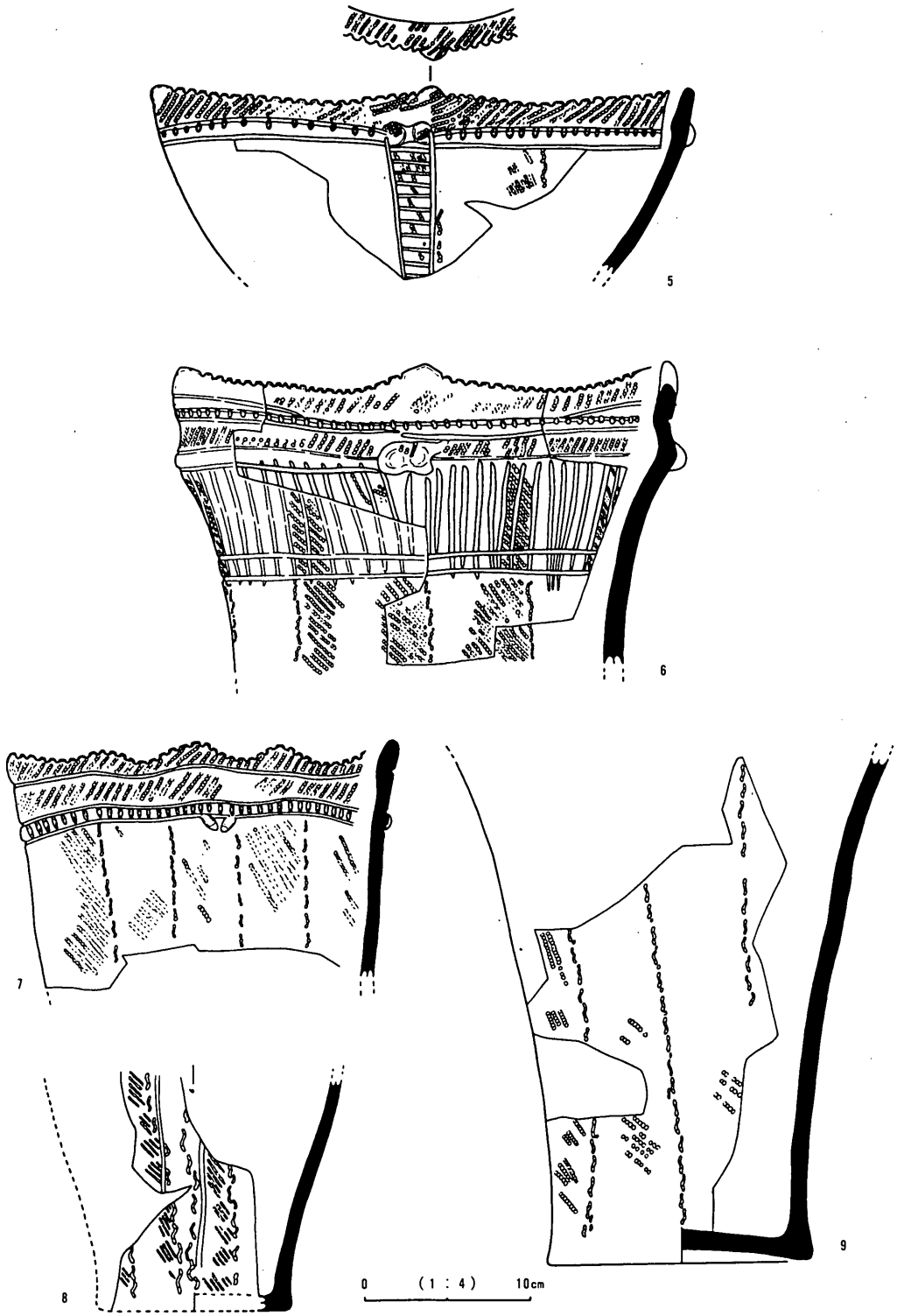
3は、頸部が「く」の字状に外反する甕形の土器である。文様は、半截竹管工具による連続瓜形文、横位の深い溝をもつ沈線文、格子目文で構成されている。この土器と類似した文様構成がみられるのは、原村大石遺跡の第79図№3である。

4は、30点の破片を集めて接合した。粉々に割られていたが底部までそろっていた唯一の接

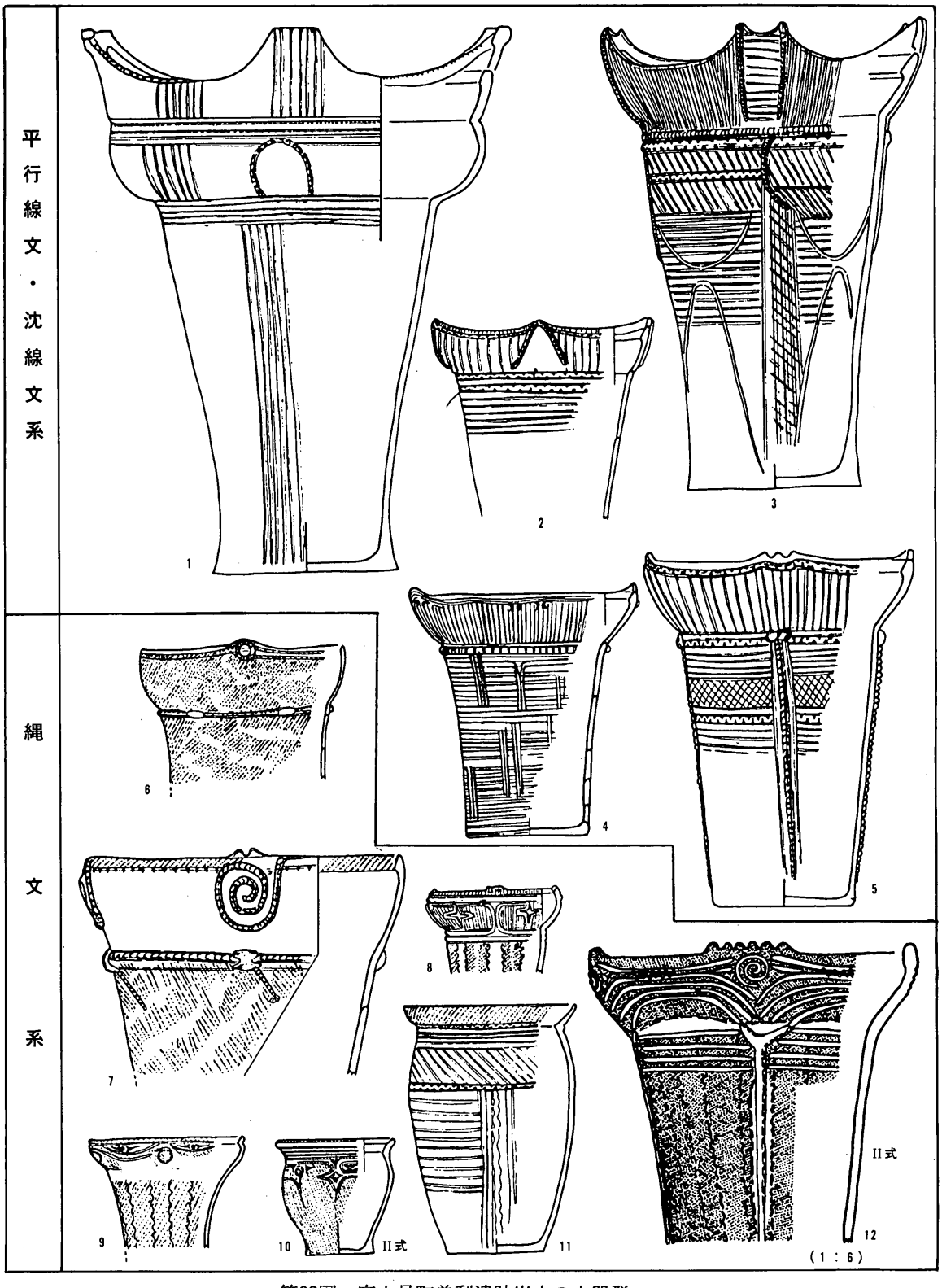


第80図　川上村三沢遺跡出土の土器群　No.1

縄文系



第81図　川上村三沢遺跡出土の土器群　No. 2



第82図　富士見町曽利遺跡出土の土器群

続資料である。口縁部の内側に3条～4条の押引文が施文されている。

第81図5～7は、口縁部上端に帯縄文が施文され、さらに口唇部には5㎜間隔に刻目が入り波状を呈している。5は、丸みを帯びたボール状の浅鉢である。口縁部は4つの小突起があり、小突起の下には蝶ネクタイ状の小把手が貼付され、その下部には梯子状の文様が施文されている。口縁部縄文帯に沿って連続刺突文が配されている。

6は、頸部が「く」の字状に突き出し、胴下までやや内傾しながらストレートに降りる器形である。4山の波状口縁で、文様は口縁部縄文帯、それに沿った刺突文までは5と同様である。頸部下～胴部は斜縄文、平行沈線文、結節縄文で構成されている。

7は、30点の破片から接合した。口縁部は8山の波状が作り出されている。器形は、口縁から胴下まで直線を成した寸胴を呈している。文様は、斜縄文、結節縄文、連続刺突文で構成される。この土器は煮炊きに多用されお焦げの付着がみられた。

8・9は、結節縄文、沈線文が垂下し、地文には縄文が施文されている。

(3) 富士見町曽利遺跡出土の土器群（第82図）

九兵衛尾根式土器は、諏訪郡富士見町境の九兵衛尾根遺跡から出土した土器群を縄文中期初頭の標式土器群としている。岡谷市梨久保式土器群も併行関係にある。

ここに提示した土器群は、曽利遺跡から出土した九兵衛尾根式の土器群である。標式遺跡の土器群の空白を埋める好資料であり、九兵衛尾根式期の確立期にもあたる。

第82図1～5は、平行線文・沈線文系を主にあげた。1は、川上村三沢遺跡出土第80図2と酷似した器形・文様であることはすでに記した。遺跡と遺跡を結ぶ最も確実な資料である。両遺跡との相関関係は婚姻などの人の移動によるものか、交流・交易によるものであるか興味のもたれるところである。

2～5は、鋸歯状文、連続瓜形文、刺突文、格子目文、弧状沈線などで構成されている。

6～12は、主に縄文系をまとめた。口縁上端部に縄文帯のあるのは、7・11である。7は、縄文帯に沿って刺突文が施文され、11は鋸歯状文が施文されている。

9・10は玉抱三叉文があり、8は十字文が施文されている。12は、Y字状の隆帯が垂下しており、九兵衛尾根Ⅱ式期の特徴をあらわしている。10は菱形の区画文がみられる。6・7・9・10・12は地文に縄文が施文され、8・9・12は結節縄文が垂下している。

以上、本遺跡出土の土器群を中心に周辺遺跡の該期土器群をみてきた。土器の文様や器形はそれぞれの時代別に型式的な特徴があり、ある一定の手法やモチーフを共存化している。これらは周辺地域と文化の特徴を共有しているのである。しかし、こうした共有の中にあって各地域で土器を作った縄文人は、個々の創造性を限りなく発揮し、独創的な芸術性を生み出していることがこれらの土器群から読みとれる。（島田　恵子）

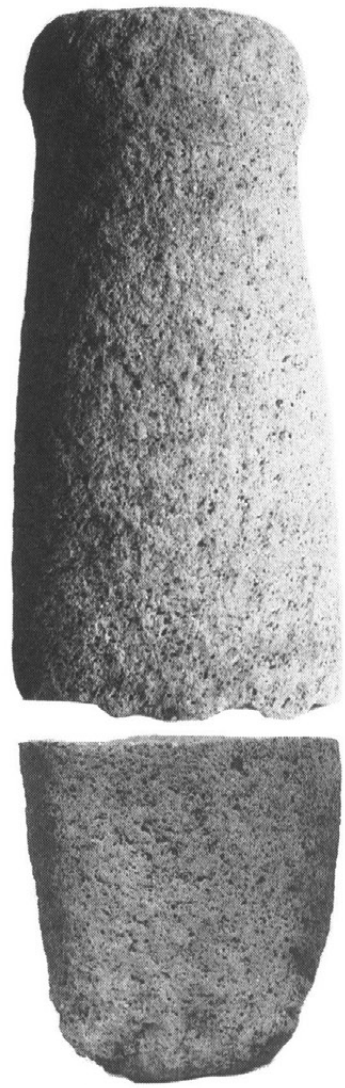
2　石　　棒

石棒の用途・機能は「縄文人の呪術信仰に関わる石器である。」という大まかな見解にとどめるのみで、ここでは南佐久郡下に出土している「日本最古の石棒」「日本最大の石棒」の紹介に論を進めていきたい。石棒の詳細については、大矢昌彦氏の「石棒の基礎的研究」（1976年長野県考古学会誌）を参照されたい。

(1)　小海町穴沢遺跡出土の石棒

長野県下における石棒の出現期は、富士見町藤内遺跡7号住居址（井戸尻Ⅰ・Ⅱ式期）から出土した無頭石棒が最古とされていた。

しかし、穴沢遺跡の発掘調査による新事実の顕現によって歴史の1ページを書き換えなければならなくなった。中期中葉の出現期から、中期初頭の九兵衛尾根Ⅰ式期まで遡ることになった。本遺跡から出土した石棒は、土坑というしっかりした遺構の中に土器を伴って埋葬されていた。有頭であり割られた状態の根元の一方がD19号土坑に配石されていたのである。ぴたりと接合はできなかったが、右の写真に示したような状態に接合されるとおもわれる。志賀溶結凝灰岩の同一の石質で、煤の付着や製作の敲打や磨りの状態などから同一個体の石棒であると判断される。

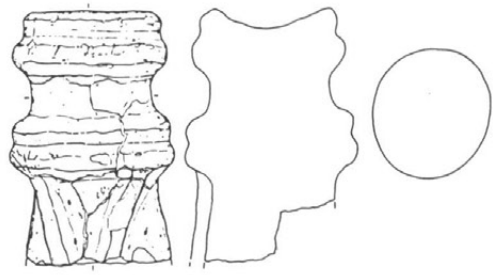


穴沢遺跡出土の石棒

新潟県西蒲原郡巻町の豊原遺跡では、次ページに示した鍔をもつ石棒の頭が出土している。報告書によると、「この種の大型石棒の所属時期については、中期中葉末期の短期間と考えられている。しかし、Ⅶ群土器の下限が中期中葉前半段階にとどまること、あるいは本資料の出土層準がⅦ群土器包含層の中でも下部に相当することは、その年代観に再考を促す資料となろう。」（1988年）と結んでいる。また、新潟県三島郡三島町の千石原遺跡でも住居址の床面から頭を欠いた石棒が出土している。この遺跡でも中期前半期との重複関係にありしっかりした見解が出されていない。

こうした状況からみて、穴沢遺跡出土の石棒は根元を欠いているが、その残欠も確認されて

いる。さらに、中期初頭の土器が石棒におおいかぶさるような状態にあった。他の時期と重複する遺跡ではなく単一の時期であるということからも、確証はきわめて高い。日本最古の石棒という点では、現段階においては穴沢遺跡出土の石棒であるといえよう。



新潟県豊原遺跡出土の石棒

(2) 佐久町北沢の大石棒

石棒は、昭和初年北沢川の改修工事が行われた時に発見された。発見者の倉沢伊平氏はすぐそばの自分の田圃のあぜに立てて石棒を守ってきたのである。

石棒は東方の段丘に展開する、佐久西小学校裏遺跡の縄文中期中葉～後期にかけての大集落のシンボルとして立てられたと考えられる。段丘下は湧水の場に近いという。本遺跡は、八幡一郎先生が『南佐久郡の考古学的調査』の中で、「遺物の種類、数量に富む点に於ては、和田上と並びて、蓋し本郡の双壁ならん」と記述しているように早くから佐久地方の大遺跡として知られていた。

大石棒を掘り出すNo.1

昭和59年5月、当時の佐久町教育長であった新海秋人氏は石棒の貴重さを認識されて、町文化財指定から県宝にむけて調査と整備にあたられた。このままの状態で立てておくのは危険であるとして掘り起こして、土中に埋める部分をコンクリートで固めて今まで地上に出ていた高さ150cmから180cmまで上げた。筆者も立ち合い記録したのが右の写真である。掘り上げて高さを測ると223cm、最大径27cmであることが判明した。また、根元の部分は面がとられ丸

大石棒を掘り出すNo.2

現在の石棒の状況

く加工されており、この状態によって石棒であることがより一層確実なものとなった。

石質は佐久石とよばれている志賀溶結凝灰岩を使用している。小海町穴沢遺跡の石棒と同様の石である。

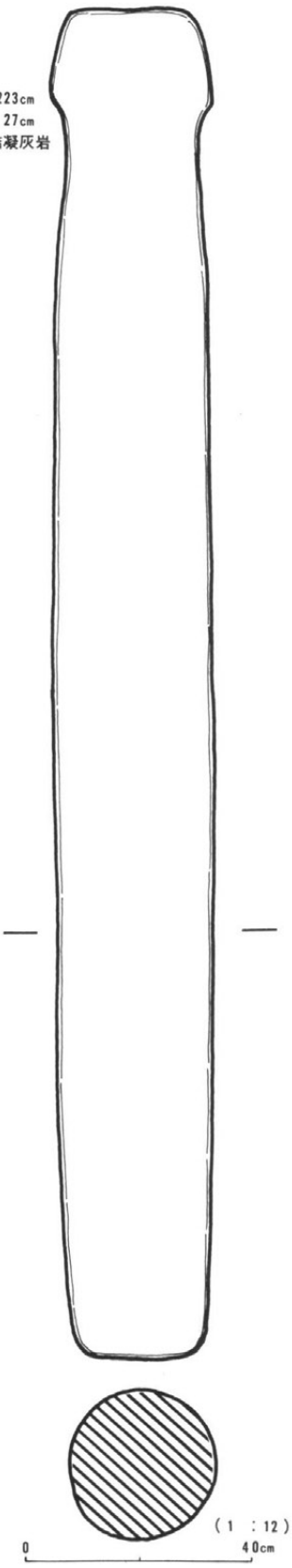
本石棒は大きさの点においては現在までのところ日本一である。頭部が17cmと短い。中期の特徴であろうか。穴沢遺跡出土の石棒も短い。胸部の上部がややくびれるが中央から根元寸前までほぼ寸胴でがっちりしている。

北に浅間山、南に八ヶ岳、東に茂来山を仰ぎ、大地に立つ石棒は、正に日本一の雄姿を誇っている。

(3) 臼田町入沢の精製大石棒

本石棒は、昭和8年頃旧青沼村で入沢、十日町線の道路改修工事を行った際、入沢字上磯部地籍の田口用水西側の石垣の一部分が改修され、その根掘りの際に土中から出土した。昭和9年4月15日祭典にあたり、当時の工事請負業者が大宮諏訪神社へ寄贈したことにより、神社の宝物として現在に至っている。

入沢の谷川左岸扇状地のほぼ中央に、月夜平遺跡が立地し、縄文時代前期から中期～後期、弥生、古墳、奈良～平安時代まで連続して集落が営まれた大遺跡である。大石棒の出土地点は、月夜平遺跡内の北西端側に位置し、このあたりは磯部という地名に示



第83図　佐久町北沢の大石棒実測図

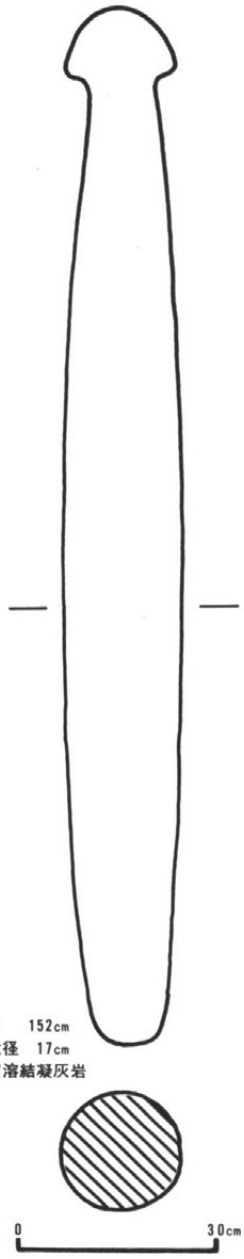
されているように、昔、湖沼があったと伝えられ、湧水などのゆたかな水に恵まれた地帯であった。

大石棒は、長さ152m最大径17cmを測り、男根の形状が芸術的に形づくられ、きれいに研磨されている。佐久町北沢の大石棒は、223cmを測り大きさの点においては日本一の大石棒であるが、本石棒は、精緻な作りと形状の美しさにおいては日本一といえよう。

石材は、付近の山に原産している志賀溶結凝灰岩を素材としている。

石棒の時期は、形状、製作の状態から後期に比定される。

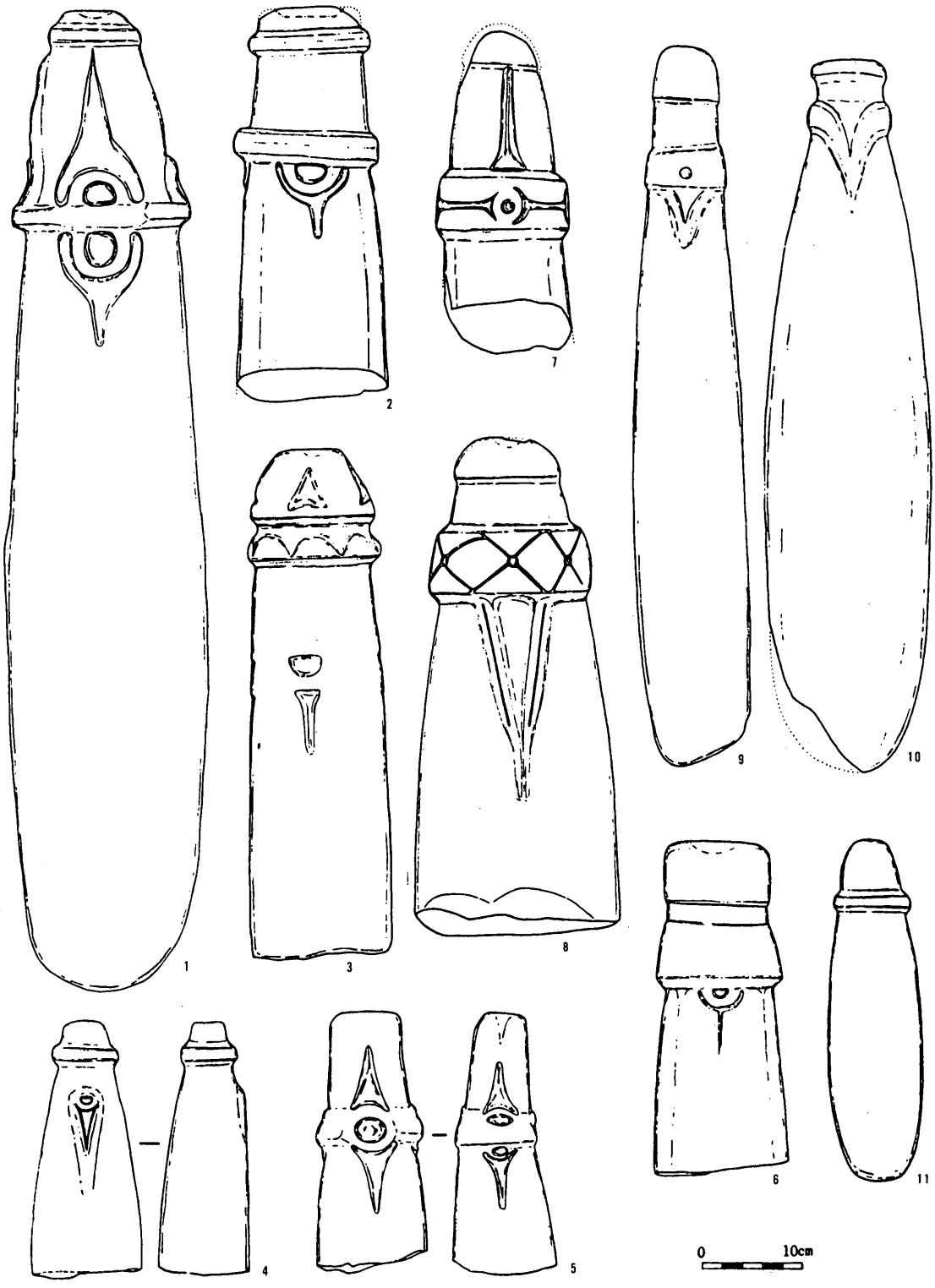
月夜平遺跡の精製大石棒



第84図　臼田町入沢の精製大石棒実測図

本石棒は水の中につかっていたため酸化鉄が付着し、稿のような文様が残っている。

以上、日本一といわれる石棒を3例紹介した。南佐久地方は石棒のふるさとであるかのように豊富に石棒が出土している。残念ながら発掘調査での発見ではない。石棒は、カスピ海の東ゴラン高原のツルクメンの草原に地上部約2mが立っているという。シベリアにも出土例があるときく。(長崎元広氏による)それは、麦の原産地でカスピ海沿岸地方から北まわりでシベリアを経由し、中国東地区から日本海の北陸地方の石川～富山～新潟～秋田、岐阜～長野～群馬・埼玉・山梨～静岡～神奈川・東京へと伝播しており、縄文中期の岐阜県ツルネ遺跡、埼玉県上野遺跡、県下の富士見町唐渡宮遺跡から炭化したオオムギが出土していることを考えると、麦作と無関係とはおもわれない。



第85図　石川・富山・岐阜県出土の彫刻石棒

(4) 石川・富山・岐阜県に分布する彫刻石棒

「石棒のふるさと」とおもわれるかのように、日本最古の石棒・日本一の大きさ・形状を誇る石棒が出土している南佐久郡には、石棒に彫刻が施されたものは皆無である。県下においては、大矢昌彦氏の集成によると諏訪地方で8例程あるという。しかし、第85図に示した富山・石川・岐阜県に分布している彫刻とは異なり、No.11のように鍔がつくり出されているのみの簡単なものであるが、北陸地方とのなんらかの相関関係があったと考えられる。

彫刻石棒は、「中期中葉の所産である。」とされている。(1986、小島俊彰) 印刻文様は主に玉抱三叉文や三叉文、V隆帯などがあり、「石棒本体は男性生殖器」「石棒に彫刻されている玉抱三叉文や三叉文あるいはV状隆帯などの文様は、女性器を表現したものであろう」「2段目鍔は交接行為を表現しているのであろう。」「彫刻石棒は男女両性を表現したもの。」(1986、小島) という研究が提示されている。玉抱三叉文は、本遺跡出土の土器文様にも施文されている。この文様の分布は全国的な広がりがある。

鍔をもつ石棒を追って、新潟・富山・石川県へと旅した。縄文文化の中心は長野県という概念を強く持っていたが、これらの県の出土遺物を実見したところ、その文化の素晴らしさに驚いた。日本海という海の交通を改めて見直す必要性を強く感じると共に、自己の勉強不足を改めて思い知らされた。

(島田　恵子)

第4表　石川・富山・岐阜県出土の彫刻石棒一覧表

型式	番号	出土遺跡	彫刻と面数	鍔数	現在長cm	最大径cm	先端凹	石材	所有者	文献など
I型	1	富・氷見市大境洞窟	玉だき三叉文　4	2	完95	20	有	砂岩	東大人類学教室	〔1922大村〕
	2	石・金沢市(?)	玉だき三叉文　4	2	(37)	15	有	砂岩	河村義一	
	3	富・福光町大神	玉だき三叉文　3	2	再49	15	有	安山岩	福光町図書館	〔1972小島〕
	4	富・宇奈月町愛本新	玉だき三叉文　1	1	(25)	11	無	砂岩	小森正男	〔1967佐渡〕
	5	富・庄川町松原	玉だき三叉文　4	1	(26)	11	無	凝灰岩	庄川小学校	〔1974富山県教委〕
	6	富・立山町稚子塚古墳	玉だき三叉文　4	2	再33	14	有	安山岩	北部小学校	〔1965中口〕
II型	7	岐・宮村水無神社辺	三叉文　4	2	(31)	12	無	安山岩	水無神社	
III型	8	岐・高山市江名子泉水	V隆帯　1	2	再48	21	有	安山岩	森八幡社	〔1936石黒〕
	9	富・福光町古館	V隆帯　1	2	完70	11	無	砂岩	石　清作	
	10	富・立山町下瀬戸	V隆帯　1	1	完70	16	無	安山岩	加藤清太郎	
IV型	11	富・大山町稗田		1	完33	9	無	花崗岩	富山県教委	〔1936早川〕

(小島作表より)

参考文献　1．富士見町教育委員会　1978　「曽利遺跡」　2．川上村教育委員会　1987　「三沢遺跡」
3．臼田町教育委員会　1992　「臼田町の文化財」　4．佐久町教育委員会　1991　「佐久町の文化財」
5．大矢昌彦　1976　「石棒の基礎的研究」長野県考古学会誌
6．小島俊彰　1976　「加越能飛における縄文中期の石棒」　金沢美術工芸大学学報　第20号
7．小島俊彰　1986　「鍔をもつ縄文中期の大型石棒」　大境第10号
8．長野県教育委員会　1974　「茅野市・原村その1・富士見町その2」　中央道報告書
9．小海町教育委員会　1992　「小原遺跡」

あとがき

穴沢の馬市場跡西方の篠原好文さんの畑は、昔から土器のでることで知られていた。信濃史料には穴沢遺跡出土遺物として、縄文時代の茅山式・南大原式・下島式（以上早期～前期）・中期初頭型式・勝坂式・加曽利E式（以上中期）・打石斧・磨石斧、及び弥生式後期の箱清水式・平安時代の土師器等の、各時代にわたる豊富な土器・石器の出土が記されていて、小海町では最も注目される遺跡の一つであった。小原遺跡の発掘調査が行われていた平成3年7月穴沢の町道拡幅工事が行われることが決定し、小海町役場建設課の依託によって町教育委員会が発掘調査を行うことになった。8月24日、小原遺跡の発掘調査が終了すると、小原遺跡調査団全員が、穴沢川を数百メートルさかのぼった穴沢遺跡に移って、発掘調査にとりかかることができたのは幸いであった。

穴沢遺跡の発掘調査にあたっては、道路幅だけでなく、西に接した畑の範囲内まで拡大して調査することが、貴重な遺跡の保存・活用上からも是非必要であると判断した教育委員会は、地主の篠原好文氏の理解を得、議会文教委員等の賛同によって、畑地の南半部まで拡大調査することができ、貴重な成果をあげることができた。

今回の発掘調査で確認された遺構・遺物はすべて縄文中期初頭の時代に属する九兵衛尾根式土器（約5,000年前）を使用した人々の単一集落で、住居址3軒・土坑38基が検出された。その中で特に注目されるのが、有頭石棒の出土である。1号土坑に横たわり、九兵衛尾根I式土器の破片で覆われたようにして出土したこの有頭石棒は、現在に於ては日本最古の石棒ということができる。従来諏訪郡富士見町藤内遺跡出土の縄文中期中葉（4,500年前）のものが最古とされてきたが、穴沢遺跡出土の石棒はこれをさかのぼるさらに500年、中期前葉の九兵衛尾根式土器に伴うことが明らかになったからである。縄文中期初頭の石棒とされるものは、穴沢のほかに唯一、1940年代に新潟県長岡市千石原遺跡で発掘された石棒があり、中期前半だが初頭にさかのぼる可能性もあるとされていたが、発掘年代がはやく、当時は発掘調査方法や環境もまだ十分でなく、記録も完存していない面があるといわれ、長岡市史考古資料編にも記載がない。彫刻石棒の多い富山県の資料も、中期中葉までで、初頭にさかのぼる石棒はみられない。以上は管見ではあるが、穴沢出土の石棒は現在に於て日本最古の石棒とすることには問題はないと思われる。石棒は縄文人の信仰に重要な意味をもつもので、佐久町高野町の日本最大の石棒、臼田町入沢の美麗な磨製大石棒などと共に、穴沢遺跡出土石棒は佐久を代表する石棒信仰の研究対象として、今後一層貴重である。

穴沢遺跡発掘調査に収穫期の野菜畑を提供され、農具置場を調査団の休場や資材置場に利用させていただくなど、多大の御協力をいただいた地主の篠原好文氏に深く敬意と感謝を捧げます。富士見町井戸尻考古館の小林公明、石棒研究家の前館長武藤雄六氏の御教示に厚く御礼申し上げます。最後にこの報告書は調査担当者島田恵子氏が、記録編集一切を担当して作成されたことを申し添え、さらに、臼田町文化センターの一室で作業をさせていただきましたことも、関係者各位に深く感謝申し上げます。

（団長　井出正義）

巻頭図版一

1．穴沢遺跡調査区全景（南方より）

2．日本最古の石棒が出土したＤ１号土坑全景

巻頭図版二

3．５個体分の土器が出土したＤ２号土坑全景

4．Ｄ３号土坑内中央に据えられていた深鉢

1．穴沢遺跡調査区全景（南方より）

2．D１号土坑

図版2

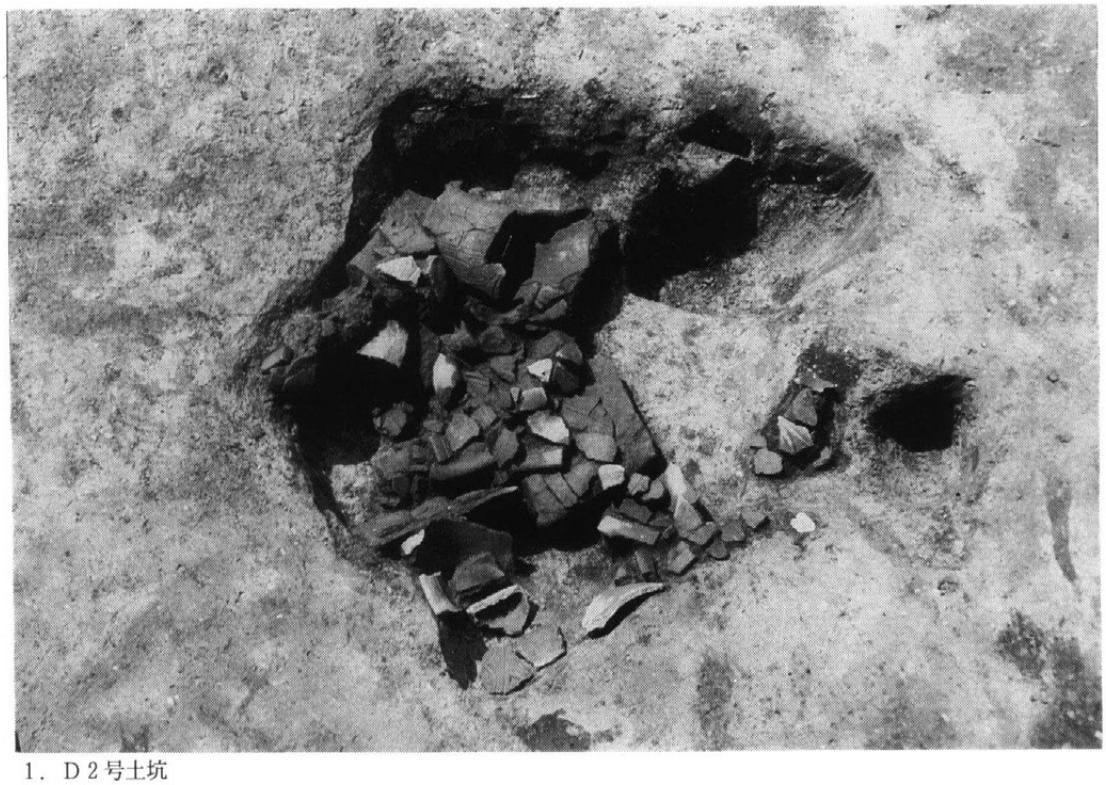
1．Ｊ１号住居址全景（南方より）

2．Ｊ１号住居址埋甕炉

1．Ｊ２号住居址全景

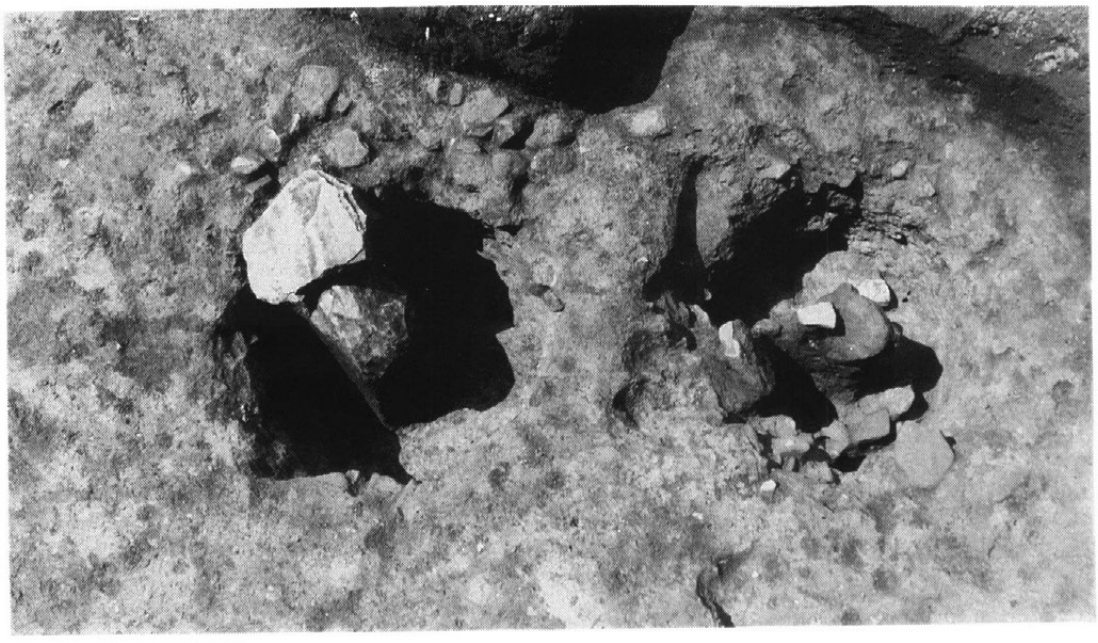
2．Ｊ３号住居址全景

図版4



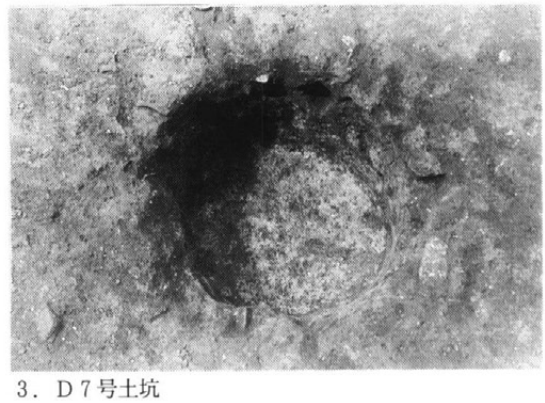
1．D２号土坑

2．D３号土坑



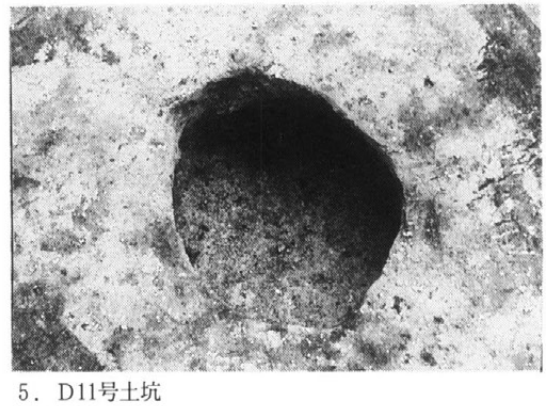
1．D４号・D５号土坑

2．D６号土坑



3．D７号土坑

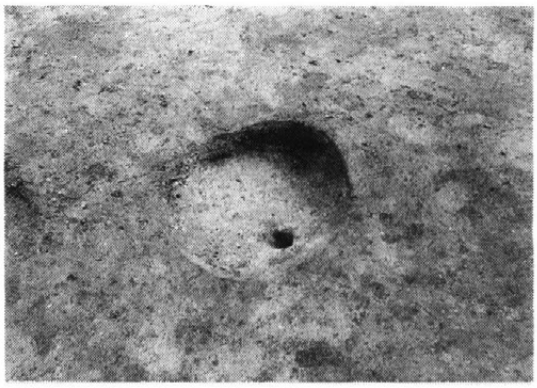
4．D８号土坑



5．D11号土坑

図版6

1．D12号土坑

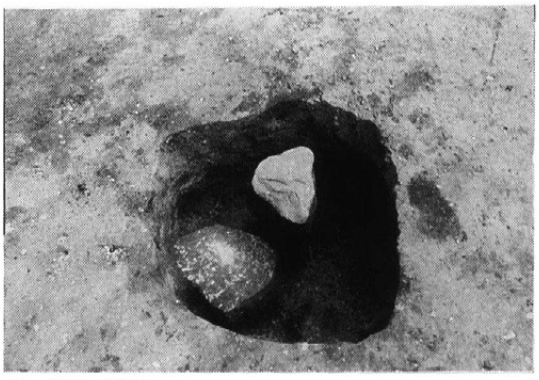


2．D13号土坑

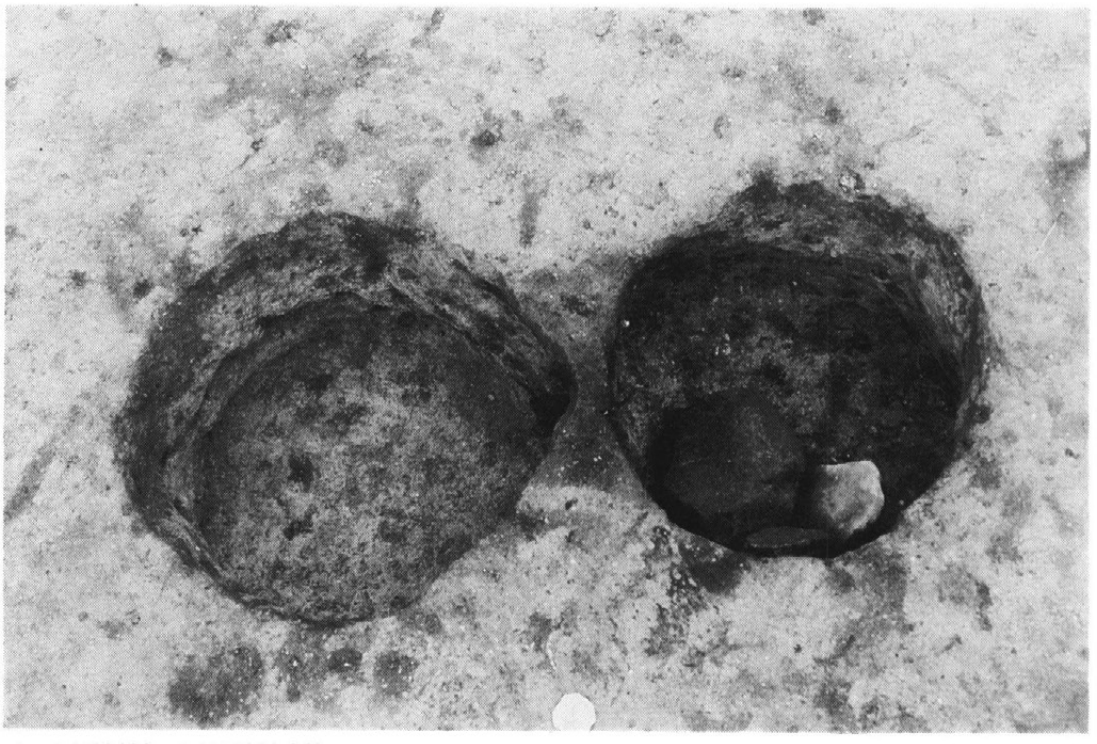
3．D15号土坑

4．D16号土坑

5．D17号・D18号土坑



6．D22号土坑



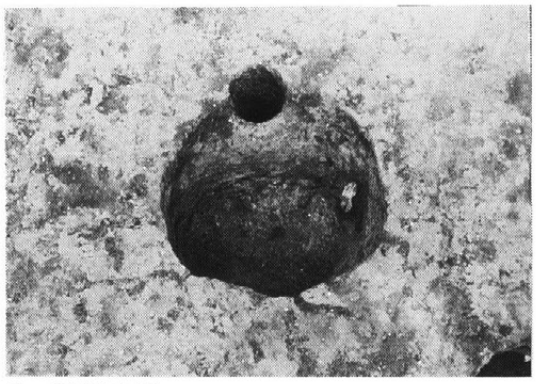
1．D19号(左)・D20号(右)土坑

2．D19号土坑の石棒根元破片出土状態

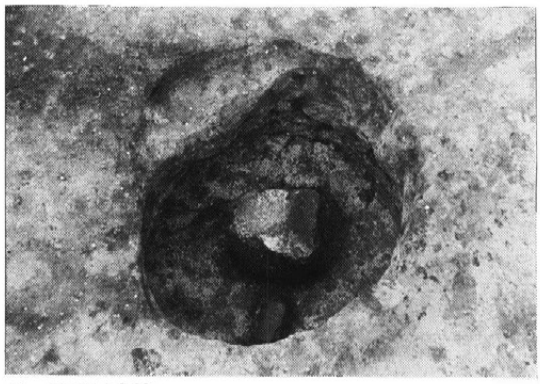
図版8

1．D26号・D27号土坑

2．D33号・D36号土坑



1．D23号土坑



2．D24号土坑

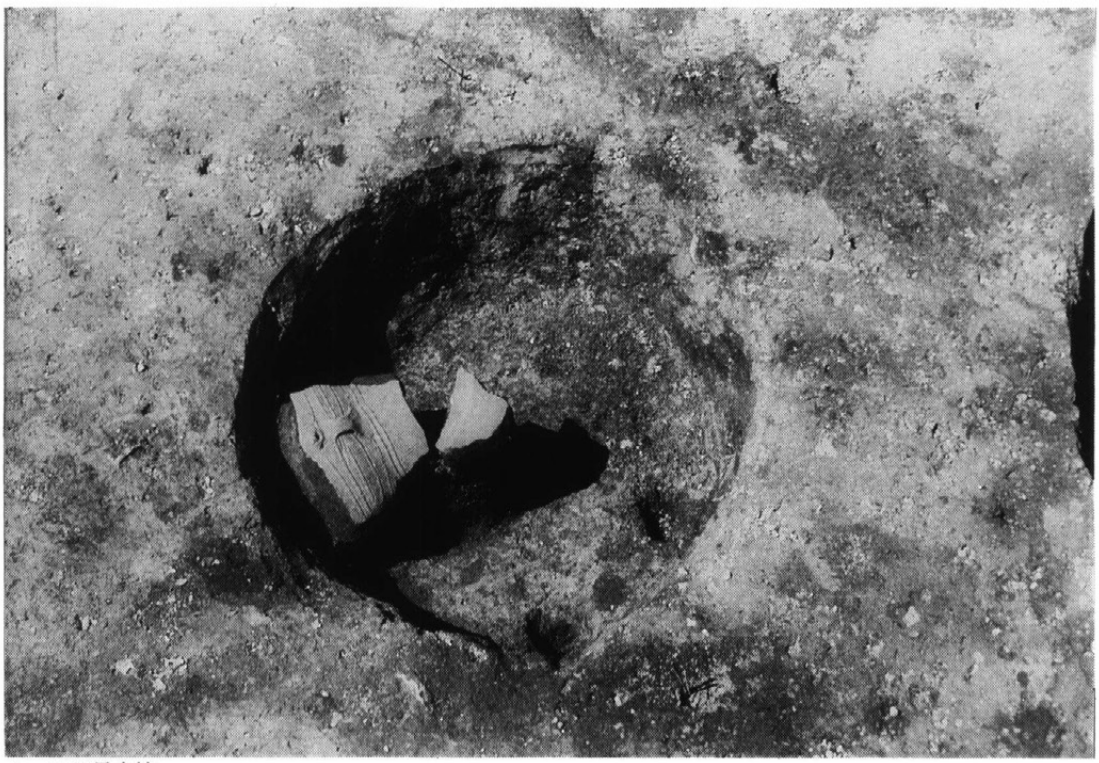
3．D28号土坑

4．D29号土坑

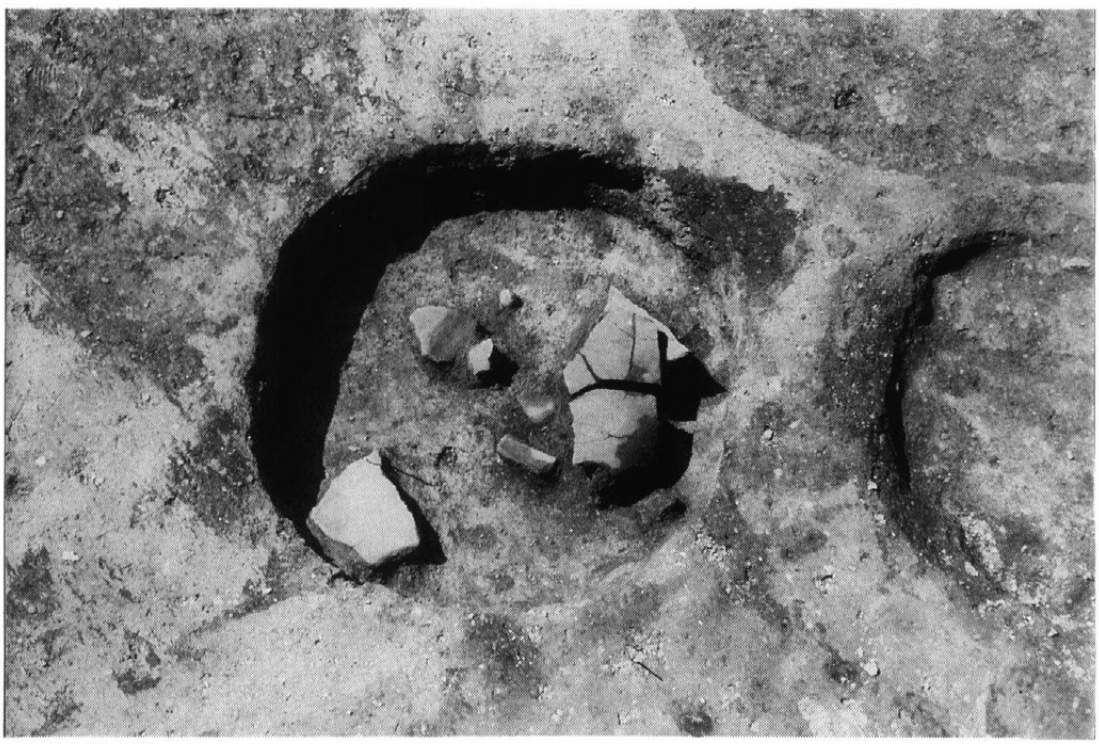
5．D32号土坑

6．D34号土坑

図版10



1．D29号土坑



2．D30号土坑

1．第２次調査区全景（西北方より）

2．第２次調査区全景（南東方より）

Ｊ１号住居址埋甕炉

Ｊ1号住居址

Ｊ2号住居址

Ｊ３号住居址

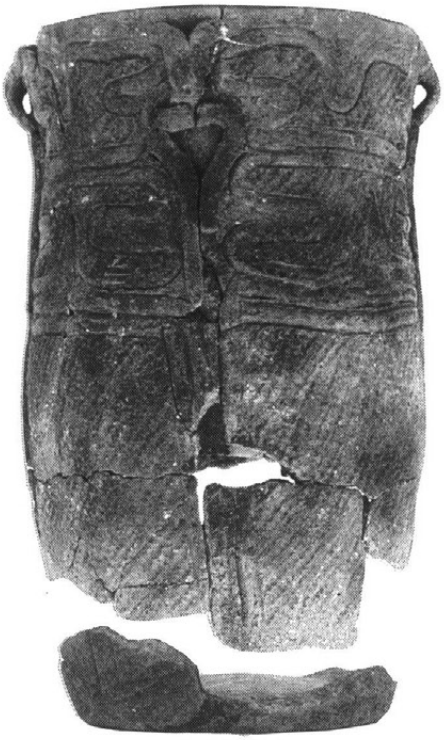
Ｄ１号土坑出土磨石

1．Ｊ１号～Ｊ３号住居址、Ｄ１号土坑出土土器・石器

1．D２号土坑出土土器

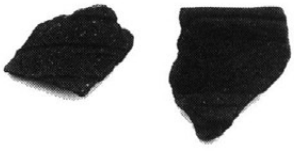
図版14

D１号土坑



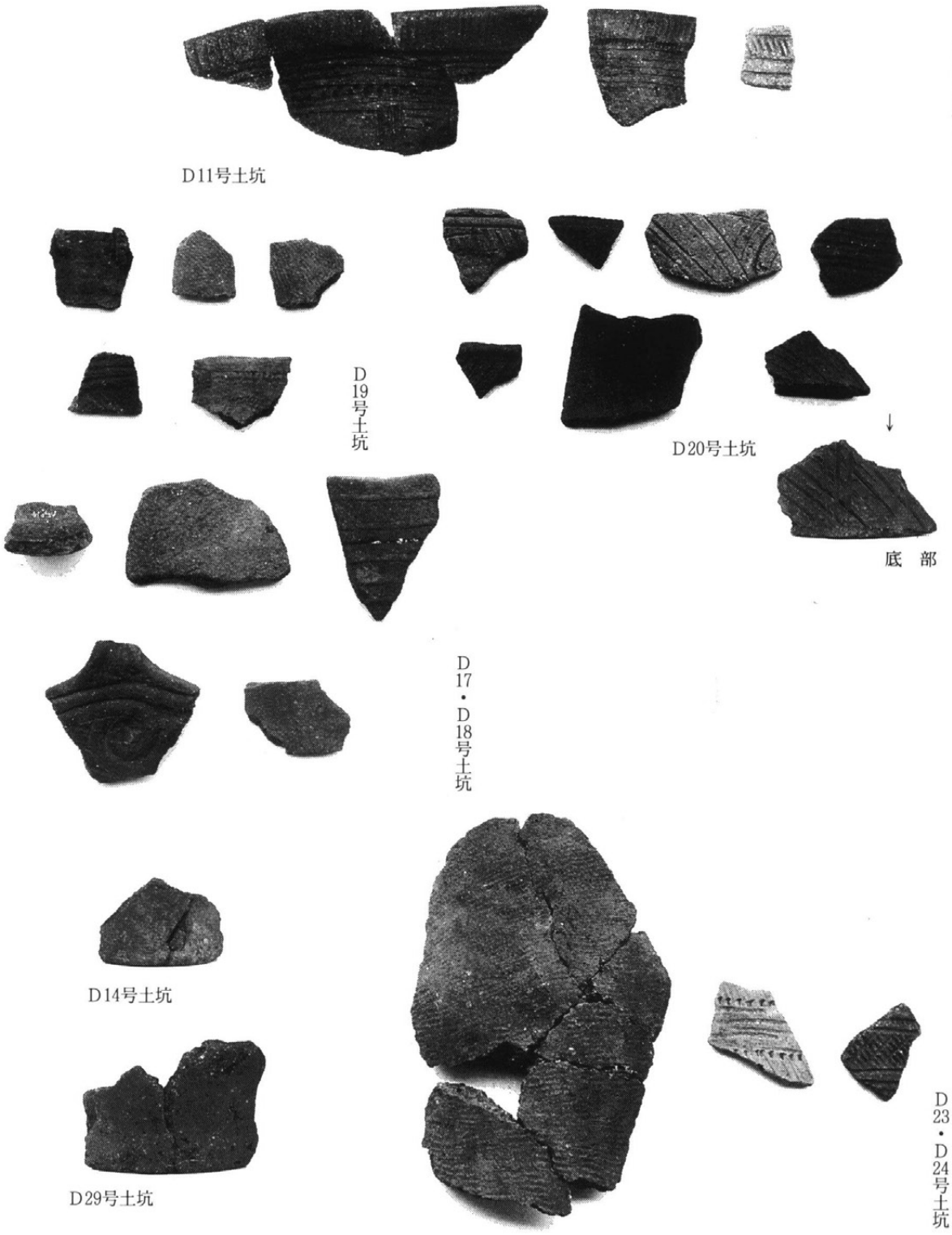
D３号土坑

D３号土坑



D５号土坑

1．D１号・D３号・D５号・土坑出土土器



1．D11・14・17・18・20・23・24号土坑出土土器

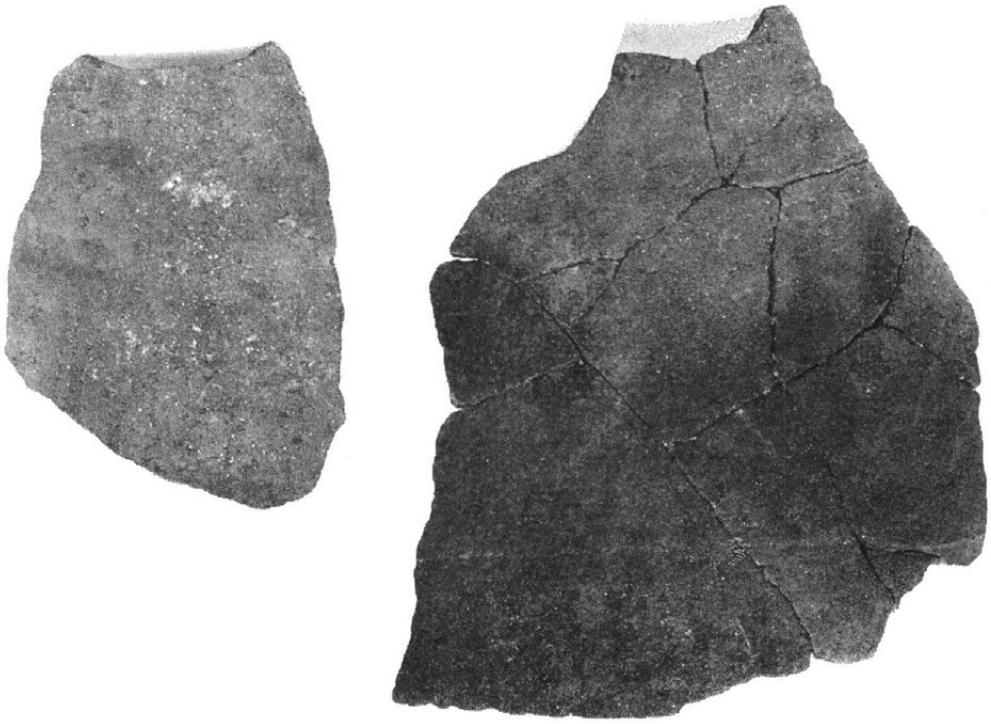
図版16

1・D29号土坑出土土器

2．D31号土坑出土土器

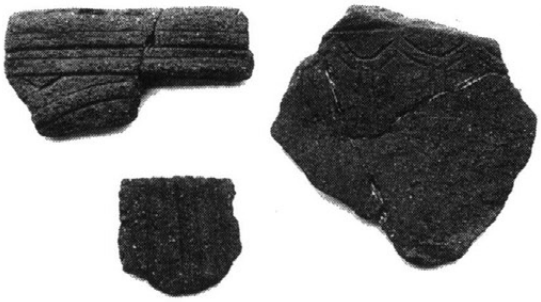
図版17

1・D27号・D29号土坑出土土器接合

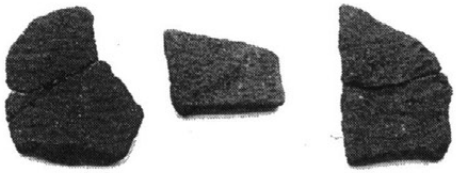


2．D30号土坑出土土器

図版18



D30号土坑



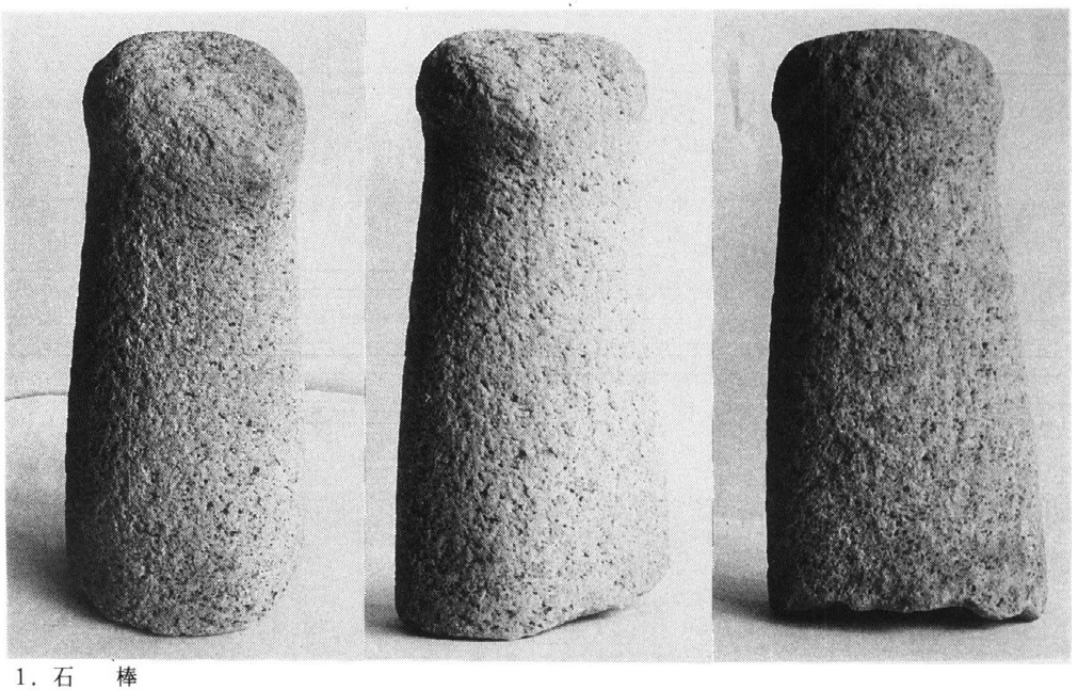
D32号土坑

D34号土坑

表面採集

D35号土坑

1．D30号・D32号・D34号・D35号土坑・表面採集土器



1．石　棒

2．石棒の根元

3．石　鏃

4．穴沢遺跡出土の石鏃・石錐

図版20

第1次発掘調査スナップ

小雨の中現地説明会に訪れた町民の皆さん

説明に耳をかたむける

石棒をのぞきこむ

第2次発掘調査地鎮祭

第2次発掘調査スナップ

1．発掘調査スナップ

小海町埋蔵文化財調査報告書第6集

穴沢遺跡

発行日　平成7年3月20日

編集者　穴沢遺跡発掘調査団

発行者　小海町教育委員会

印刷所　臼田活版株式会社